

拓殖大学大学院 言語教育研究科
言語教育学専攻 博士論文

格助詞「を」のコア・イメージとその用法の構造
— 三つの基本用法を中心に —

2015 年

指導教授：石川 守 教授

孫逸珊

目次

序論.....	1
1-1 研究動機	1
1-2 研究方法.....	2
1-3 本研究の構成.....	2
2. 格助詞「を」の先行研究.....	4
2-1 格助詞についての諸説と定義.....	4
2-2 辞書、参考書等における格助詞「を」の用法の分類.....	7
2-2-1 辞書における「を」の用法の分類.....	7
2-2-2 参考書等における格助詞「を」の用法の分類.....	21
2-2-3 辞書・参考書における格助詞「を」の用法の分類の問題点.....	29
2-3 「を」格における表層格と深層格の関係とコア・イメージ.....	30
2-4 森山新『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』から見た「を」格の用法.....	31
3. 格助詞「を」の基本用法.....	32
3-1 はじめに.....	32
3-2 対象.....	32
3-2-1 直接的な対象	32
3-2-2 一方向・多方向（全方向）.....	33
3-2-3 移動対象・再帰的移動対象.....	35
3-2-4 認知（知覚）・思考・感情の対象.....	38
3-3 実現目的・目標.....	47
3-3-1 実現目的・完成物・所有権.....	47
3-3-2 目標・方向・到達.....	49
3-4 出発・移動・通過.....	49
3-4-1 出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「出る」について.....	51
3-4-2 出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「落ちる」について.....	75
3-4-3 出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「おりる」について.....	88
4. 結論.....	106
4-1 今後の課題.....	128

謝辭.....	129
參考文獻.....	130
參考資料—動詞—覽表.....	138

序論

1-1 研究動機

日本語初級学習者にとって、格助詞の使用は最も難しい項目の一つである。学習者が最初に接触する格助詞の一つが「を」である。しかし、一見単純そうに見える「を」格も実は様々な用法を持っており、最も多い『明鏡国語辞典 第一版』で、合計 20 種に分けられている。『新明解国語辞典第 6 版』では格助詞の用法は 5 種に分けられている。『岩波国語辞典第 7 版』では 5 種、『大辞林』では 8 種、『学研国語大辞典第二版』では合計 8 種に分けられている。また、『学研現代新国語辞典改訂第四版』では、合計 17 種に分けられている。『角川国語大辞典』では 4 種、『日本語大辞典第二版』では 7 種に分けられている。さらに先行研究を見ると、『動詞の意味的文法研究』（1989）では他動詞における「を」格は 13 種、自動詞における「を」格は 9 種に分けられている。このように「を」格に関する分類は多いが、その分類の関連性は明らかではない。

例えば、「を」格の用法はいくつにも分類されているが、先行研究では、特にその中の一つである「対象」という用法についての分類が非常に多く、また、説明も曖昧でわかりにくい。例えば、『明鏡国語辞典』では、「対象」の用法だけでも 14 種にも分けられている。『動詞の意味的文法研究』（1989）では、ヲ格を取る自動詞の用法と他動詞の用法の二つに大きく分類されており、そのうち、自動詞の用法は 8 種に分けられ、他動詞は 12 種にも分けられている。また、「目的」と「対象」とを分けてはいるが、その区別もはっきりしない。『明鏡国語辞典』では、「働きかけを受ける物事を対象として示す（対象目的語）」例「石を投げる」としている。すなわち、対象であるが、しかし、「《下に生産や発生を表す動詞を伴って》動作・作用の及ぼされた後の物事（＝生産物や変化の結果）を対象として示す（結果目的語）」とし、例として、「家を建てる」を挙げている。しかし、「家」は働きかけを受ける物事ではなく、その行為の結果、最終的に実現されるものであり、言い換えれば、目的なのであり、「目的」という別の分類を立てるべきであろう。このように分類は多いにもかかわらず、重要と思われる分類が成されていないことも多い。

さらに、格助詞「を」の使い方の中で、出発点を表す場合には「を」格も「から」格も使える。筆者の修士論文「移動動詞と格助詞「を」「から」の意味構造に関する研究」（孫逸珊、2011）においては、出発点の「を」と「から」の違いについて焦点を絞り、研究を行った。例えば、格助詞の「を」と「から」は「東京駅を出発する」と「東京駅から出発する」というように両者ともに使える。この出発点の「を」と「から」の違いを用例から分析した。その結果、前者が出発後の移動（進む）というイメージを含むのに対して、「から」には、そのようなイメージはなく、出発点の選択、あるいは限定という機能を持つものであるという結論を得た。この研究を発展させ、日本語の格助詞「を」と「から」につい

てさらに研究を進め、同時に動詞「出る」、「落ちる」、「おりる」との関わりについて考察する。

同一文の「を」から「から」への置き換えの可能性を修士論文執筆時に調査したが、その調査の結果、出発移動動詞が最も多く置き換えられることがわかった。その出発移動動詞の中でもよく置き換えられる移動動詞が「出る」であることがわかった。従来の研究において両者を比べる際に提出されている移動動詞「出る」の出現頻度が高く、両者ともに使える用例も少なくないことがわかった。そこで、両者ともに使える場合のニュアンス、場面による差異について詳しく考察した。さらに、離脱動詞「落ちる」、「おりる」をも考察していく。

本論文では、これらを更に発展させ、より深く考察を行い、そして、「を」格の様々な用法に共通するコア・イメージを明らかにし、このコア・イメージと「を」格の様々な用法との全体的な構造を明らかにし、日本語学習者の「を」格の用法をイメージ図式化して、理解と習得の一助となることを目指した。

1-2 研究方法

本研究では、まず、格助詞「を」に関する文献と資料をもとに、先行研究を系統的に分析・整理し、助詞、格助詞の定義、さらに「を」格の用法がどのように取り扱われているかを明らかにし、先行研究の問題点を洗い出した。

さらに、先行研究の用例の選択と分析が思いつきで、恣意的に行われている傾向があるため、国立国語研究所の調査『現代雑誌九十種の用語用字 第一冊総記・語彙』（1962）から全動詞を抽出し、さらに、『日本語基本動詞用法辞典』（1989）に出ている動詞をくわえ、1168語からなる動詞の一覧表を作った。この動詞一覧表の「あ」から始め、その語に関する「を」格の用例を、現代日本語書き言葉均衡コーパス、Yahoo やグーグルの検索を利用し、収集して分析を行った。そして、その中から特徴的なものを取り出し分析を行い、用法のカテゴリー化を行い、さらに、それらを下位区分した。

これらのカテゴリー化した用例と先行研究を基に新たに用法を分類し、それぞれの用法を分析した。さらに、他の置き換え可能な格助詞とのニュアンスの違いを分析し、個々の用法の分析などを通して個々の用法のイメージ図式を示し、共通するコア・イメージを明らかにした。

1-3 本研究の構成

本論文の第1章においては、「研究動機」、「研究方法」、「本研究の構成」について述べた。

第2章においては、「格助詞「を」の先行研究」を行った。2-1の「格助詞についての諸説と定義」では格助詞とは何かについて、大槻文彦の『広日本文典』（1897）山田孝雄は『日本口語法講義』（1922）

橋本進吉『国語法要説』(1934) 時枝誠記『日本語文法口語篇』(1950) 『大辞林』(1995) 『国語大辞典 第二版』(1995) 『大辞泉』(1998) 『日本語学辞典』(1998) を用い、格助詞とは何かについて、分析を行った。2-2「辞書、参考書等における格助詞「を」の用法分類」では、『明鏡 国語辞典 第一版』、『新明解国語辞典第六版』、『岩波国語辞典第7版』、『大辞林』、『学研国語大辞典第二版』、『角川国語大辞典』、『日本語大辞典 第二版』、『学研現代新国語辞典 改訂第四版』などの代表的な辞書を取り上げ、分類を行った。また、参考書などにおける「を」格の用法について、一般的には、ごく簡単に触れているものが多い中で、詳しく述べている『基礎日本語2 (1980)』、『動詞の意味的文法研究 (1940)』、『文法の基礎知識とその教え方 (1991)』の3冊を取り上げ、その用法について分類し、分析を行った。

2-3の「森山新『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』では、認知言語学から見た「を」格の用法について分析した。

第3章の「格助詞『を』の基本用法」においては、国立国語研究所の調査『現代雑誌九十種の用語用字 第一冊総記・語彙』(1962) から全動詞を抽出し、さらに、『日本語基本動詞用法辞典』(1989) に出ている動詞を加え、1168語からなる動詞の一覧表を作り、それを基に、先行研究を参考しながら、様々な格助詞と結びつけながら、分析を行い、その中から特徴的なものだけを取り上げ、格助詞「を」に関し、「対象」、「目的」、「場所」という三つの大きな基本用法を抽出した。

3-2では「対象」を取り上げ、それらをさらに、「直接的な対象」、「一方向・多方向(全方向)」とに分け分析した。さらに、「移動対象・再帰的移動対象」「認知(知覚)・思考・感情の対象」に分け分析した。

3-3では、「目的」を取り上げ、「実現目的・目標」に分け、さらにそれを「完成物・所有権」、「方向・到達」とに分け考察した。

3-4においては、「場所」を取り上げ、それらを「出発・移動・通過」の三つのカテゴリーに分け、「場所」に関する「を」格について論じた。さらに、このうち「出発点」に関しては、「を」格と「から」格と置き換え可能な動詞のうち、調査の結果、出現率が高かった「出る」、「落ちる」、「おりる」を選び、細かく分析した。

第4章では、第3章の分析結果をまとめ、それらに共通するコア・イメージを抽出し、すべての「を」格の用法を体系化した。

以上が本論文の構成である。

2. 格助詞「を」の先行研究

2-1 格助詞についての諸説と定義

格助詞の定義は以下のように示されている。

大槻文彦は『広日本文典』（1897）は助詞について、次のように述べている。

助詞という名称は近世以来の「てにをは」（弓爾乎波）という名で呼ばれており、(略)、テニヲハをその用法によって次のように三種類に大別している。

第一類：名詞にのみ属くもの。「名詞のテニハ」というべきもの。「が」「の」「に」「を」「と」「へ」「より（から）」「まで」（8語）[「から」は「より」の項に含まれる]。

第二類：種々の語に属くもの。上に各種の後を承けて、その意を下なる動詞、形容詞、

助動詞に通ずる。「は、ば、も、ぞ、なむ、なも、し、こそ、だに、すら、さへ、のみ、ばかり、や、か」

第三類：動詞にのみ属くもの。上下ともに動詞、あるいは形容詞、助動詞に接する。「動詞のテニハ」というべきもの。「ば、と、とも、ど、ども、に、を、が、て、にて、にして、とて、として、して、で、つつ」

大槻文彦は『広日本文典』（1897）

山田孝雄は『日本口語法講義』（1922）で、格助詞について次のように述べている。

格助詞とは、体言又は副詞に付属して、それが他の語に対して有する一定の関係を示すものを言う。格助詞に属すものは、文語では、「の」「が」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」、口語ではそれらにさらに「で」が加わると述べている。

山田孝雄『日本口語法講義』（1922）

『日本語の書くと文法—結合化理論にもとづく新提案』（2007）では、山田孝雄の格助詞のうち、「ガ、ヲ、ニ」の用法について、山田は「ノ、ガ、ヲ、ニ、ヘ、ト、ヨリ、カラ、デ」の9つの格助詞の中から「ガ、ヲ、ニ」を取り上げ、次のような用法と用例を提示している。

① 「が」は用言に対して主語になる語を示す。

例「花が咲く」

② 「ヲ」は動詞に対してその作用の影響を被る目標を示すもの。

例「本を読む」

③ 「ニ」は体言に付属して、それが静的目標であることを示す。

例「人に物をやる」

『日本語の書くと文法—結合化理論にもとづく新提案』

(2007)

山田は、以上の格助詞の他に、「ハ、モ、コソ、サエ、デオ、ホカ、シカ」などを係り助詞とし、「係り助詞は用言に関係する語に付いて、その陳述に勢力を及ぼすもの」と説明している。

松下大三郎『標準日本口語法』(1930)では、助詞という言葉は使わずに、「格助辞」という言葉を使い、「格助辞とは詞の断続に関する資格を表すもの」としている。この格助辞を「体言の格助辞」と「用言の格助辞」の二つに分けている。この体言の格助辞とは、「が」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「の」の八つであり、用言の格助辞とは、「て」「ば」「と」「とも」「って」「ども」の六つであるとしている。

橋本進吉『国語法要説』(1934)は、「格助詞」とは、「從属的（或は主客的）關係で用言的のものにつづき、これを承ける文節の意味を詳しくするもの」と述べている。橋本は、いわゆる連体詞を副体詞と呼び、それに準じて、「の」を準副体助詞と呼び、以下のようなものを挙げている。

格助詞：「が」「を」「に」「と」「へ」「より」「で」「から」（8語）

準副体助詞：「の」

係助詞：「は」「も」「こそ」「さえ」「でも」「なりと」「しか」「ほか」

時枝誠記『日本語文法口語篇』(1950)では、助詞を次のように四つに分けている。

1. 格を表す助詞：事柄に対する話手の認定の中、事柄と事柄との関係の認定を表現するものであるから、感情的なものではなく、殆どすべてが理論的思考の表現である。「が」「は」「の」

「に」「へ」「を」「と」「から」「より」「で」「まで」

2. 限定を表す助詞
3. 接続を表す助詞
4. 感動を表す助詞

時枝誠記『日本語文法口語篇』(1950)

『大辞林』(1995)では、格助詞について、助詞の一類であり、体言また体言に準ずる語について、その体言が他の体言に対して、どのような関係に立っているかを示すものであるとしている。そして、「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「で」を挙げている。

『国語大辞典 第二版』(1995)では、

格助詞とは、助詞の一種であり、体言または体言に準ずるもの下について、その文節とそれを受けると語との格関係を示すものであるとしている。その例として、格助詞「が」「の」「に」「を」「へ」「と」「から」「より」「で」「まで」を挙げている。

『大辞泉』(1998)では、

格助詞について、助詞の一種であり、体言または体言に準ずるものに付いて、それが文中で他の語とどのような関係にあるかを示す助詞であるとしている。格助詞の例として、「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「で」を挙げている。

『日本語学辞典』(1998)では、格助詞とは、「文中において体言に付き、それが主格であるのか、目的格であるのか、またどういう格であるのかを示す助詞」としている。格助詞の例として、「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「で」「や」を挙げている。

先行研究での格助詞の分類を以下の表1に示す。

表1 「先行研究での格助詞の分類」

大槻文彦	「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「より (から)」「まで」
山田孝雄	「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「で」「より」「から」
松下大三郎	「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」

橋本進吉	「が」「を」「に」「へ」「と」「で」「から」
時枝誠記	「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「で」「より」「から」「まで」 「は」
『大辞林』	「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「で」「より」「から」
『国語大辞典 第二版』	「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「で」「から」「より」「まで」
『大辞泉』	「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「で」「から」「より」
『日本語学辞典』	「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「で」「から」「より」「や」

以上、結論として、格助詞とは、これらの先行研究から、名詞につき、その名詞が文中の述部に対してどのような関係を持っているのか、すなわち格を表すものであるという結論を得た。そして、格助詞に何を入れるかということは上記の表からわかるとおり各研究においてやや異なっているが、「を」格はすべての研究において、格助詞に含まれていることがわかった。

2.2 辞書・参考書等における格助詞「を」の用法の分類

2.2-1 辞書における「を」の用法の分類

すべての辞書は格助詞「を」の用法を分類しているが、本研究においては、『明鏡 国語辞典 第一版』、『新明解国語辞典第六版』、『岩波国語辞典第7版』、『大辞林』、『学研国語大辞典第二版』、『角川国語大辞典』、『日本語大辞典 第二版』、『学研現代新国語辞典 改訂第四版』などの代表的な辞書の分類を示す。

『明鏡 国語辞典 第一版』では、「を」格の用法について、一として、下に他動詞を伴って、動作・作用の担い手を表す「～が」とともに、「その動作・作用の成立に必要な物事（＝動作・作用の対象）を表す」として、アからセまでの14の用法を挙げている。

その第一の用法として、まず、アの用法として、「働きかけを受ける物事を対象として示す」とし、「対象目的語」と名付け、「石を投げる」「肩をたたく」「本を読む」「芋を掘る」「荷物を棚に載せる」「ロープを川の向こう岸に渡す」「インターネットで部屋を探す」「弓で矢を放つ」などの用例を示している。また、「リンゴの皮をむく」「彼の肩をたたく」「エースの球を打つ」などを挙げ、「直接働きかけを受ける部分を対象とする」と述べ、また、「リンゴをむく」「彼をたたく」「エースを打つ」などの用例を挙げ、その全体や所有者を対象とすることも出来る（換喩法）と述べている。

次に、イの用法として、「働きかけに用いる道具や手段と成る物事を対象として示す」とし、「道具目

的語」としている。そして、「鉄砲を撃つ」「弓を放つ」「ワープロを打つ」「望遠鏡をのぞく」「壁にペンキを塗る」「辞書を引く」などの用例を挙げている。これはアで挙げた「鉄砲で鳥を撃つ」「矢を放つ」「単語を引く」など用例に類似しているが、これらの「を」は、ア。「働きかけを受ける物事を対象として示す（対象目的語）」であるとしている。

さらに、ウは、「動作・作用の及ぶ場所を対象として示す」として「場所目的語」と名付けている。そして、「裏山を掘る」「庭を掃く」「[物捜しで] 部屋の中を捜す」「黒板を消す」「壁をペンキで塗る」などの用例を挙げている。そして、「裏山で山芋を掘る」「庭の落ち葉を掃く」「なくした財布を捜す」「壁にペンキを塗る」などの例を挙げ、これらの場合の「を」は「ア. 働きかけを受ける物事を対象として示す」ものであるとして、アの「対象目的語」であるとしている。

エは、「《下に生産・発生・消滅等を表す動詞を伴って》変化する前の物事（原料や材料）を対象として示す」として、「対象目的語」に分類している。この用例として、「卵をかえす」「水を沸かす」「木を炭で焼く」「毛糸を手袋に編む」「丸太をいかだに組む」「黒板の字を消す」「大金を費やす」などを挙げている。

オは、「《下に生産や発生を表す動詞を伴って》動作・作用の及ぼされた後の物事（＝生産物や変化の結果）を対象として示す」とし、「結果目的語」と述べている。その例として、「紙でツルを折る」「卵からひなを炊く」「家を建てる」「地面に穴を掘る」「字を書く」「ホームランを打つ」「企画を立てる」「浴衣を縫う」「毛糸のセーターを編む」「やぐらを組む」「向こう岸に橋を渡す」「事件を引き起こす」「災害をもたらす」を挙げている。

そして、このオは、しばしば「おいしいパンを焼く　パンをおいしく焼く」のように結果の状態を表す修飾語が連体となっても連用となっても同じ意味になると述べている。また、「パンを焼く」という例を挙げ、「パン種を焼いてパンを作る」と、「すでにあるパンをトーストにする」という二つの意味になるということを指摘している。ちなみに、その「パン種を焼いてパンを作る」は、オの「《下に生産や発生を表す動詞を伴って》動作・作用の及ぼされた後の物事（＝生産物や変化の結果）を対象として示す」となり、「すでにあるパンをトーストにする」はエの「《下に生産・発生・消滅等を表す動詞を伴って》変化する前の物事（原料や材料）を対象として示す」となる。

「お茶をいれる」も急須のお茶を湯飲みに入れる場合は、ア「働きかけを受ける物事を対象として示す（対象目的語）」となり、飲み物の「お茶」を作る一連の動作の場合はオの「《下に生産や発生を表す動詞を伴って》動作・作用の及ぼされた後の物事（＝生産物や変化の結果）を対象として示す」となる。

「穴を掘る」も、新たに作る場合は「深い穴を掘る＝穴を深く掘る」のように、オの「《下に生産や

発生を表す動詞を伴って》動作・作用の及ぼされた後の物事（＝生産物や変化の結果）を対象として示す」意味になるが、すでにある「穴」については、「この穴を深く掘る≠この深い穴を掘る」のようにオにはならないとしている。

カは「《下に知覚や思考を表す動詞を伴って》知覚や思考の及ぶ物事を対象として示す」とし、「対象目的語」に分類している。その例として、「望遠鏡で星を見る」「クラシックを聞く」「国家の行く末を考える」「結果を知る」などを挙げている。

キは「《下に判断や認定を表す動詞や動詞「する」を伴って、「・・・を・・・に（して）の形で》評価や見立てがなされる物を対象として示す」とし、「対象目的語」に分類している。その用例として、「彼を犯人と見なす」「報告を事実だと断定する」「彼女を弟子として遇する」「本を枕にして眠る」「伯父を頼りにして上京する」「学生を対象にした雑誌」などを挙げている。また、「・・・にして」の「して」が省略され、「地図を頼りに駅まで行く」「千店を目標に全国展開を図る」「これを手元に一勝負する」のように、「・・・を・・・に」という形で、「付帯的な状況を表す連用修飾語になる場合がある」と述べている。

クは「動作や作用を行う立場や役割を対象として示す」とし、「役割目的語」と名付けている。つまり、「・・・の立場で」、「・・・として」という意味を表し、「委員長を務める」「議長をつかさどる」「調停役をこなす」「四番を打つ」「ハムレットを演じる」「カルメンを歌う」などの用例を挙げている。

ケは「《下に感情や感覚を表す動詞を伴って》情意をもたらす原因を対象として示す」とし、「対象目的語」に分類している。「報復を恐れる」「戦争を憎む」「幽霊を怖がる」「合格を喜ぶ」「彼の死を悼む」「やりすぎを反省する」「日光をまぶしがる」などを挙げている。

コは「動作・作用の向かう先や方向を対象として示す」とし、特に分類はしていないが、ケの用法を見ると、このコもおそらく「対象目的語」に分類しているのではないだろうか。用例としては、「この家は南を向いている」「勝利を目指す」「磁針が北西を指す」「『山』という語が『山』という対象を指示する」などを挙げている。

サは「《「・・・をする」の形で、動作・作用などを表す名詞を受けて》「する」によって生み出される動作性を帯びた物事を対象として示す」とし、「レストランで食事をする」「数字の勉強をする」「着替えをする」「待ち合わせをする」「あくびをする」などを挙げている。そして、「食事 [旅行・勉強・損]」のように、「を」が省略される場合も多いと述べている。

シは「《「・・・をする」の形で、状態や職業を表す名詞を受けて》「する」によって生み出される状態性を帯びた物事を対象として示す」とし、「汚い格好をしている」「面白い形をした家」「教師をしてい

る」などを挙げている。そして、「時計をしている」「マスクをする」のように一時的な状態や動作を表す場合もあると述べている。

スは「《動詞と同じ内容を表す名詞を伴って》 その動作の結果として作り出されるものを対象として示す」とし、「同族目的語」と名付けている。「民謡を歌う」「ワルツを踊る」「選挙戦を闘う」「マラソンを走る」表現「幸福な生涯を生きる」「苦い笑いを笑う」などを挙げ、「翻訳臭のある表現」も多いとしている。

セは「《自動詞+使役の助動詞「(さ)せる」の形で》使役を受けるものを対象として示す」とし、「子供を待たせる」「犬を闘わせる」「親を困らせる」「子供を死なせる」などを挙げている。「子供を／に待たせる」では、「に」よりも「を」の方が「対象の意向を無視して一方的な働きかけをなす傾向が強い」と述べている。

2の「を」格は、1が他動詞を伴うのに対して、自動詞を伴う「を」格の用法であり、「《下に移動や時間の経過を表す表現を伴って》移動にかかわる場所や動きにつれて過ぎゆく時間を表す」ものであり、アからキまでの7つの用法を挙げている。

アは「《下に継続的な移動を表す動詞を伴って》移動の経路を表す」としている。その用例として、「道を歩く」「グランドを走る」「トンネルを抜ける」「我が道を行く」などを挙げている。また、「先頭を走る」「トップを行く」のように、移動の相対的位置を表す言い方もあると述べている。

イは「《下に移動の開始や経路の変更などを表す動詞を伴って》起点・離脱点・回避点などを表す」と述べ、「門を出る」「席を離れる」「訪問先を辞する」「四つ角を曲がる」「脇道を入る」「コースをそれる」「水たまりを避ける」「攻撃をかわす」などの用例を挙げ、「から」に置き換えられることが多いと述べている。また、「十数年故郷を離れている」「三日間家を出ている」「昨日大学を出た」「会社を辞める」「現役を退く」「理事長の職を辞める」など、「実際の移動ではなく、主体の状態や経歴を表す」とも述べている。このような場合は「から」に置き換えられないことが多い。

ウは「《下に、ある段階に至ることで動きの展開を特徴付ける動詞を伴って》動きの展開の基準となる点を表す」と述べている。その用例として、「土俵を割る」「一線を越える」「百人を割る」「10秒を切る」「平均を上回る」「株価が千円を割り込む」などを挙げている。

オは「《下に時間の経過を表す動詞を伴って》経過した期間や時点を表す」としている。その用例として、「混沌の時代を生きぬく」「不惑の年を越える」「三時を過ぎる」「今をときめく」などを挙げている。

カは「《下に時間の経過を表す動詞を伴って》ある状態で過ごされる時間を表す」と述べている。その用例として、「不遇の一生を送る」「年月を経る」などを挙げている。

キは「《下に不在を表す動詞を伴って》不在の場世や不参加催しなどを表す」とし、2イの「《下に移動の開始や経路の変更などを表す動詞を伴って》起点・離脱点・回避点などを表す」が転じた言い方で、離脱した場所に注目している」と述べている。その用例として、「学校を休む」「初場所を休場する」「会議を欠席する」「授業をさぼる」などを挙げている。

3は「動作・作用が行われる周りの状況を表す」としている。その用例として、「雨の中を横断歩道を駆け抜ける」「吹雪の中を搜索を続行する」などを挙げている。

4は「《「なにを」+動詞+「か」などの形で》」としている。→3。

二. [接助] 文語 逆接の確定条件を表す。・・・のに。

「大雨の折にも車の贅はやられぬ身成しを、一念発起して帽子も靴も取って捨て（一葉）」表現「のに」に比べて、論理関係を述べる力が弱く、詠嘆の趣がある」と述べている。

『新明解国語辞典第六版』では、次のように述べている。

一. (格助)

1. その動作・作用の及ぶ対象や結果がどういうものであるかについて示す。「子供を泣かせる／本を読む／湯を沸かす／教えを請う／家、貧にして良妻を思う／恩を売る／御託を並べる／彼をたより道を求め続ける／もっと光を／目には目を、歯には歯を／お買い物には当店を」
2. 移動性の動作の行われる場所がどこであるかについて示す。「わが道を行く／道の右側を歩く／山道を登る／階段をおりながら／角を曲がる／舟で川を渡る」
3. 向く方向について示す。「上を向いて歩こう」
4. どこが起点となってその動作が行われるかについて示す。「毎朝八時に家を出る／それは六時をちょっと回ったころだった／車をおりる／故国を離れて三年／師の許を去る」
5. その動作・作用が継続期間について示す。「一日を日曜大工で過ごす／毎日毎日を猫を相手に暮らす／寝たっきりで五年を送る／今を盛りと咲き乱れる」

二. (終助)

[雅] 感動の気持ちをこめて、それを取り上げることを表わす。

「なたぬの大きさをおはせしを／ただしこの玉たはやすくえとらじを」

三. (接助)

[雅] ある事柄を提示して、それに関連の有る叙述に結びつけることを表わす。

「よくもあらぬ形を [=姿であるのに] 深き心も知らで／あすは物忌なるを [=物忌だから] /門強くさせよ」

『岩波 国語辞典第7版』では、

一. 【格助】動作・作用の対象となるものを動的に見て示すのに使う。起原は(二)の間投助詞の「を」。「をも」「をこそ」のように係助詞をとともなっても言うが、「は」を伴う時には語形が「をば」になる。なお(1)のようほうの「注射をする」ノ主語が多くの場合に「医師」ではなく、(2)の「家を建てる」も、必ずしも大工の動作を言うのではないという点に注意。

① 動的意味の動詞が表す動作・作用の向けられる対象を示す。

「本を読む」「花をめで鳥をうらやむ」「議論を重ねる」「舞台で主役をやってみたい」使役も他動的

だから、「匹夫を(して)立たしめる」のようにも使う(→を_{して})。「勉強をする」「議論をする」などは、勉強・ゲロン自体も動作だが、

「する」から見ればその対象。自動詞でも、それが表す状態に何かを対象として強く意識した場合には、「世をすねて暮らす」「何をあわたるのか」のように言える。また「激しい戦闘を闘う」「苦難の人生を生きる」などは欧文翻訳から生じた言い方。

ア.《活用語の連体形に続けて》・・・(する、である)ことを、の意に使う。

「口にするをはばかりのような事件」「事無きを得た」「やむを得ず金を貸してやった」「一步後退さざるを得ない」文語で連体形が体言相当の働きもしことの名残。

イ.《「AをBに・・・」などの形で》AをB(の状態)にして・・・。

「娘を相手に話し込む」「世情をよそに自適する」「金を懐に勇んで町に出る」「湖を前に、山を背に、守るには絶好の場所だ」「地図をたよりに山道を進む」「おとなしいのをいいことに、何

度も金を借りに来た」「に」のところが文脈に応じて次のように変えられる。「当たるを幸いなぎ倒す」「ぬぎかけた着物ををそのまま（に）ふり向いた」「桜が今を盛りと咲き誇る」「うそを承知でうなづく」「泣きを覚悟（の上）で引き受けた仕事」「土俵を命の力士」

②動作・作用が働いた結果であるものを示す。

「湯を沸かす」「詩を作る」「家を建てる」「攻撃をかける」「百を数える小鳥が点在する」、計算する意の「そろばんを入れる」などもこの用法。

③《移動に関する動詞と共に使って》起点、経過するとき・所、相対的位置、または限界を示す。

「席を立つ」「家を離れる」「空を行く雲」「夏を軽井沢で過ごす」「年を経た松」「川を越える」「峠を越した」「乱世を生き延びる」「先頭を進む」「一番手を走る」「二万円の大台を割り込む」本来は移動の意でない動詞でも、文脈によっては「眼の前を小の影がひらめいた」のようにつかうことがある。「を」でも「に」でも言える場合、意味に次のような違いがある。「野を行く」と「野に行く」とでは、後者がその野を静的目標としてとらえ、それを目当てに進むことを言う（従って野に到達すれば概ね進行を止めるだろう）のに対し、前者はその野を動的目標としてとらえ、例えば野のなかを動いて行くとか野を横切って更に進むとかすることを表す。「庭を出る」は庭から外部（例えば屋敷に沿う道）に出ることを言い、「庭に出る」は家野中（例えば庭に面した座敷）から庭に出ることを言う。

④ 心情を表す語と共に使って》心情の対象を示す。

「君を好きだ」「あんなきざな男をおれは嫌いだ」「学校での勉強をいやになったのは」（4）には本来「が」を使う。

この用法が進んで、心的な働きに関する「社長が彼を気に入ったのは」なども使うようになった。

二. [間助]《普通は「ものを」の形で。本来は「を」だけでも》感動を込めた語調にする。

「言ってくれば助けたものを」「何をっ、生意気な」→ものを。

『大辞林』では、

1. 動作・作用の対象を表す。「本を読む」「講演を終わる」
2. 使役表現において動作の主体を表す。「子供を泣かせないようにして下さい」「今年こそ美しい花を咲かせよう」

3. 移動性の動作の経過する場所を表す。「いつもの道を通る」「大空を飛ぶ」
4. 動作・作用の行われる時間・期間を表す。「この一年を無事に生きてきた」「今を盛りに咲く」
5. 動作の出発点・分離点を表す。
「毎朝九時に家を出ます」「バスを降りてから五分ほど歩く」「故郷を離れる」
6. 希望・好悪などの心情の向けられる対象を表す。現代語では「が」も用いられる。「水を飲みたい」
「君を好きな人はずいぶんいるよ」
7. (サ変動詞とともに用いられて)「…を…として」「…を…にする」「…を…にして」など、さまざまな表現のしかたをつくる。「首相をはじめとして、大臣がずらりと並ぶ」「ひとの失敗を他山の石とする」。
8. 動詞と同じような意味をもつ名詞に付いて、一種の慣用句をつくると述べている。

『学研国語大辞典 第二版』では、

①他動詞の動詞を伴い

- イ. 動作・作用が直接に及ぶ対象を示す。「球を投げる」「本を読む」「子供を遊ばせる」
- ロ. 動作・作用によって作り出される対象を示す。

「吾等夫婦、島より此処に移りて此家を建て今の業をはじめぬ (国木田・源叔父)」

②移動・経過を表す動詞を伴い

- イ. 動作・作用が成立する場所・経路を示す。「山を越える」「列車が駅を通り過ぎる」
- ロ. 経過する時間を示す。「昼休みを読書ですごす」「長い年月を経る」

③分離を表す動詞を伴い、分離の対象を示す。「大学を出る」

④好悪・願望などの心情を表す述部を伴い、それらの心情の向けられる対象を示す。

「水を飲みなさい」「夫の万吉が酒の肴に味増漬を好きで、(壺井・暦)」と述べている。

『角川 国語大辞典』では、

- ①動作・作用を受けるものを示す。動作の目的・対象を示す。「本を読む」
- ②動作の行われる場所や時を示す。「町の中を川が流れる」「この土地で五年を過ごした」
- ③動作の出発点・分離点を示す。「朝八時に家を出る」
- ④〇古「別る」「逢う」「背く」などの動作の対象を示す。「たらちねのははを別れて」〔万・二〇・四三
四八〕と述べている。

『日本語大辞典 第二版』では、

- ①動作・作用の対象を示す。「音楽を聞く」「ボールを投げる」
- ②動作・行為の目的・結果を示す。「お湯を沸かす」「穴を掘る」
- ③通過点・経過する場所を示す。「大海原を行く」「橋を渡る」
- ④経過する時間を示す。「一週間を無駄に過ごす」
- ⑤起点を示す。「空港を出発する」「電車を降りる」「学校を卒業する」
- ⑥方向を示す。「ゴールをめざす」
- ⑦好悪・願望などの心情の向けられる対象を示す。現代語では、「が」が使われることも多い。「水を飲みたい」「彼女を好きな男は多い」と述べている。

『学研現代新国語辞典 改訂第四版』では、

- ①《他動詞の動詞を伴い》対象を表す。
 - ア. 主体の動作・作用が直接的におよぶ対象。

「火を消す」「ガラスを割る」「小包を送る」「手を洗う」「機械を動かす」「子供を使いに行かせる」
 - イ. 精神的働きかけの対象。

「海を見る」「先輩を敬愛する」「友の死をいたむ」「休暇を楽しむ」
 - ウ. その動作・作用によって結果的に作り出されるもの (=作品)。

「家を建てる」「手袋を編む」「仏像をほる」「本塁打を打つ」「お湯をわかす」「歌を歌う」「ダンスをおどる」

参考ウは「・・・を」に、いわゆる結果目的語をとるもの。「歌を歌う」「ダンスをおどる」などは、同属目的語をとった例で、内容を表す「真実を語る」「嘘をつく」などとともに、ここに位置づけられる。なお、「棒を立てる」「糸を編む」「本をほる」「直球を打つ」などは「ア. 主体の動作・作用が直接的におよぶ対象」の意。「四番を打つ」は「カ. 主体の演じる役割」の意。
 - エ. 使用・操作する対象としての道具。「鉄砲を撃つ」「ピアノを弾く」参考「鳥を撃つ」は「ア. 主体の動作・作用が直接的におよぶ対象」の意。『月光の曲』を弾く (=演奏して作品を作る) は「ウ. その動作・作用によって結果的に作り出されるもの (=作品)」の意。
 - オ. 動作・作用の向かう対象としての道具。「庭をはく」「ペンキで壁をぬる」参考「壁にペンキをぬ

る」は「ア. 主体の動作・作用が直接的におよぶ対象」の意。「漆喰で壁をぬる (=作る)」は「ウ. その動作・作用によって結果的に作り出されるもの (=作品)」の意。「庭の落ち葉をはく」は「ア. 主体の動作・作用が直接的におよぶ対象」の意。

カ. 主体の演じる役割。

「ハムレットを演じる」「委員長を務める」「カルメンを歌う」「四番を打つ」

参考「校歌を歌う」は「ウ. その動作・作用によって結果的に作り出されるもの (=作品)」の意。

キ. 動作・作用の向かう対象としての方向。「西を向く」「磁針が北を指す」「青年は荒野をめざす」

②《自動性の動詞が同属目的語を伴う形で》自動詞を一時的に他動詞化するのに使う。

〔他動詞化して示すことによって、より細密・簡潔な表現を得ることが多い。なお、この場合、①ウにいう「作品」の意は希薄となる〕 「苦難の人生を生きる」「決勝戦を闘う」「縄跳びを一〇〇回もとんだ (=縄跳びをして、一〇〇回もとんだ)」「マラソンを走る (=マラソン競技に参加して走る)」

参考この種の表現には、「不幸な死を死ぬ」「贅沢な悩みを悩む」など、翻訳者のある言い方も多い。なお、「高齢化社会を生きる」は「6. ア. 移動する場所を表す。また、経過点を表す」の抽象的用法。

「マラソンコースを走る」は「6. ア.」の意。

③《「何を・・・か」などの形で、自動詞を伴い》問題点 (の原因・理由) を聞くのに使う。

また、反語に使う。何について・・・か。なぜに・・・か。どうして・・・なのだろう。

「何を泣いているの?」「何をもめているんだ」「何を大騒ぎすることがあろうか」

参考他動詞を伴う場合 (例、何を食べようか・何をつくろうか) は、「ア. 主体の動作・作用が直接的におよぶ対象、ウ. その動作・作用によって結果的に作り出されるもの (=作品)」の意。

④《感情の表現で、形容動詞・形容詞を伴い》感情の向けられる対象を表す。

「心から君を好きだ」「にえ切らない君を私はきらいだ」

参考近年「ほしい」「恋しい」「したわしい」などでも「を」を使うことがあるが、一般には「が」を使う。特殊な文脈では「が」よりも「を」が普通である場合もある (だれがだれを すきだっ?)。

⑤《「・・・をする」の形で、動作性・行為性・名詞を伴い》その動作・行為を行う意を表す。

「早起きをする」「英語の勉強をする (=英語を勉強する)」「彼女に恋をする」

参考「手袋をして出かける」「青い目をした人形」など、「する」の意味・用法が形式化したもので、移動性・経過性を伴わない言い方もある。

⑥《移動・経過を表す自動詞を伴い》

ア. 移動する場所を表す。また、経過点を表す。

「道を歩く」「街頭を歩く」「空を飛ぶ」「東京を經由して日光に行く」「峠をこえる」「門をくぐ

る」「三遊間をぬく」

参考「高齢化社会を生きる」「人生の修羅場を潜り抜ける」「当局の審査を経る」などは、これを抽象的に使ったもの。

また、「雨の中を横断歩道をかけぬける」などのように「状況」を表す言い方もある。

イ. 相対的位置を表す。

「先頭を走る」「トップを行く」

ウ. 経過する時間を表す。また、時間的な経由点を表す。

「昼休みを読書で過ごす」「ねむれぬ夜を明かす」「日々を気ままに送る」「今を時めく大作家」「思春期を経て大人になる」「もう一二時を過ぎた」

エ. 基準となる境界線を表す。

「土俵を割る」「三〇度を超える」「平均点を上回る」「一〇〇人を下らない」

⑦《離脱を現す自動詞を伴い》離脱点を表す。[多く、起点を表す「から」で言い換えることができる]

「部屋を出る」「故郷をはなれる」「大学を卒業する」「会社を辞める (=退職する)」「現役を引退する」「コースをそれる」「水たまりをさける」「攻撃をかわす」「非難をまぬかれる」

参考「水たまりから身をさける」「攻撃から身をかわす」と言えば他動詞表現。「会社を辞める」は

「《離脱を現す自動詞を伴い》離脱点を表す」の意の自動詞だが、「たばこを止める」は「①

《他動詞の動詞を伴い》対象を表す」の意の他動詞。「就任を辞退する」「申し出を遠慮する」

なども、遠ざかりの表現としてここに位置づけられる。

⑧《不在を表す自動詞を伴い》不在の場所や不参加の催しなどを表す。[離脱の結果としての不在に注目して言う]

「学校を休む」「春場所を休場する」「例会を欠席する」「授業をさぼる」

参考自動性の強い可能・受け身表現や、形容詞化した願望・難易の表現では「が」とも。「新幹線が／を利用できる」「勲章が／を授与された」「酒が／を飲みたい」「話が／を理解しにくい」→が(格助)と述べている。

以下の表2は辞書における「を」格の用法の数をまとめたものである。

表2「辞書における「を」格の用法の数」

『明鏡 国語辞典 第一版』(2002)	『新明解国語辞典 第六版』(2005)	『岩波国語辞典第7 版』(2009)	『大辞林』 (1995)
対象・結果 14種 移動・経路 6種 合計 20種	格助 5種	5種	8種
『学研国語大辞典 第二版』(1988)	『学研現代新国語辞典 改訂第四版』(1994)	『角川 国語大辞典』 (1982)	『日本語大辞典 第二版』(1995)
対象 4種 移動・経過 2種 合計 8種	対象 7種 他 6種 移動・通過 4種 合計 17種	4種	7種

以下の表3は辞書における「を」格の用法の分類をまとめたものである。

表3「辞書における「を」格の用法の分類」

その動作・作用の成立に必要な物事 (=動作・作用の対象) を表す	移動にかかわる場所や動きにつれて過ぎゆく時間を表す (以下の用法をもつ動詞は自動詞)	動作・作用が行われる周りの状況を表す	《「なにを」+動詞+「か」などの形で》
働きかけを受ける物事を対象として示す (対象目的語)	移動の経路を表す		
働きかけに用いる道具や手段と成る物事を対象として示す (道具目的語)	起点・離脱点・回避点などを表す		
動作・作用の及ぶ場所を対象として示す (場所目的語)	動きの展開の基準となる点を表す		
変化する前の物事 (原料や材料) を対象として示す (対象目的語)	経過した期間や時点を表す		
動作・作用の及ぼされた後の物事 (=生産物や変化の結果) を対象として示す (結果目的語)	ある状態で過ごされる時間を表す		
知覚や思考の及ぶ物事を対象として示す (対象	不在の場世や不参加催しなどを表		

『明鏡 国語辞典』	目的語)	す		
	評価や見立てがなされる物を対象として示す (対象目的語)			
	動作や作用を行う立場や役割を対象として示す (役割目的語)			
	情意をもたらす原因を対象として示す (対象目的語)			
	動作・作用の向かう先や方向を対象として示す			
	「する」によって生み出される動作性を帯びた物事を対象として示す			
	「する」によって生み出される状態性を帯びた物事を対象として示す			
	その動作の結果として作り出されるものを対象として示す。(同族目的語)			
使役を受けるものを対象として示す				
『新明解国語辞典第6版』	格助	終助	接助	
	その動作・作用の及ぶ対象や結果がどういうものであるかについて示す	感動の気持ちをこめて、それを取り上げることを表わす	ある事柄を提示して、それに関連の有る叙述に結びつけることを表わす	
	移動性の動作の行われる場所がどこであるかについて示す			
	向く方向について示す			
	どこが起点となってその動作が行われるかについて示す			
その動作・作用が継続期間について示す				
他動的意味の動詞が表す動作・作用の向けられる対象を示す	動作・作用が働いた結果であるものを示す	起点、経過するとき・所、相対的位置、また	心情の対象を示す	

『岩波国語辞典 第7版』	《活用語の連体形に続けて》・・・す (する、である) ことを、の意に 使う 《「AをBに・・・」などの形で》A をB (の状態) にして		は限界を示す					
『大辞林』	動作の目的・ 対象	使役表現において動 作の主体	移動性の 動作の経 過する場 所	動作・作 用 の行われ る 時間・期 間	動作の 出発 点・分 離点	希望・好悪な どの心情の向 けられる対象	サ変動詞 とともに 用いられ	慣用句
『学研国語 大辞典第二版』	動作・作用の 対象	動作・作用によって 作り出される対象	動作・作 用が成立 する場 所・経路	経過する 時間	分離の 対象	好悪・願望な どの心情を表 す述部		
『角川国語 大辞典』	対象		動作の行 われる場 所		動作の 出発 点・分 離点	「別る」「逢 う」「背く」 などの動作の 対象		
『日本語大辞典 第二版』	主体の動作・ 作用が 直接的におよ ぶ対象	動作・行為の目的・ 結果	通過点・ 経過する 場所	経過する 時間	起点	好悪・願望な どの心情の向 けられる対象	方向	
	対象 精神的働きかけの対象 その動作・作用によっ		移動する 場所 相対的位 置	経過する 時間 基準とな る境界線	離脱点	感情の向けら れる対象	その動 作・行為 を行う	不在の場 所や不参 加の催し など

『学研現代新国語辞典改訂第四版』	て結果的に作り出されるもの						
	使用・操作する対象としての道具						
	動作・作用の向かう対象としての道具						
	主体の演じる役割						
	動作・作用の向かう対象としての方向						

以上、見たように辞書における「を」格の用法に関する分類はあまりに多く、また、並列的に述べられており、その関連についてはほとんど述べられていないことがわかる。さらに、用法が対象に集中しており、「目的」と「対象」が区別されていないもの、移動の場所に関する用法にまったく触れていないものも多い。また、同じよう例でも、その解釈は大きく異なっていることがわかる。

2-2-2 参考書等における格助詞「を」の用法の分類

以上、辞書の用法についてまとめたが、次に「を」格の用法については、多くの研究書は一般的簡単に触れているものが多いが、詳しく述べているものとして、『基礎日本語2 (1980)』、『動詞の意味的文法研究 (1944)』、『文法の基礎知識とその教え方 (1991)』が挙げられる。ここでは、これらの研究書に述べられている用法について、まとめることにする。

『基礎日本語』(1980)では、「を」格の用法を次の11個に分類している。1. 動作・作用の向けられる対象を示す場合。例：「的を射る」「本を読む」「病気を治す」「ガラスを磨く」「教室を掃除する」「彼女を愛する」「敵を撃つ」2. 動作・作用を実現する事物を対象として示す。例：「弓を射る」「かんなを掛ける」「のこぎりを引く」「箸を使う」「鉄砲を撃つ」。3. 動作・作用が与えられる対象を示す。例：「矢を射る」「光を投げ掛ける」「涙を流す」「ペンキを塗る」4. 動作・作用の結果、成立する事物を示す。例：「壁を塗る」「手紙を書く」「絵を描く」「茶碗を焼く」「ご飯を炊く」「湯を沸かす」「お茶を入れる」「電気を起こす」「夢を見る」「風呂をたてる」5. おこなう行為そのものを示す。例：「仕事を行う」「治療を施す」「世話を焼く」「計算をする」「合図を送る」6. 離反や移動の行為の起点を示す。

す。例：「家を出る」「故郷を離れる」「席を立つ」「車を降りる」「親の手を離れる」7. 経由点例：「門を出る」「溝を飛び越える」「丘を越えていこうよ」「A点からB点を通ってC点へと延びる線」8. 経過する場所や時を示す例：「道を行く人」「空を飛ぶ」「橋を渡る」「海を泳ぐ」「崖をよじ登る」「階段をおりる」「廊下を歩く」「夏休みを過ごす」「正月を故郷で送る」「現代を生きる」9. そのものが占める移動行為の場所（ポジション）を示す。例：「しんがりを走る」「先頭を進む」10. そのものの取る方向を示す。例：「上を向いて歩こう」「しょんぼりと下を向く」「呼ばれたほうを向く」11. 程度の基準を示す。例：「四十度を超える暑さ」「一万人を上回る参加者」「予想を下回る」「申し込みは定員を切ってしまった」「株価は千円の大台を割った」と述べている。

特に、時間、人間、場所については、次のように説明している。

1. 時間・期間・数量を表す語に付いた場合

①経過時間を表す

「夏休みを送る」「学生時代を過ごす」「青春を送る」「待ち時間を過ごす」

②時間・期間・数量の基準を表す

「産地市場で一キロ三十円のサバも、小売り値一キロ百五十円を超えるというぐあいである」「年間百を上回る美術団体が、ここで展覧会をおこなっている」「延々十時間を超える団体交渉に双方疲労の色が見えてきた」

③所要の時間・金額・人数・数量などを表す

「十か月を見込む」「百万円を費やす」「延べ一万人を使う」「多くの時間をかける」

④数量を持つ事物を行為の対象として表す

「百メートルを十秒で走る」「千円を四人で分ける」「教科書五百人分を学校に届ける」「米十キログラムを袋に入れる」

2. 人間を表す語に付いた場合

①使役の対象

「あるいは聴衆を笑わせ、あるいはしんみりさせる話術に、時のたつのも忘れて聞き入った」

②行為の対象。「息子を頼る」「息子を呼ぶ」

③使役行為の対象。「夫は妻に息子を叱らせた」

3. 場所を表す語に付いた場合

①出発または離れ去る動作の起点を表す

「汽車で上野駅を発ち、四時に家に帰り着く」「事務所は玄関を入れてすぐ右側です」「太陽は地平線を離れた」

②移動動作の経過する場所を表す

「大雨の中を頭からぬれひたって銀座通りを歩いて、だれもとがめる人もない」(寺田寅彦『田園雑感』)「きぜわしくホームを行き来する駅弁売り」「ガーデンハウスからやや下仁田寄りを左折して三十分歩くと、神津山荘に着く」

「パリを流れるセーヌ川」と述べている。

『基礎日本語』(1980)

『動詞の意味的文法研究』(森田 1994)では、ヲ格を取るといわれている自動詞の用法と他動詞におけるヲ格の用法の二つに分類している。

ヲ格を取ると自動詞の分類として次のものを挙げている。

1. 基準の対象を示す

「餓死者は千人を超えたと、郷土誌の記録にあった。」(水上勉「寺泊」)

「平均点を下回る」「予想を上回る」「人力を超越する」

2. 多動性を帯びる自動詞の対象や目標を示す

ア. 心情を表す動詞を伴って

「身もだえして身の不運を泣き・・・」(学研国語大辞典)

「成功を焦るな」「身を悶える」「田舎暮らしを侘びる」(日漢辞典)

「なぜなら、私たちが怒ったのは今度から米を買いに行く者がいないからです」(壺井栄「母のこと」)

「その愚を笑う」「悲しみを堪え忍ぶ」(日漢辞典)

イ. 習慣的な行為を表す動詞を伴って

「雑木林や平らな耕地の多い武蔵野へ来る冬、浅々とした感じのよい都会の霜、そういうものを見慣れている君に、この山の上霜をお目にかけてたい。(島崎藤村「千曲川のスケッチ」)

ウ. 意志的な行為を表す動詞を伴って

「規約改正を急ぐ」(学研国語大辞典)

「いたずらに死を急ぐことはどんな面から考えても無意味である」(学研国語大辞典)

「工事を急ぐ」(岩波日中辞典)

「友達と当番を代わる」「電話を替わる」「作業を交替する」

3. 自動性の動作・作用の行われる時間や距離の幅・長さを示す

ア. 時間の経過をある状態で過ごすことを表す

「三田から春日町までの、ある長工場を、彼はどんないらいらした心持ちで乗ったことだろう」(菊池寛「出世」)

「彼はまた巣鴨から三田までの長い線路を東京のほとんどはしからはしを、頼りない不快で乗った、(「出世」)

イ. 動作の経過する時間を表す

「その砂丘の上に、ひよろひよろした赤松が簇がって生えている。余り年を経た松ではない」(森鷗外「妄想」)

ウ. 動作進行の時期を表す

「今をときめくスター」(岩波日中辞典)

「戦争の時代を生きる」

「この世を生き抜くためにどうすることがよいか、・・・」(学校図書『中学国語1』)

エ. 行為の継続する期間・距離を表す

「海外で1年間を送る」「六ヶ月を故郷で過ごす/暮らす」「あれから一週間を経た」

「百メートルを走るのに何分かかるか」

4. 動作・作用の実現する場面を示す

ア. 心理活動の反復の場面を表す

「思いが脳中を去来する」(日漢辞典)

イ. 動作の行われる環境を表す

「厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年あまりになる故郷へ、私は帰って行った」(魯迅「故郷」竹内好訳)

「雨の繁吹く中を駆けつける」(日漢辞典)

ウ. 移動動作の経過する場所を表す

「道を行く人」

「例の厭な音が頭の上を飛ぶのだ」(田山花袋「一兵卒」)

5. 動作の経由点を表す

「門を出る」

「僕らは地川の橋を渡り、東家の土手を歩いて行った」(芥川龍之介「蜃気楼」)

6. 動作の起点を表す

「自分は慌てて落ちている帽子を冠り、衣服の塵を払って汽車を下りた」(永井荷風「フランス物語」)

「彼はそう思って、書齋を出て行った」(志賀直哉「好人物の夫婦」)

「ああ、故郷を去って以来四年の旅路に、自分は今まで此様美しい景色に接した事はない」(「フランス物語」)

「彼が田舎の中学を出て、始めて東京へ来たとき、最初に入った公共の建物は、やっぱりの図書館であった」(菊池寛「出世」)

「東京の学校を退いて国へ帰る、其帰途のことであった」(学研国語大辞典)

「列を抜ける」(新明解国語辞典)

「舞台を退く」(日漢辞典)

7. 動作の方向を表す

「僕はちょっとびっくりし、僕らの後ろを振り返った」(芥川龍之介「蜃気楼」)

「細君は下を向いた俣、返事をしなかった」(志賀直哉「好人物の夫婦」)

8. 移動動作・作用の基点を表す

「角を曲がる」「地球は太陽を巡る」「池の周りを回る」

9. 移動動作・作用の位置を表す

「集団のトップを走る」「一行のしんがりを行く」

他動詞における「を」格の意味用法として、次の1から13を挙げている。

1. 精神作用・感情の指向もしくは原因を表す

「成功を願う」「故郷を思う」「合格を喜ぶ」「祖父の死を悲しむ」

2. 行為の内容を表す

「結婚を約束する」「将来を話し合う」「正解を教える」

3. 理解の対象を表す

「本を読む」「ラジオを聞く」「相手の顔を見る」

4. 動作・作用の及ぶ対象を表す

「木を植える」「手を洗う」「本を開く」「鞆の中を調べる」「豆を碾く」「木を挽く」
「石炭を燃す」

5. 行為の相手を表す

「友人を誘う」「人を愛する」「友達を待つ」「父をくどく」

6. 付加行為・加工行為の対象を表す

「水を交ぜる」「水を加える」「薬を塗る」「塩をまぶす」「ペンキを塗る」

7. 行為を向ける場所・箇所を表す

「顔を隠す」「傷口を覆う」「扉を塗る」「的を射る」

8. 行為の及ぶ容れ物を表す

「コップを空ける」「家を空ける」「袋を満たす」

9. 行為実現に必要な間接的道具を表す

「臼を碾く」「弓を射る」「鋸を挽く」

10. 行為実現に必要な直接的材料を表す

「矢を射る」「釘を打つ」「錠を掛ける」

11. 消費する事物を表す

「年を取る」「油を食うエンジン」

12. 行為の目標を表す

「優勝を争う」「優勝をねらう」「先を争って逃げる」

13. 行為・作用の結果を表す

「仏像を彫る」「火を燃す」「粉を碾く」「湯を沸かす」「家を建てる」「有終の美を飾る」「好位
置を占める」と述べている。

『動詞の意味的文法研究』（森田 1994）

『文法の基礎知識とその教え方』（1991）では、「を」格の用法を次の四つに分けている。①体言に付いて、その体言が、述語（他動詞）の表す動作・行動の対象や内容であることを示すとし、次の「ご飯を食べる」「水を飲む」「本を読む」などの用例を挙げている。

②の用法として、結果を表す「を」を挙げている。例えば、「お湯を沸かす」という言い方を挙げ、「水」を沸騰させて、その結果として、生じたもの、そして、できたもの、得られたものが「お湯」であることを「を」が示しているという。そして、次のような例を挙げている。「シャツを縫う」「ご飯を

炊く」「天ぷらを揚げる」「家を建てる」「ダムを建設する」「技術者を養成する」などである。

③は「通る・移動する・通過する」などといった意味を表す動詞が付き、その場合、「を」は、場所・空間を表す単語に付いて「通過する場所・空間」を示すと述べている。例として、「山を越える」「坂を上がる／下る」「川を上る／下る」「山道／崖を登る」「コーナーを回る」「角を曲がる」「この道を行く／来る／帰る／戻る」「道を横切る／横断する」「工場を案内する」「北海道を旅行する」「列車が踏切を通過する」などを挙げている。

④は、「出る」や「離れる」といった意味を表す動詞が付き、その場合、「を」はその文の中の場所を表す語について、「出る場所」「離れる場所」などを表すと述べている。例えば、「わたしは、毎朝、8時にうちを出ます」「わたしは大学を卒業したら、父の仕事を手伝うつもりです」「国を離れる」「国を去る」などである。また、「学校を休む」という言い方も「学校に到達しない」「学校から離れている」という意味であり、この「を」も同じ意味・用法と考えて良いと思うと述べている。

また、「を」格のその他の用法として、①方向を表す「私の部屋は南を向いています」②経過した時刻や時間を表す「わたしは日本で5年を過ごしました」を挙げている。

以下の表4は先行研究における「を」格の用法の分類をまとめたものである。

表4「先行研究における「を」格の用法の数」

基礎日本語2 (1980)	対象 11種	
動詞の意味的文法研究 (1944)	自動詞 8種	合計 20種
	他動詞 12種	
『文法の基礎知識とその教え方』 (1991)	4種	

表4-1「先行研究における「を」格の用法」

基礎日本語2 (1980)	動詞の意味的文法研究 (1940)	『文法の基礎知識とその教え方』 (1991)
対象 動作・作用の向けられる対象	自動詞 基準の対象 多動性を帯びる自動詞の対象や目標	述語 (他動詞) の表す動作・行動の対象や内容
動作・作用を実現する事物を 対象	自動性の動作・作用の行われる時間	

動作・作用を実現する事物を 対象	や距離の幅・長さ	結果を表す「を」
動作・作用の結果、成立する 事物	動作・作用の実現する場面	
おこなう行為そのもの	動作の経由点 動作の起点	通過する場所・空間
離反や移動の行為の起点	動作の方向 移動動作・作用の基点	
経由点	移動動作・作用の位置	
経過する場所や時	他動詞	
そのものが占める移動行為の 場所 (ポジション)	精神作用・感情の指向もしくは原因 行為の内容 理解の対象	
そのものの取る方向	動作・作用の及ぶ対象	
程度の基準	行為の相手	
	付加行為・加工行為の対象	
	行為を向ける場所・箇所	
	行為の及ぶ容れ物	
	行為実現に必要な間接的道具	
	行為実現に必要な直接的材料	
	消費する事物	
	行為の目標	
	行為・作用の結果	

以上、参考書における格助詞「を」の用法の分類を見てきたが、辞書と同様に、分類があまりにも多く、また、同じ用例に対して、異なる解釈を与えているなど問題点が多いことが分かった。

2-2-3 辞書・参考書における格助詞「を」の用法の分類の問題点

上で辞書と参考書の用法の分類を見てきたが、同じ用例に対して、異なる解釈を与えているなどの問題点があることを指摘した。例えば、『学研現代新国語辞典 改訂第四版』(1994)では、「鉄砲を撃つ」は「使用・操作する対象としての道具」としている。しかし、同じ、「鉄砲を撃つ」に関して、『基礎日本語2 意味と使い方』(1980)では、「動作・作用が与えられる対象を示す」としており、ともに「対象」であるが、解釈の基準がはっきりしない。さらに、「壁を塗る」の用例では、『明鏡国語辞典』では、「動作・作用の及ぶ場所を対象として示す(場所目的語)」と述べているが、『学研現代新国語辞典 改訂第四版』では「対象としての道具」としている。また、『基礎日本語2』では、「動作・作用の結果、成立する事物」とし、仁田義雄(1997)では、「対象(変化)」としている。さらに、『学研現代新国語辞典 改訂第四版』(1994)では、「ペンキで壁をぬる」は「動作・作用の向かう対象としての道具」としているが、『基礎日本語2 意味と使い方』(1980)では、同じ「ペンキで壁をぬる」は、「動作・作用の結果、成立する事物を示す」としている。田中茂範氏の『空間と移動の表現』(1997)日英語比較選書(6)では、「壁を塗る」「ペンキを塗る」の「壁を」と「ペンキを」との関係は、「壁を」は操作子機能のレベルでは(塗る動作が作用する対象)であると述べ、意味づけによって分けて言えば、「壁を」は〈場所〉、「ペンキを」は〈手段〉として解釈されると述べている。「壁を塗る」と「壁に塗る」あるいは「ペンキを塗る」と「ペンキで塗る」が全く同一事態を表しているわけではないということとは注意しておく必要があるとしている。

このような同じ用例であるが、異なる解釈で混乱しやすいため、「を」格の分類を再検討する必要があると思われる。

また、「本を読む」という同じ用例であるが、『明鏡国語辞典』では、「働きかけを受ける物事を対象として示す(対象目的語)」としている。『大辞林』では、簡単に「対象」としており、『新明解国語辞典第6版』では「その動作・作用の及ぶ対象や結果がどのようなものであるかについて示す」としている。『岩波国語大辞典第7版』では、「他動的意味の動詞が表す動作・作用の向けられる対象を示す」としており、『学研国語大辞典第二版』では、「直接に及ぶ対象」としている。『角川国語大辞典』では「動作の目的、対象」としており、『基礎日本語2』では「動作・作用の向けられる対象」としており、『動詞の意味的文法研究』では、「理解の対象」としている。ただ対象としか書かれていない場合は、その具体的な内容はよく分からない。実際にどのような対象なのか、また本当そうであるのか、不明である。また、多くの用

法との関連も不明であり、全体として「を」格の用法が一体どのような関連性、構造を持っているのか明らかにし、新たな分類と解釈を立てる必要があると考える。

2-3 「を」格における表層格と深層格の関係とコア・イメージ

2-2においては、辞書、参考書などの用法の分類について見てきた。ここでは、それらとはやや異なった観点から格助詞「を」について、『日本語における表層格と深層格の対応関係』（1997）を用いて見ていくことにする。

「表層格」と「深層格」という考え方は、チャールズ・J. フィルモア（1975）がチョムスキーの「深層構造」、「表層構造」に対して、提示した考え方に基づく。チョムスキーはすべての言語に共通する人間の精神の最も深いところに、人間すべてに共通する言語構造があるとして、それを「深層構造」と名付けた。これに対して、フィルモアは京都大学留学中に日本語に触れ、すべての言語に共通する人間の精神の最も深いところに、人間すべてに共通する言語的なものを構造ではなく、格であると考え、この「深層格」というものを提示した。この考えに触発され、1980年代から90年代に多くの研究が行われた。これらの研究は、もともと日本語の格構造の研究に基づくものであり、日本語の格を考えるうえで重要な観点となり得るものである。

この考え方では、「表層格」はチョムスキーの「表層構造」と同様に各言語によって異なる。例えば日本語の表層格「を」は英語においては文の構造によって「目的語 (O)」という言葉、SV0、SV00という構造で示される。日本語においてはもちろん格助詞「を」で表される。これに対して、深層格は「目的格」、あるいは「対象格」という言葉で表される。これらの深層格は、個々の言語とは、関係なく人間の言語的な精神活動の事物の普遍的な関係を表している。この独立した精神内部の深層格と個々の言語の表層格とが言語の格の働きを生み出している。この考え方は、「格助詞」が何を表しているのかを考えるうえで大きなヒントとなる。

ただ、本論文では、個々の格助詞は独自の基本的なイメージ、すなわちコア・イメージのようなものを持ち、個々の動詞と結びつくことによって、格の用法が生み出されると考える。

コア図式理論は、田中茂範が考案したものである。これは、従来のコア理論（Bennet 1975 ;Miller and Johnson-Laird 1976）に基づき、全ての用例に共通したものをコアと呼び、それを図式化したものをコア図式、あるいは、コア・イメージとしている。

2-4 森山新『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』から見た「を」格の用法

『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』森山新（2008）では、日本語のヲ格には以下のような用法があるとされている。

- ① 対格：「子供を殴る」「家を建てる」「本を貸す」「母を恋しがる」
- ② 場所：
 - a. 起点：「駅を出る」「故郷を去る」「大学を卒業する」
 - b. 経路：「道を渡る」「駅を通過する」「空を飛ぶ」
- ③ 状況：「太郎が雨の中を行く」「豪雨の中を敵と戦った」
- ④ 時：「思春期を経て大人になる」「4年間を仙台で過ごした」

そして、森山はヲ格のプロトタイプを「対格」であるとし、「場所」、「状況」、「時」の用法はそれらの拡張としている。そして、この「対格」の用法の特徴づけとして、「被動作主（PAT）などプロファイルされた動力連鎖や非対象的關係における末尾（tail）の参加者を表す」と、ラネカー¹の説を踏襲している。そして、「視点領域/対時領域」という用語を用いて、「を」格を表すものを「被動作主など、視点領域の受動的参加者」として、また、際立ちの面から「第二の際立ちが与えられた参加者（Im）」を表すとし、「を」格のプロトタイプとして「対格（被動作主、第二の際立ちが与えられた視点領域の参加者（Im）」を挙げている。そして、「を」のプロトタイプは「対格」の用法であり、そこから「場所」、「状況」、「時」が拡張されるという。そして、この「対格」と「場所」、「状況」、「時」とに共通するスキーマは「ガ格参加者を起点とする動力連鎖の終点に置かれ、その支配を受けている」ということである。つまり、「対格」の「受動的参加者」がメタファーにより、「場所」となる。さらに、「起点」、「経路」は移動の動詞のスキーマのプロファイルされる場所によって生じ、背景化されると考えている。以上が、森山の「を」格の認知言語学から見た分析である。

問題点は、以上に見たように、その用語も説明も極めて難解であり、日本語学習者ばかりではなく、日本語教師にとっても教授困難なものである。そこで、イメージ化などによって、日本語の語彙力のない学習者にとっても理解可能なイメージなどによって直観的な方法を考えるべきであろう。

¹ (Langacker1991a,1991b) 『Foundations of Cognitive Grammar.Vol2.Stanford:Stanford University Press』
『Concept,Image,and Symbol:The Cognitive Bases of Grammar. Berlin:Mouton de Gruyter.』

3. 格助詞「を」の基本用法

3-1 はじめに

この章では、国立国語研究所の調査『現代雑誌九十種の用語用字 第一冊総記・語彙』（1962）から全動詞を抽出し、さらに、『日本語基本動詞用法辞典』（1989）に出ている動詞を加え、1168語からなる動詞の一覧表を作った。その動詞一覧表を基に、先行研究を参考しながら、格助詞と結びながら、分析を行った。そして、その中から特徴的なものを取り上げ、格助詞「を」に関し、「対象」、「目的」、「場所」

という三つの大きな基本用法を抽出した。次に、この三つの基本用法について述べていくことにする。

3-2 対象

この「対象」の用法は他動詞の「を」の最も基本的な用法であると考えられる。この場合の「を」は動作主があるものに向かって動作を加えるときのそのあるものを示している。これが「を」の最も基本的な用法であると思われる。図示すれば以下の図1のようになる。

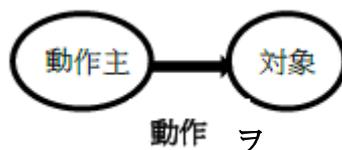


図1 対象

他動詞の「を」の用法はこの図1から拡張される。

3-2-1 直接的な対象

この格助詞「を」の最も基本的である「対象」はさらに、いくつかの下位分類される。その最もシンプルな用法は「直接的な対象」を表すものである。すなわち、動作主がある対象物に対して直接何らかの作用を加えるものである。例えば「ベビーカーを押す」、「おもちゃを壊す」、「ドアをたたく」、「野菜を切る」、「ご飯を食べる」などである。これらは図2に示されるような一方向から対象物に作用するという機能を持っており、「を」格はその作用の向かっていくところのものを指している。

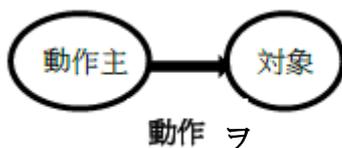


図2 直接的な対象「ベビーカーを押す」

3-2-2 一方向・多方向（全方向）

この直接的な対象物に向かう「を」の用法は、さらに二つに分けられる。一つは、上に述べた「一方向」からそれに向かうものである。そして、もう一つは「多方向」からあるいは「全方向」からその対象物に向かうものである。

一方向というのは、「ベビーカーを押す」のように、動作主が直接対象物に作用を加えるものである。しかし、多方向というのは、「犯人をみんなで囲む」というように、動作主が対象物に一方向から直接何か動作するわけではないが、複数の動作主が対象物に対して全方向から向かう動作を表している。つまり、「を」格は全方向からの動作が向かうところのものを表していると言える。

これを図示すれば、以下の図3のようになる。

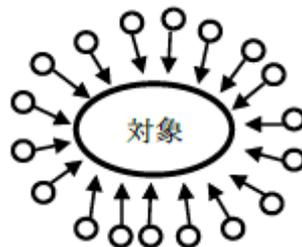


図3 多方向

この図を見てわかることは、犯人に対して、全方向、あるいは、多方向から向かっていくということを表していることがわかる。これに類似している用法としては、「畑を柵で囲む」という用例が挙げられるが、この場合、直接畑に向かっているような感じはしないが、この畑は必ず柵の内部にあり、外にはない。このことからやはり全方向から内側に存在するものに向かって行くものを表しており、「犯人を囲む」からの拡張であると考えられる。

次の「を」の用法は、上に挙げた「～を囲む」という用法が多数のものが全方向からその対象物に向かうというものであったが、一つの面的なものが全方向から一つのものに向かうところのそのもの（対象物）を表す用法である。例えば、「品物を包装紙で包む」、「おにぎりを（手で）握る」などである。図示すれば、以下の図4のようになる。

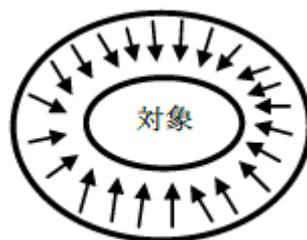


図4 全方向

この用法の一種として、「海苔でご飯を巻く」などが挙げられる。

これに対して、「車をカバーで覆う」、「捕った獲物を木の葉で隠す」などは、「犯人をみんなで囲む」「畑を柵で囲む」などの全方向からのものではなく、上方から、あるいは、ある方向から対象物に向かうものである。図示すれば、以下の図5のようになる。

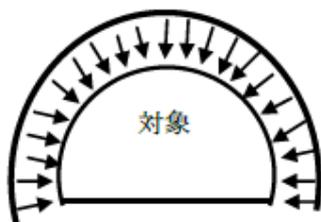


図5 上方からの全方向

以上のことをまとめると、「を」格は「動作・作用の直接対象」すなわち、動作・作用が一方方向、あるいは、多方向から直接向かうところのものを表していると考えられる。この「動作・作用の直接対象」の用法を図に示せば、以下の図6のようになる。

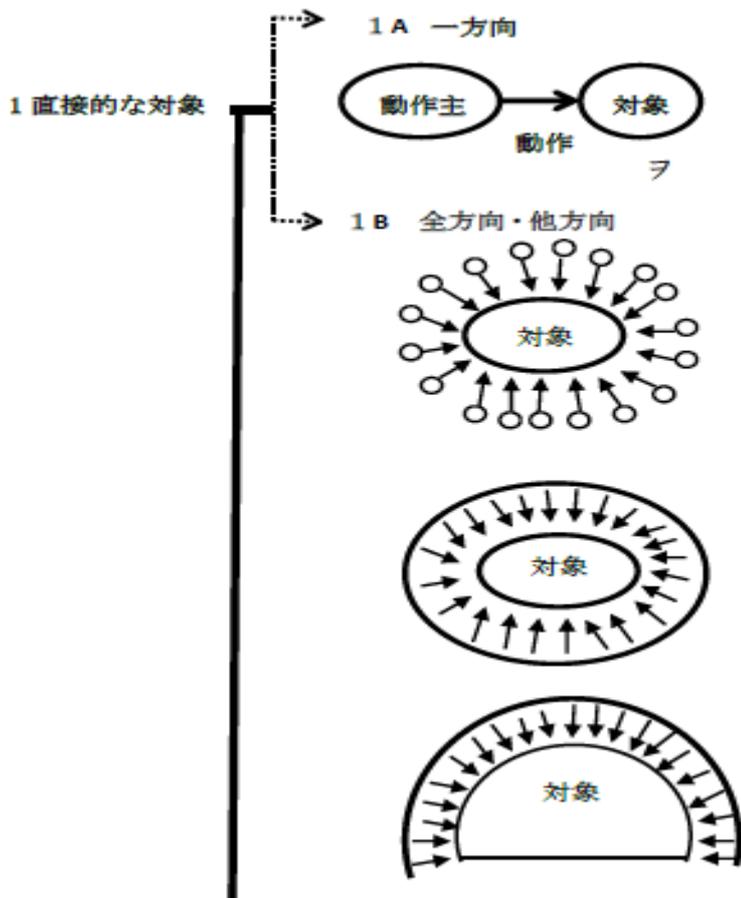


図6 一方向・全方向から

以上の「を」格の一方、及び、多方向、全方向からの用法をまとめると、一方、多方向、全方向のいずれも、何かに向かって進んでいくところのものを表すという共通点が存在することがわかる。つまり、一方、あるいは多方向、全方向に関わらず、すべてあるものに向かって行くところのものを「を」格が表しているということである。

3-2-3 移動対象・再帰的移動対象

次に、この動作の直接的な対象の一種と考えられるが、以上に挙げたものとは異なる構造を持ったものがある。例えば、「花に水をかける」という場合、この動詞「かける」対象は何かと人に問えば、「花」と答えるのが一般的であろう。「かける」対象は「水」と答える人はあまりいないのではなかろうか。しかし、「を」格が対象を表すとすれば、「かける」対象は「水」でなければならない。

それでは、この「花に水をかける」という行為の中で、「に」格が「かける」という行為の対象を表すとすれば、この文の中で、「を」格はどのような役割を果たしているのだろうか。さらに、「花に水をかける」という行為を細かく分析してみると、動作主が「水」を何らかの仕方で移動させ、花の上に移す行為と分析できる。この移動させるという行為の実際のエネルギー伝達の対象を「を」格が表しているものと考えられる。つまり、「を」格は、動作主が実際に移動させる移動物を示していることがわかる。そして、その移動物の到着点が花の上となり、この到着点が「に」格で表されている。この関係を分析してみると、「主体+移動物「を」+到着点「に」+移動の動詞」という図式が考えられる。すなわち動作主が対象物に直接作用を加え、対象物を移動させるものである。この移動の対象物が「を」格で表される。

この種の動詞としては、「投げる」、「かける」、「置く」、「入れる」、「あげる」、「しまう」などが挙げられる。この場合の「を」格は直接的にエネルギー伝達を行い、その位置を移動させる対象を表す。例えば、「ボールをキャッチャーに投げる」では動作主がボール（移動物）に対して、直接力を加え、ボール（移動物）をキャッチャーに移動させるということである。つまり、この場合「を」格は移動対象物である「ボール」を表していることがわかる。

また、「母にプレゼントする」も同様である。例えば「母の日に母にカーネーションをプレゼントする」という場合、プレゼントの対象がカーネーションであると考えられる人は少ないであろう。すなわち、プレゼントの対象は母であると考えられる人が多いのではなかろうか。この場合も、移動物の図式が適用できるだろう。つまり動作主がプレゼントである花（移動対象）に作用を加え、移動させ、母（到着）のもとに届けるということである。

この図式は、具体的な動作だけではなく、抽象的な動作でも使える。例えば「学生に日本語を教える」

という例である。この場合、動作主「教師」が自分の持っている日本語の知識を説明などの手段を使って、移動させ、学生に移すということであると考えられる。つまり、「教える」対象は「に」格で表される「学生」であり、「教える」内容は「を」格で表される「日本語」ということになる。

これらの場合、いずれも移動対象が「を」格で表され、到着点が「に」格で表されるという特徴を持っている。これは他動詞の移動動詞が一般的に持つ構造であると言えよう。例えば、「砂糖をコーヒーに入れる」、「テーブルの上にコップを置く」、「はんこを引き出しの中にしまう」などである。これらの用例に表れてくる「を」格で表されるものは、いずれも行為全体の対象とは言えないが、その行為の中に含まれる何か移動させるという動作の直接的エネルギー伝達の具体的な対象を示していることがわかる。

以下の図7のようになる。



図7 「母にをプレゼントする」

これらの場合、例えば、「花に水をかける」や「ボールをキャッチャーに投げる」や「母にカーネーションをプレゼントする」の対象は何であるかという場合、「かける」対象が花であり、「投げる」対象はキャッチャーであり、「プレゼントする」対象は母であると答えることが多い。このことは、いわゆる対象格が「を」格とは限らないことから生じているものと考えられる。日本語における対象格には、以下に示すように3種類のものがあると考えられる。

- 1 「を」格
- 2 「が」格
- 3 「に」格

1の「を」格の用例としては、「木を切る」、「りんごの皮を剥く」、「取っ手を引く」など動作の直接的な対象を表している。2の「が」格は「彼はフランス語が話せる」、「彼女が嫌いだ」、「私は水が飲みたい」など内的な能力や感情、欲求などの対象を表している。また3の「に」格は「私は最近田中選手に注目している」、「車に注意なさい」、「母はいつも私たちの健康に気を付けている」など意識の対象を示している。つまり、対象格は「を」格だけではなく、「が」格も「に」格もあることがわかる。この

ことから「花に水をかける」の対象が「花」になったり、「キャッチャーにボールを投げる」の対象が「キャッチャー」になったり、「母にプレゼントをする」の対象が「花」になったりするという現象が生じてきても不思議はない。

移動の動詞「投げる」、「かける」、「置く」、「入れる」、「あげる」、「しまう」の場合、「を」格は、この文の中の動作主が移動させるものを表すことがわかる。そして、その行為の到達点は「に」格で表される。つまり、その行為の全体の相手を行為の対象と考えれば、対象を「を」格ではなく、「に」格で考えることになるかもしれない。

以上の移動の動詞の中にやや毛色の違ったものが存在する。例えば「水を浴びる」のような場合、「を」格を動作の対象とすると、「浴びる」対象は「水」となるはずである。しかし、「浴びる」対象が「水」というのは、なかなか外国人には理解しがたい。普通に考えると、浴びる対象は自分自身であろう。したがって、「を」格は「浴びる」対象を表しているのではないと考えられる。それでは、「を」格は、どのような役割を果たしているのだろうか。

「私は水を浴びる」という行為を分析すると、私は水を移動させて、自分に移すとなる。この場合、「私に」という到着点は表示されない。それは、常に「浴びる」対象が自分自身であるため、表示されないのではないだろうか。このような動詞には「浴びる」のほか、「着る」、「履く」、「かぶる」などがある。このような自分自身を対象にしているような動詞の場合「私に着る」、「私に履く」、「私にかぶる」など到着が私自身である場合、私には表示されない。例えば使役動詞「着せる」、「履かせる」、「かぶらせる」などでは、その到着点は「子供に着せる」、「子供に履かせる」、「子供にかぶらせる」など常に表示可能である。したがって、「着る」、「履く」、「かぶる」のような自分自身を対象とするような動詞を「再帰的移動動詞」と名付けたい。これらの関係を図8で示す。

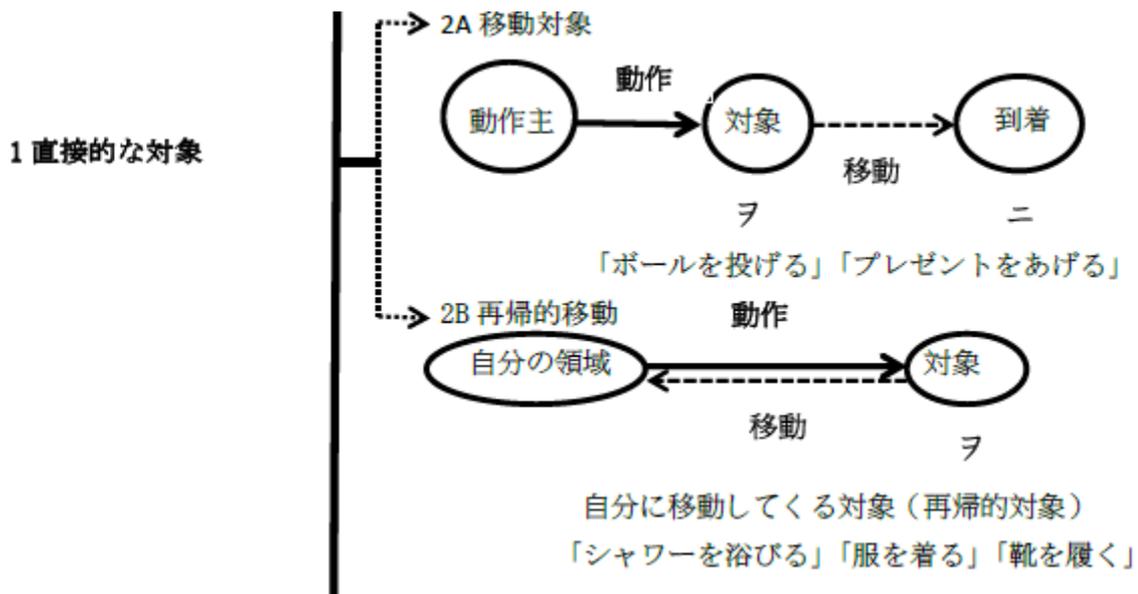


図8 移動対象・再帰的移動

3-2-4 認知（知覚）・思考・感情の対象

人間の精神的、あるいは心的作用の対象、すなわち、「見る」、「聞く」などの知覚の対象と「考える」、「知る」などの認知（思考）作用の対象や「悲しむ」、「憎む」、「嫌う」、「喜ぶ」などの感情の対象や「感じる」のような感覚の対象がある。いずれも、「を」格を取る。この「を」格について分析を行っていく。

3-2-4-1 認知（知覚）の対象

まず、認知（知覚）の対象から分析していくことにする。この知覚の動詞及び知覚の表現に関しては、五感があり、視覚は、「～を見る」、「～が見える」、聴覚は、「～を聞く」、「～が聞こえる」、嗅覚に関しては、「～を嗅ぐ」、「～のにおいがする／～がにおう」、味覚は、「～を味わう」、「～味がする」、感覚としては、「～を感じる」、「～感じがする」などが挙げられる。

「～を見る」と「～が見える」の違いは、前者が視覚を通して、対象物を認識しようとするものである。すなわち、視覚を通して、その対象物に意識を集中して捉えることである。これに対して、「～が見える」は、対象物が視覚を通して、感じられることである。

同様に、「～を聞く」、「～が聞こえる」の場合は、「～を聞く」が聴覚を通して、その対象物、すなわち音を認識しようとするものである。つまり、聴覚を通して、その音に意識を集中して捉えようとするものである。これに対して、「～が聞こえる」は、対象物すなわち音が聴覚を通して、感じられることである。

「～を嗅ぐ」、「～においがする・～がにおう」の違いは、前者が嗅覚を通して、その対象物（におい）を認識しようとするものである。つまり、嗅覚を通して、そのにおいに意識を集中して捉えることである。これに対して、「～においがする・～がにおう」は、対象物（におい）が嗅覚を通して、感じられることである。

「～を味わう」、「～味がする」の場合は、「～を味わう」が味覚を通して、その対象物、すなわち、その物の味を認識しようとするものである。つまり、味覚を通して、その味に意識を集中して捉えようとするものである。これに対して、「～味がする」は、対象物の味が味覚を通して、感じられることである。

視覚、聴覚、嗅覚、味覚以外の感覚に関しては、「～を感じる」、「～感じがする・(痛む、)」 「感覚の形容詞（痛い、寒い、暑い、柔らかい、硬い、重い、軽い等）」といった表現がある。この「～を感じる」は感覚を通して、その感覚の対象（痛み、寒さ、暑さ、柔らかさ、硬さ）を認識しようとするものである。すなわち、感覚を通して、その感覚の対象に意識を集中して捉えることである。しかし、同時に、その感覚の対象が感覚を通して、感じられることをも表す。これに対して、「～感じがする」、「感覚の形容詞（痛い、寒い、暑い、柔らかい、硬い、重い、軽い等）」の表現は、その感覚の対象が感覚を通して感じられることである。ただ、この感覚の表現に関しては、他の知覚と異なり、それ自体の機能から認知的な働きが弱いと言える。以下の図9で示す。

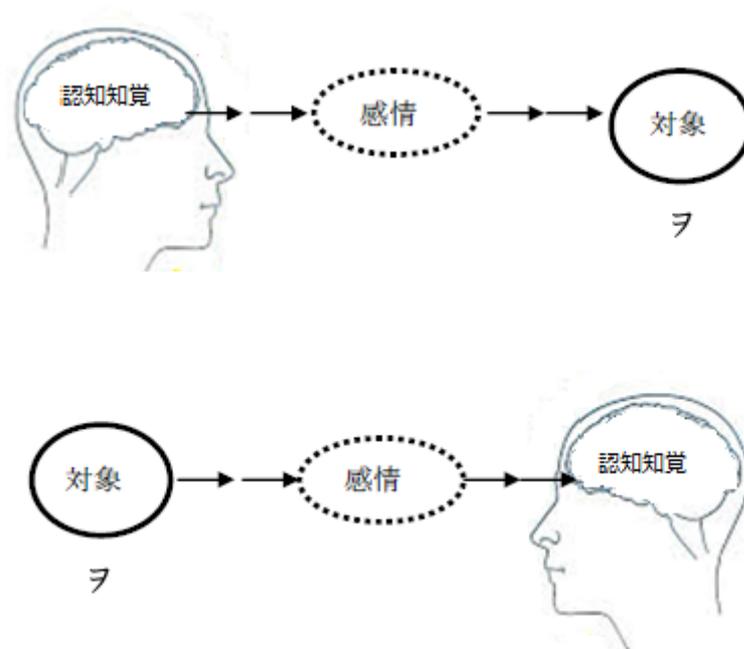


図9 認知（知覚）の対象

3-2-4-2 思考の対象

思考の対象に関しては、その思考作用として「考える」、「思う」、「知る」、「比べる」などが挙げられる。これらはすべて人間の精神作用の対象を表している。まず、「考える」についてであるが、新明解国語辞典では、「①経験や知識を基にして、未知の事柄を解決（予測）しようとして、頭を働かせる。②相手や将来の事について思いをめぐらす。③新しい物を作り出す方法や考えを思いつく。」ことであると述べている。「～を 考える」の「を」格が表していることは、思考作用の対象、すなわち、思考作用の向かうところのものであると言えよう。

「思う」について、新明解国語辞典では、「①外界からの刺激を受けて何らかの感覚が生じたり、情意を抱いたりする。②経験や感覚に頼ったり、状況を分析したりして、現状や今後の成り行きについて判断する。③そのものに絶えず心が惹かれる。」ことであると述べている。この場合の「を」格も思考作用の対象、すなわち、思考作用のところのものを表していると言えよう。図示すれば、以下の図10のようになる。

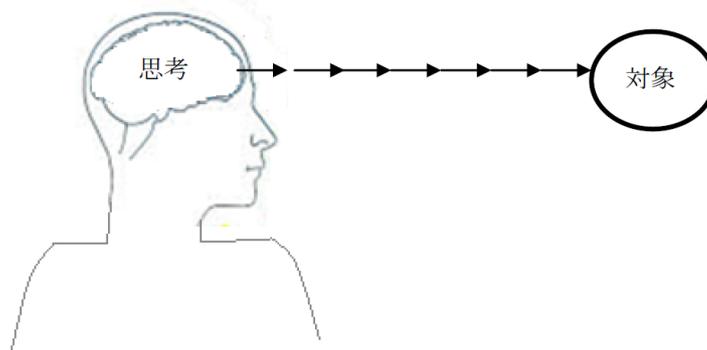


図9 思考の対象

3-2-4-3 感情の対象

人間の精神的、あるいは心的作用の対象、感覚の対象には、「見る」、「聞く」、「考える」、「知る」などの認知（知覚・思考）作用の対象や「悲しむ」、「憎む」、「嫌う」、「喜ぶ」などの感情の対象や「感じる」のような感覚の対象があるが、いずれも「を」格を取る。しかし、「注目する」、「注意する」、「気をつける」など、また、「驚く」、「おびえる」、「うっとりする」、「がっかりする」などの対象は「に」格で表される。さらに、「好き」、「嫌い」、「憎い」、「嬉しい」などのような感情の対象は「が」格を取る。

「好き」、「嫌い」、「憎い」、「嬉しい」などはいずれも形容詞、形容動詞であるため、その対象は「が」になる。しかし、感情動詞「喜ぶ」と「悲しむ」の対象格には、「に」格と「を」格が来る。こ

の感情動詞の「に」と「を」との違いは何であろうか。まず、「喜ぶ」の対象格「に」の例から見ていくことにする。

「出来るのであれば、彼らの生活が守れるのであれば、お前の子供の笑顔や、そんな子供に喜ぶお前達の顔を見られるのであれば、一人でも多くの子供達が笑えるのであれば…」(2003) Moon child
『鎮魂歌篇』角川書店

「熊本地方裁判所の判決に喜ぶ人びと(共同通信社提供)。(2002)『日本のすがた』矢野恒太記念会

「写真は開催地決定の報に喜ぶ北京の学生たち」三村 淳(著)/水村 孝(著)(2002)『朝日新聞報道写真集』朝日新聞社

「役に喜ぶ富美男さんを殺したということでした。 主役が演じているうち、話の筋が変わるとい
う」(広瀬 久美子(著))『女の器量はことばしだい』リヨン社1984

「水の出た井戸に喜ぶアフガンの子どもたち。」丸山 直樹(著)『アフガン乾いた大地戦火の中の民』日本放送出版協会(2002)

「フィッツランドルフ選手も自分の結果に喜ぶより、練習仲間の悲劇に顔を曇らせた。 とても見て
いられない気持ちだった。」中日新聞社(著)/共同通信社(著)(2002)

「新米のプレゼントに喜ぶ姿が見られました」『広報こおりやま』(2008)

以上は、「に」格を取った「喜ぶ」という感情動詞の例であるが、いずれの例を見ても、その「喜ぶ」という内的な心情を表している。また、その「に」格の表すものは感情の対象と言うよりは、その感情を引き起こした原因に近いように思われる。言い換えれば、その「喜ぶ」という感情は引き起こされたものであり、そのような引き起こされた内的な感情の志向する対象は「に」格で表されていると言えるかもしれない。また、その感情の対象とその感情そのものが一体化しているとも考えられる。

次に、「を」格を取った「喜ぶ」という感情動詞の例を提示する。

「無事の帰着を喜ぶ暇もなく、空海にはなすべき一大事があった」頼富 本宏(著)

『平安のマルチ文化人』日本放送出版協会(2005)

「王妃ジェーン・シーモアは王子エドワードを生むと、二週間後に亡くなった。王子の誕生を喜ぶあまり、ヘンリーがジェーンを無理に祝賀の席に連ねさせたのが原因といわれていた」石井 美樹子(著)『イギリス・ルネサンスの女たち』中央公論社(1997)

「そして紙吹雪が舞う。相手チームの不幸を喜ぶのがルールのようなのである。この紙吹雪は何でできているのかと、はいつくばってかき集め」ようこ(著)『下駄ばきでスキップ』文芸春秋(1990)

「やはり入ったという喜び、そういうものを、厳粛で清新な気持ちで入学を喜び卒業を喜ぶ、そういうふうな人生の折り目においてやはりきちっとした式をしなければならない」国務大臣(有馬朗人君)国会会議録第145回国会(1999)

以上の例を見ると、「を」格を伴った「喜ぶ」の例は、先の「に」格の内的心情の「喜ぶ」と異なり、そのことを祝賀するような、すなわち、祝うような外的なあるいは、動作的な様子が見て取れる。

「無事の帰着を喜ぶ暇もなく、空海にはなすべき一大事があった」

「王子の誕生を喜ぶあまり、ヘンリーがジェーンを無理に祝賀の席に連ならせた」

「そして紙吹雪が舞う。相手チームの不幸を喜ぶのがルールのようなのである」

「入学を喜び卒業を喜ぶ、そういうふうな人生の折り目においてやはりきちっとした式をしなければならない」

以上の例を見ても、「帰還」、「誕生」、「不幸」、「入学」、「卒業」を喜ぶにしても、いずれも個人の内的な心情を表すものではなく、そのことを祝賀するというようなニュアンスが「～を喜ぶ」には感じられる。つまり、ある対象に向かう能動的な心の動き、積極的な感情の発動、動作的な要素が感じられる。

「に」格を取る感情動詞の例として、寺村(1982)は次のようなものを挙げている。

【「に」格を取る感情動詞】

驚く	おびえる	おろおろする	青くなる	ぎよっとする	びっくりする	びくびくする	
うろたえる	はっとする	とびあがる	ほっとする	安心する	安堵する	怒る	かっとなる
腹を立てる	腹が立つ	興奮する	酔う	浮かれる	沸く	うっとりする	陶然となる
失望する	がっかりする	がっかりする					

「を」格を取る感情動詞の例として、次のようなものを挙げている。

² 寺村(1982)の感情表現の分類の「B能動的な心の動き、積極的な感情の発動」という表現を用いている。

【「を」格を取る感情動詞】

愛する 憎む いとしむ 恨む 羨む 惜しむ 妬む 妬く 喜ぶ 悲しむ (苦しむ³)
楽しむ 恥じる 悔いる 懐かしむ 恋する 好く 好む 嫌う 望む

以上の【「に」格を取る感情動詞】と【「を」格を取る感情動詞】とを単純に比較しても、【「に」格を取る感情動詞】は、何かの対象に向かっていくような志向性はあまり感じられず、むしろ、「驚く」、「ほっとする」、「うっとりする」、「がっかりする」などのような何かによって引き起こされた内的な感情あるいは、内的な感情の状態を表しているように思われる。これらの動詞の「に」格が表しているものは主に原因に近いもののように思われるが、何らかの対象を表しているとすれば、何かに向かう積極的な感情の対象ではなく、その感情が引きつけられるような受動的なもののように思われる。これらの動詞に関しては、寺村（1982）は、一時的な気の動き、受身的感情を表現する動詞としている。

一方、【「を」格を取る感情動詞】は、何かによって引き起こされた内的な感情というよりは、「愛する」、「憎む」、「羨む」、「妬む」、「嫌う」などのように何かに向かっていく積極的な感情を表しているように感じられる。逆に、これらの言葉を見ると、その感情の向かう対象がなければ、成立しないように思われる。これらの動詞に関して、寺村（1982）は、能動的な心の動き、積極的感情の発動を表す動詞としている。

以上のことをまとめれば、感情動詞の「を」格は能動的な心の働き、積極的感情の向かうところのものを表していると言えよう。このことを図に示せば、以下の図10ようになる。

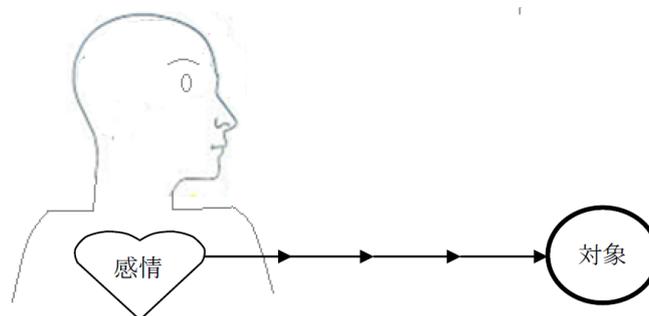
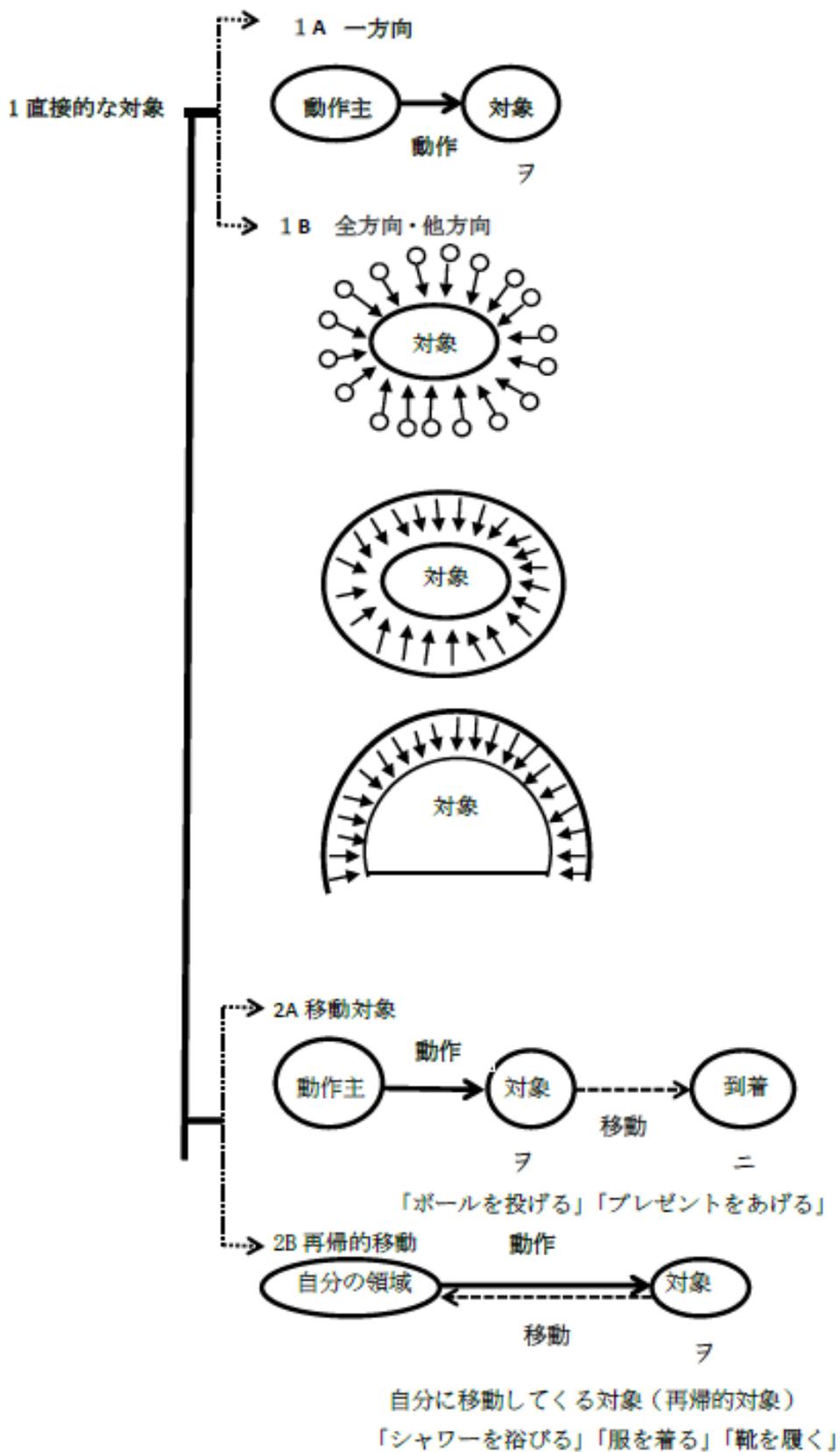


図10 感情の対象

³ 寺村（1982）では、「を」格を取る動詞に分類されているが、辞書では「に」格を取っており、「を」格は取っていない。また、少納言で検索したが、的確な「を」格の用例を見つけることができなかった。

3-2-4-4 まとめ

「対象」についての用法は「直接的な動作の対象」、「移動対象」「認知（知覚・思考）感情の対象」の3つに分けられる。「直接的な動作の対象」は「一方向」と「全方向」の2つに分けられ、さらに、「移動対象」は通常の「移動対象」と「再帰的移動対象」の2つに分けられる。また、「認知（知覚・思考）感情の対象」は「認知・知覚対象」と「思考対象」と「感情の対象」の3つに分けられる。以上のことを図で示せば、以下の図 11 のようになる。



↳ 3 認知知覚思考（動作）感情対象
 認知知覚対象

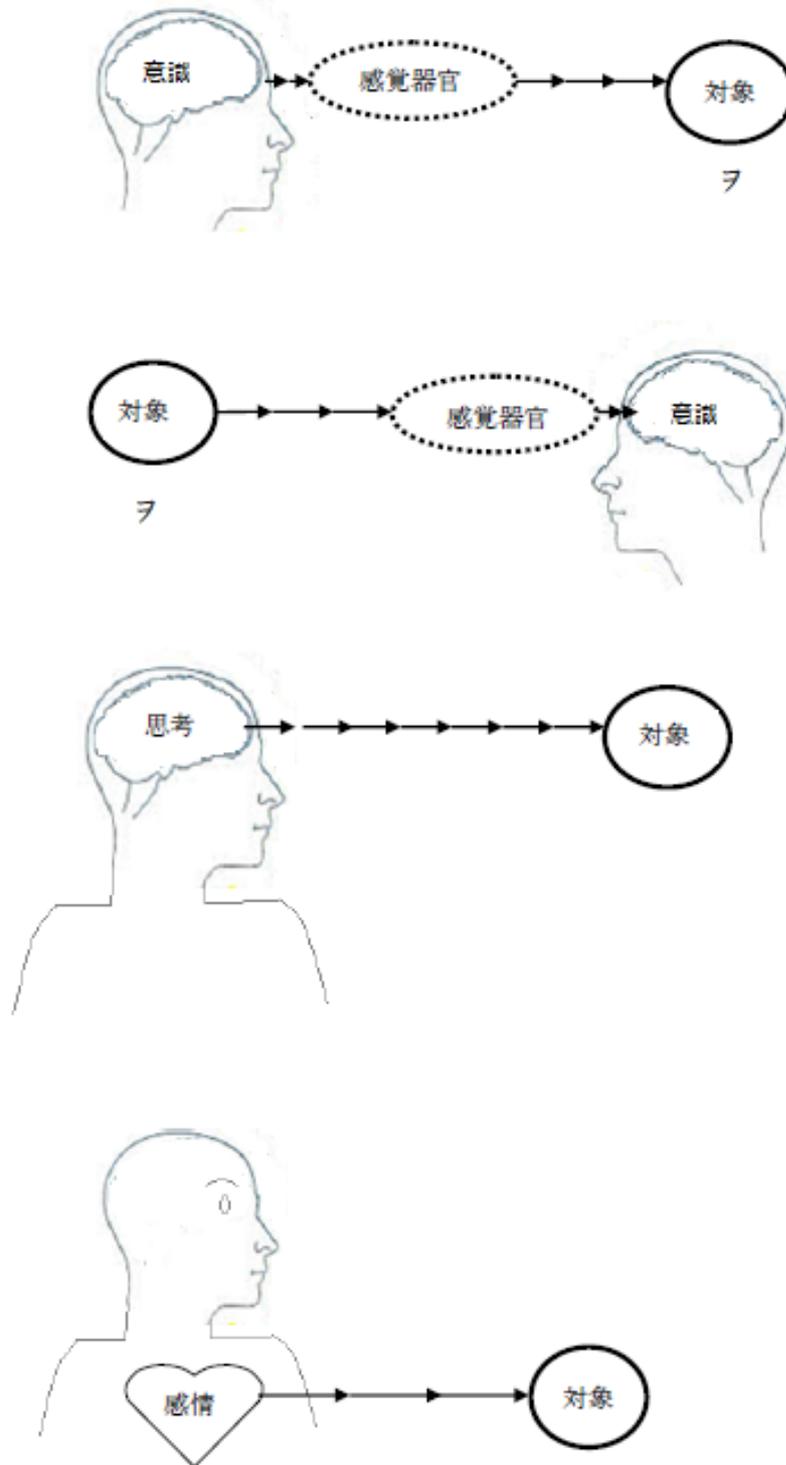


図11 対象のまとめ

3-3 実現目的・目標

「を」格のプロトタイプは、おそらく、「ベビーカーを押す」、「木を切る」「ご飯を食べる」、「リンゴをかじる」など動作主がある物に対してその力を直接及ぼすものを表すと言えるだろう。つまり、「ベビーカーを押す」であれば、ベビーカーに対して前方方向に直接力を加えることであり、その力を加えるものを「を」格で表している。

「を」格の用法については、従来の先行研究では、ほとんどが「対象」と「場所」の2つに分けているが、さらに「目的」を加え、「対象」と「目的」、「場所」の3つに分けているものがあるが、森田『動詞の意味的文法研究』（1994）と辞書では、『大辞林』、『日本語大辞典 第二版』の三種のみである。

『大辞林』（1995）では「動作の目的・対象」としている。『日本語大辞典 第二版』（1995）では「動作・行為の目的・結果」としている。森田『動詞の意味的文法研究』（1994）では、「行為・作用の結果を表す」としている。直接作用を加える対象を「を」格で表すというのが、「を」格のプロトタイプだと考えることが出来る。しかし、「ハンバーグを作る」とか、「家を建てる」という場合は、作用を加える対象ではない。「ハンバーグ」も「家」も作用を加えることは出来ない。様々な作用の結果、最終的に完成させる物、すなわち最終的な完成物を示していることがわかる。これらは動作の及ぶ「対象」、すなわち動作の「対象」ではなく、むしろ、動作の「目的」あるいは、「実現目的」、「目標」と呼ぶべきではないだろうか。

3-3-1 実現目的・完成物・所有権

この様々の行為の結果、実現させる「実現目的」では、その実現内容に従って、「完成物」の実現と「所有権」の実現の2つを分ける必要がある。例えば、「家を建てる」では、材料に動作・作用を加え、最終的に完成させるものを表している。この完成物は、まだ、作業段階では目の前には存在せず、動作の完了によって出現するものである。したがって、これを動作の「完成物」と呼ぶ。この類の物は、「作る」、「建てる」、「書く」、「描く」などである。例えば、「家を建てる」、「ハンバーグを作る」、「字を書く」などである。「字を書く」では、線を引いたり、様々な線を組み合わせたりして、最終的に字が完成する。つまり、実現目的であることがわかる。

この「実現目的」に近いものとして、「所有権（管理権）」の実現がある。例えば、「得る」、「盗る」、「買う」、「もらう」などは様々な動作・作用を加えることによって、完成させるものを表しているとは言えない。これらは、何らかの行為によって「所有権」を実現させることであると考えられる。例えば、「家を買う」では、すでに完成物として存在する「家」をお金を支払うことによって、自分のものにする。すなわち「所有権」の実現を表している。したがって、実現目的の下に、「完成物」と「所有

権」の実現という分類を立てた。

この、「所有権」の実現の特殊な例として、「席を替わる」、「主役を替わる」、「見張りを替わる」、「電話を替わる」などが挙げられる。「席を替わる」は、次に述べる出発の用法と交替の用法の2種がある。一つは、A席からB席へ「席を替わる」という用法である。もう一つは同じ席で人が入れ替わるという用法である。「A席からB席へ席を替わる」というと、次に述べる移動の出発点という用法との関連も考えられるが、同じ一つの席で座る人が入れ替わるという場合は、移動の出発点とは考えられない。そこで考えられるのは、同じ席の「所有権（管理権）」の実現目的という用法である。これは、座る権利、すなわち席の「所有権（管理権）」の実現を入れ替えるという動作、あるいは、行為によって、実現するものと考えられる。また、「見張りを替わる」も「見張り」という役割を入れ替わることによって、管理権を実現するものと考えられる。「主役を替わる」も同様に考えることができる。また、「電話を替わる」も同様である。

以上のことを図で示すと、以下の図12のようになる。



図12 実現目的・完成物・所有権

「所有権」の実現の特殊な例として、「席を替わる」、「主役を替わる」、「見張りを替わる」、「電話を替わる」などを挙げたが、それを図示すると、以下の図13のようになる。

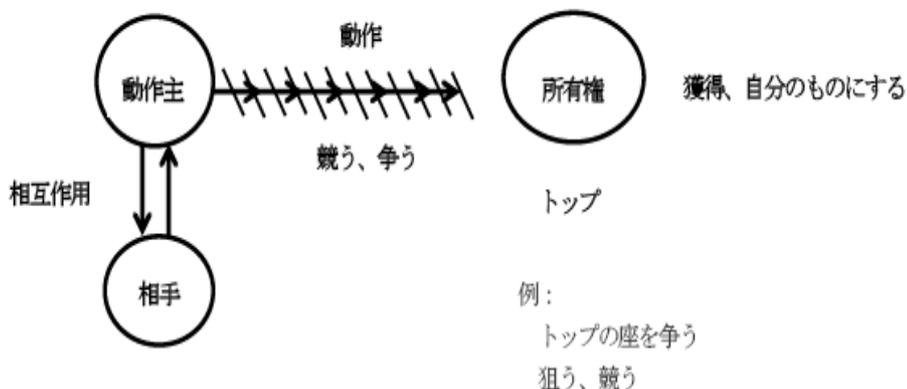


図13 「所有権」

3-3-2 目標・方向・到達

完成物の実現とは異なる「目標」という用法がある。目標とは、完成するか実現するかなどには関係なく、また、到着するかどうかにも関係ないのである。ただ、ある目標に向かってある動作・行為を行うものである。この目標の一種に「東を指す」などがある。もし、着点がある場合には、「到達」になるが、方向には、着点は存在しない。「指す」というのは、尖ったもの、すなわち指先を東という方向に向けて、移動させるものであり、「を」格はその指先の移動の先にあるもの（方向）を指す。例えば、「時計の針が三時を指す」なども時計の三という文字に向かって針先を進めていくことであり、「を」格はその針先の進んでいく先にあるものを指す。この場合も、「を」格は接触性はなく、移動の着点とはならない。ただその進んでいく先にあるものを示している。「医者を目指す」の「を」格も様々な努力をし、進んでいく先にある「医者」という地位を示している。これは、あくまでも進んでいく先にあるものを示しているだけで、それに到達する必要はない。また、「母親の後を追いかける」も必ずしも母親に到達必要はなく、その後ろにできるだけ近づこうと進んでいく先にあるものを示している。「優勝を狙う」も同様である。

以上のことをまとめると、この目標には、「東を指す」のような「方向」を示すものと、「到達目標」を示すものがある。いずれも、それに向かって進んでいく先にあるものを「を」格は示している。

以下の図14のようになる。

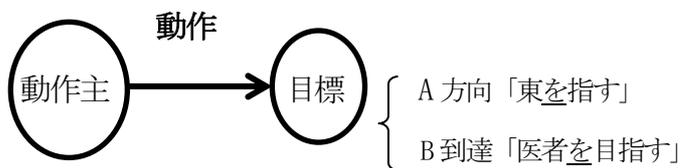


図14 「目標」

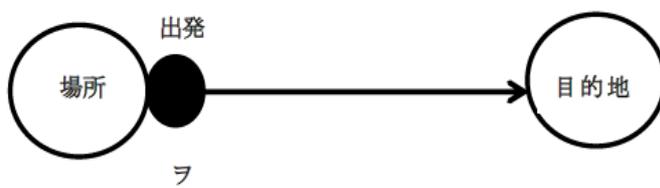
3-4 出発・移動・通過

格助詞「を」の三つ目の用法は「場所」である。この「場所」の用法は、出発の自動詞「出る」「出発する」「出港する」「離陸する」「離れる」など出発の自動詞と組み合わさり、出発点を表す。また、「走る」「歩く」「散歩する」「飛ぶ」「泳ぐ」など移動を含む自動詞と組み合わさり、移動の場所を表す。また、「通る」「通過する」「こえる」「過ぎる」「抜ける」など、通過を表す自動詞と組み合わさり、通過点を表す。これらの特徴はいずれも、何らかの移動性の自動詞と結びついていることがわかる。

移動という行為は、ある場所を出発し、ある場所を移動し、ある場所を通過し、最後に目的地に到着するという全体的な構造を持っている。そして、この移動という行為が出発性、移動性、通過性のものであるかによって、その「を」格が示す場所がそれぞれ異なってくる。まず、出発性の移動動詞の場合には、「を」格によって、その出発点が焦点化され、移動性の動詞においては、その移動していく場所が、そして、通過性の移動動詞の場合には、その通過点が焦点化されると考えられる。

この関係については以下の図 15 で示す。

出発



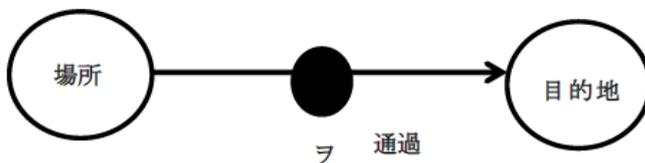
「東京駅を出発する」

移動



「東名高速道路を走る」

通過



「名古屋を通過する」

図 15 場所 (移動・通過・出発)

3-4-1 出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「出る」について

「出発点」の「を」格と共通の特性を持つ格助詞として「から」格が挙げられる。では、この「出発点」の「を」格と「から」格との違いは何であろうか。出発点を表わす格助詞「を」から「から」への置き換えの可能性について、修士論文執筆時に調査したが、その調査の結果、出発性の移動動詞が最も多く置き換えられることがわかった。また、その出発性の移動動詞の中でもよく置き換えられる移動動詞が「出る」であることもわかった。起点を表す「を」と「から」について、従来の研究においては、両者を比べる際に提出されている動詞「出る」の出現頻度が高く、両者ともに使える用例も少なくないことがわかった。そこで、動詞「出る」を使い、「を」格と「から」格の両者ともに使える場合のニュアンス、場面による差異について詳しく考察することにする。

移動動詞「出る」は辞書などの記述にみられるように多義的な動詞である。『大辞泉』（1995）ではその用法は7種に分けられ、『大辞林』（1995）では30種にも分けられている。本研究では、まず先行研究における「出る」の基準について、「出る」の統語的振舞い、意味ネットワーク（意味拡張）を踏まえて、基本的な特徴を明らかにしたいと思う。『動詞の意味・用法の記述的研究』（1972）では「出る」を1. 移動、2. 発生、3. 出現、4. 登場、5. 離脱、6. 所有、7. 範囲、8. 態度の8タイプに分類しており、伊藤健人（2003）では「出る」では、1. 起点から着点への位置変化、2. 出現、3. 発生、4. 離脱・退去の4タイプに分類している。これらを基に、辞書、『日本語表現活用辞典』（2004）などの用例を通じ、構文と共起するものをまとめ、格助詞「を」格と「から」格が最も置き換えられやすいのは、どのカテゴリーなのか、置き換えられないものには、どのような要因があるのか、どのようなルールに従っているのかを探り出すことにした。最後に、先行研究による「出る」の基本的な特徴と「を」格「から」格との関連性を探ってみたい。

本研究では、これらの分析を通じて、「を」格「から」格と移動動詞「出る」との繋がりを明らかにし、「を」格と「から」格のコア・イメージを明らかにすることを目的とする。

3-4-1-1 先行研究

1. 1 先行研究における「出る」の定義と構文

伊藤健人（2003）は「出る」の意味を大きく4タイプ、すなわち、《a 起点から着点への位置変化＝（4）》、《b 出現＝（8）》、《c 発生＝（9）》、《d 離脱・退去＝（10）》に分類している。さらに、《a》に《a-1》起点重視の位置変化＝（5）（6）》、及び、《a-2 着点重視の位置変化＝（7）》の下位類を認めると述べている。

- (4) 地震に驚いた人々が部屋から廊下に出た。 → 《a位置変化》
- (5) a. 太郎が風呂から出た。 → 《a-1起点重視の位置変化》
 b. 列車がトンネルから出た。 → 《a-1起点重視の位置変化》
- (6) 東京行き of 電車は3番ホームから出ます。 → 《a-1起点重視の位置変化》
- (7) a. この道を行けば駅に出る。 → 《a-2着点重視の位置変化》
 b. 会議に出る。 → 《a-2着点重視の位置変化》
- (8) ゴジラがニューヨークに出た。 → 《b出現》
- (9) 台所から火が出た。 → 《c発生》
- (10) 太郎は住み慣れた街を出た。 → 《d離脱・退去》

(伊藤 2003)

動詞「出る」が持つ多義は、①位置変化構文、②出現構文、③発生構文、④離脱・退去構文の中で用いられることにより生じるものであるとしている。

① [位置変化構文]

【位置変化構文】	
基本的な意味	《起点から着点へNP1の位置が変化する》
格パターン	[<u>NP1ガ</u> NP2カラ NP3ニ V] V→出る、移る、動く、移動する…
構文的な制約	プロファイルされるのはNP1のみで、NP2, NP3は任意の要素。

② [出現構文]

【出現構文】	
基本的な意味	《見えないところにあったものや隠れていたものが現れる》
格パターン	[<u>NP1ガ</u> NP2ニ V] V→出る／出現する／現れる…
構文的な制約	プロファイルされるのはNP1のみで、NP2は任意の要素。

③ [発生構文]

【発生構文】	
基本的な意味	《NP2を經由して存在しなかったNP1が発生する》
格パターン	[<u>NP1ガ</u> NP2カラ V] V→出る／発生する／湧き出る／生まれる…
構文的な制約	NP2のヲ格は不可。[ーカラ ーガ]の場合が多い。

④ 〔離脱・退去構文〕

【離脱・退去構文】	
基本的な意味	《NP1がそれまで属していたNP2からところから離れる・去る》
格パターン	〔 NP1ガ NP2カラ V〕 V→出る／離れる／去る／抜ける・・・
構文的な制約	NP2は空間的なものから組織や団体などの非空間的なものまで広く許される

(伊藤 2003)

以上のような観察から、この4つの構文には、以下のような段階性が認められると述べている。

【起点的-位置変化構文】〔NP1ガNP2カラV〕……………位置変化（移動）

↑

【空間的-離脱・退去構文】〔NP1ガNP2カラ(ヲ)V〕

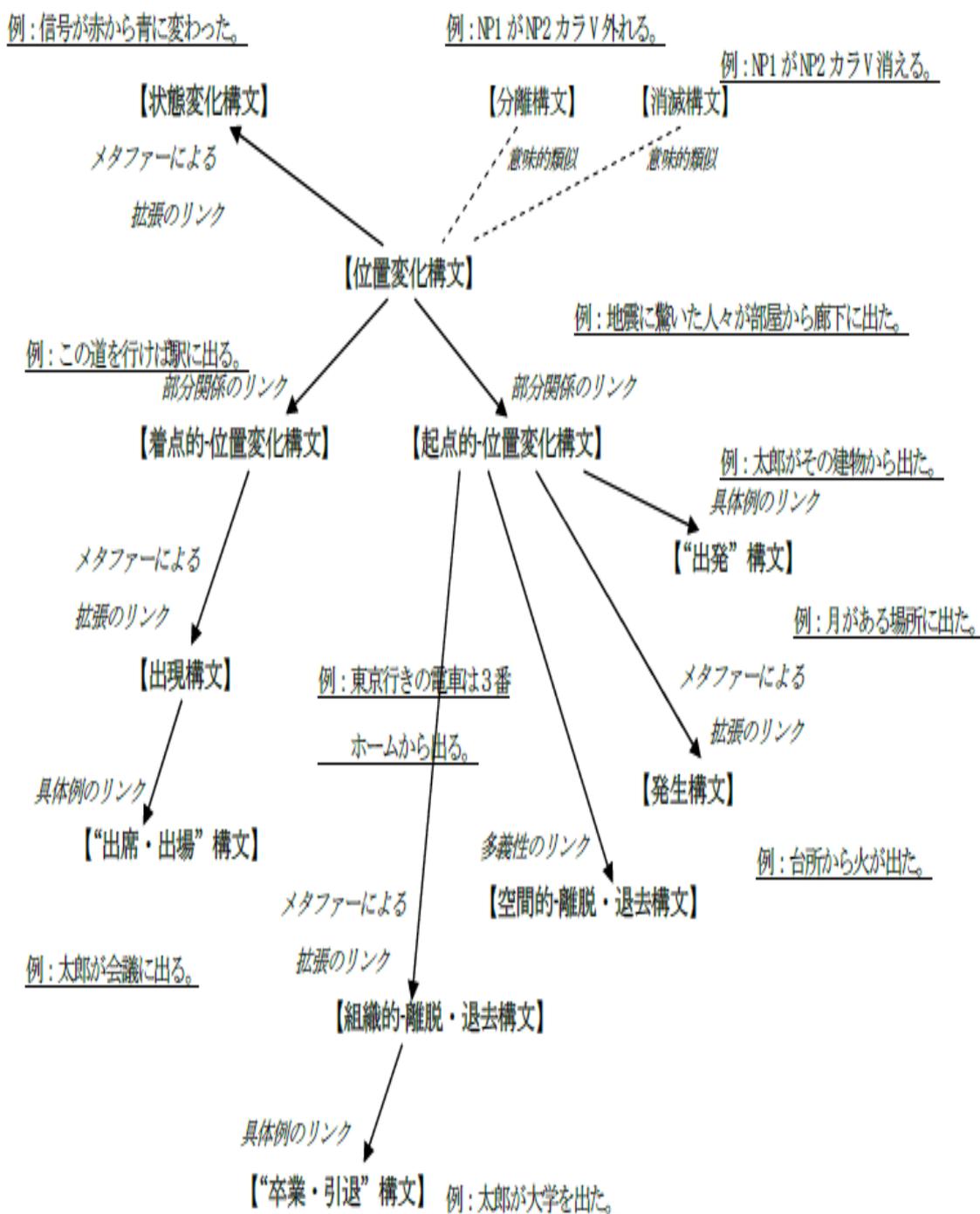
【組織的-離脱・退去構文】〔NP1ガNP2ヲ(カラ)V〕

↓

【“卒業・引退”構文】〔NP1ガNP2ヲV〕……………状態変化

(伊藤 2003)

また、伊藤健人（2003）は「出る」の多義に関わる構文間のネットワークを以下の図 16 で示している



(伊藤 2003)

図 16 「出る」の多義に関わる構文間のネットワーク（この図の用例は伊藤健人（2003）に筆者が入れたもの）

李在鎬・伊藤健人 (2008) では、「出る」を4タイプに分け、以下の表5と図17で示している。

表5 「出る」文の定義

用例区分	クラス	定義
1a	位置変化	主体が起点領域から経路を経て着点領域に移動すること
1b	出現	既にある主体が着点領域に移ること
1c	発生	もともとなかった主体が着点領域に生まれること
1d	離脱	主体が起点領域と着点領域の境界線を越え、帰属先を変えること

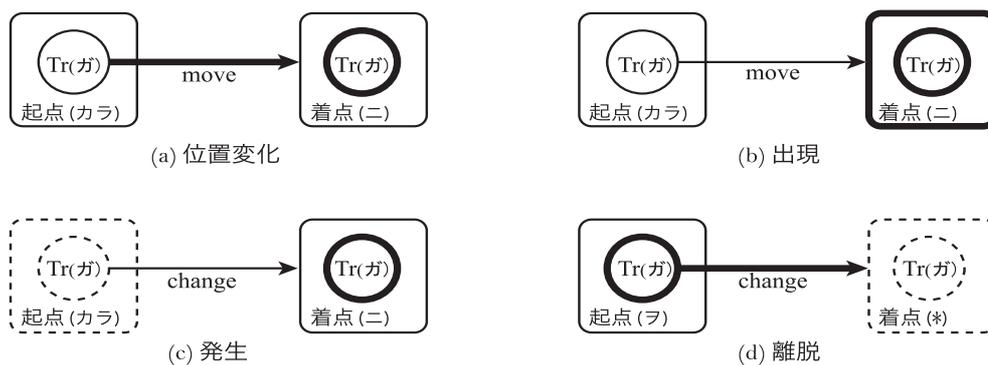


図17 「出る」文に見られる事態

『動詞の意味・用法の記述的研究』(1972)によると、「出る」を8つに分けて、以下の図18で示している。

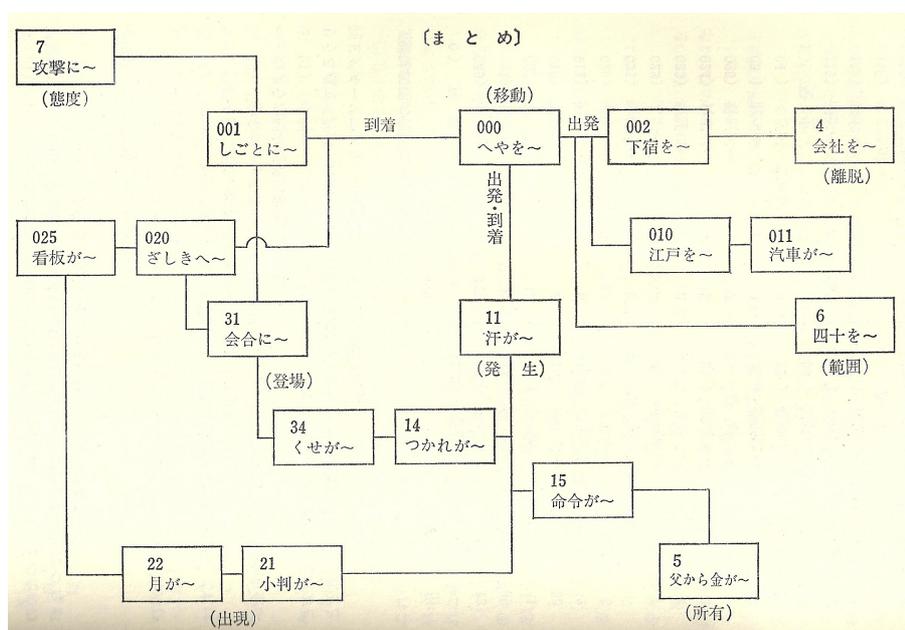


図18 「出る」のまとめ

田中 茂範『空間と移動の表現』(1997)「部屋を出る」という用例では、〈部屋〉は〈出る〉という「移動動作が作用する対象として意味づけられる」と述べている。つまり、「部屋を出る」の「を」格は、移動動作の作用の対象を示すものであるということである。また、「部屋を通る」は「部屋を」の「を」格は〈移動の経路〉を意味しているが、「部屋を出る」の「部屋」は〈出所〉を意味していると述べている。この意味上の違いについて、田中はその動詞の持つ意味的な性質によるものだとしている。すなわち、「出る」は〈動作の瞬間性〉を含む動詞であり、〈動作の連続性〉を必要とする〈経路〉は、意味づけ上(事態構成上)不都合を引き起こすと述べている。また、田中は「部屋で出た」という表現の不自然さについて、「で」が〈動作が起こる領域限定〉という操作子であって、この「で」を用いることによって、〈空間的な広がり〉が出てしまうために、不都合を呼び起こしてしまうと述べている。しかし、「を」格も「で」格も「部屋」を〈動作作用の対象として取り立てる〉という点で、共通していると述べている。また、着点がある「花子は部屋を外に出た」というような文で「を」格は許されず、「から」格でなければならないと述べている。

伊藤達也(2008)は、「出る」について『『出る』は内部、境界、外部を備えた空間を召還(convoquer)し、対象 x が(文脈から質的に提供される)内部に相当する領域の(空間的、条件的、時間的、存在論的)走査(parcours)を完了し、境界を出口とし外部に移動することを喚起(évoquer)する』と述べている。

森田良行(1977)は、『出る』は内から外への移行動作・現象。内側にあつて目立たない状態にあつた物事が、外側へと移り、現れるようになる』と述べている。

『日本語多義語学習辞典 動詞編』(2012)では、動詞「出る」について、次の図19のようになる。

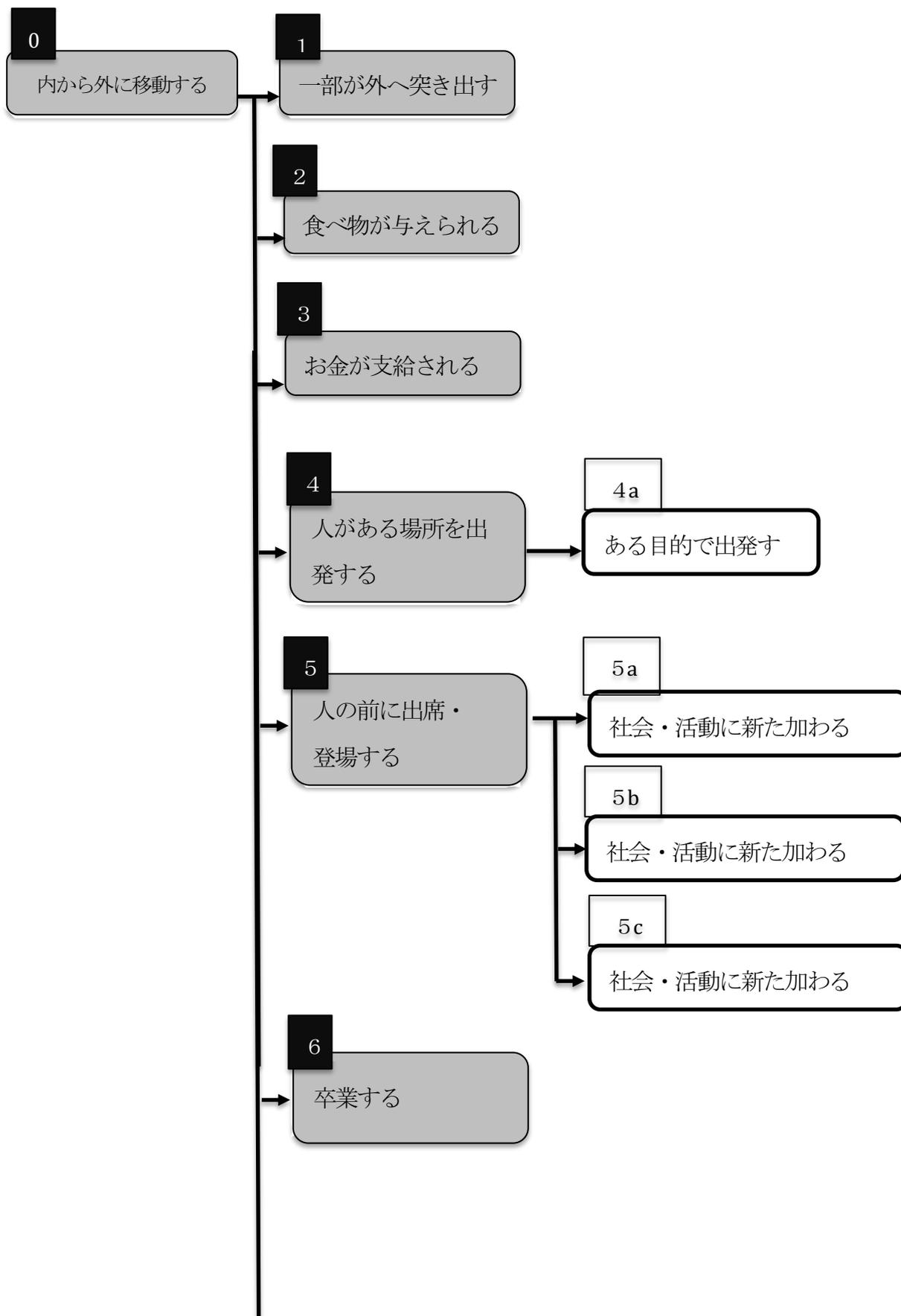




図19 「出る」の用法

以下の表6は、上記の『日本語多義語学習辞典 動詞編』(2012)に出てきた「出る」のまとめである。

表6「出る」の用法

0「内から外に移動する」	<ul style="list-style-type: none"> ・学生は部屋から校庭に出なさい。 ・支配人が奥から出てきた。 ・水道の蛇口から水が出ない。
1「一部が外へ突き出す」	<ul style="list-style-type: none"> ・釘が出ているから気をつけてください。 ・お腹が出ているのが気になる。
2「食べ物を与えられる」	<ul style="list-style-type: none"> ・新年会では酒が出る。 ・朝食には和食が出た。
3「お金が支給される」	<ul style="list-style-type: none"> ・社員にボーナスが出る。 ・会社設立のために、資金が出た。
4「人がある場所を出発する」	<ul style="list-style-type: none"> ・遅刻しないように早く家を出た。 ・6時に会社を出た。
4a「ある目的で出発する」	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で旅に出る。 ・東京へ出稼ぎに出る。
5「人の前に出席・登場する」	<ul style="list-style-type: none"> ・友人の結婚式に出る。 ・電話に出る。
5a「社会・活動に新たに加わる」	<ul style="list-style-type: none"> ・社会に出る準備をしなさい。 ・来年の参議院選挙に出るつもりだ。
5b「出演・出場する」	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビに出る。 ・新作の映画に出る。 ・あの選手は次回のオリンピックに出るだろう。
5c「態度を変える」	<ul style="list-style-type: none"> ・下手に出る。 ・ある時から反撃に出た。 ・予算委員会で政府は強硬な態度に出た。
6「卒業する」	<ul style="list-style-type: none"> ・大学を出ても良い仕事があるとはかりらない。 ・彼は家が貧しくて中学しか出ていないが、とても優秀な政治家だ。
7「人材が輩出・選出される」	<ul style="list-style-type: none"> ・我が国からノーベル賞受賞者が出た。

	<ul style="list-style-type: none"> ・この店で宝くじを買った人の中から一等の当選者が出た。
8 「乗り物が出発する」	<ul style="list-style-type: none"> ・電車はもう出たあとだった。 ・船が出るぞ。
8a 「乗り物が新たに運行される」	<ul style="list-style-type: none"> ・臨時バスが出る。 ・夏のシーズンには特別チャーター便が出る。
9 「隠れていた物が見える」	<ul style="list-style-type: none"> ・シャツの袖から細い腕が出ている。 ・雪が溶け、黒い地面が出ている。 ・包み紙を開けてみると中から小さな箱が出てきた。
9a 「不快な物が現れる」	<ul style="list-style-type: none"> ・台所にゴキブリが出て困っている。 ・この辺りにはお化けが出るそうだ。
9b 「発見される」	<ul style="list-style-type: none"> ・あの山からダイヤモンドが出たそうだ。 ・温泉はとうとう出なかった。
10 「提示・展示される」	<ul style="list-style-type: none"> ・家の前に表札が出ている。 ・ドアに「休診」の札が出ていた。 ・今度の特別展にピカソが出る。
11 「発売・出版される」	<ul style="list-style-type: none"> ・新車が出た。 ・来週10月号が出る。 ・新刊が出ることになった。
11 a 「よく売れる」	<ul style="list-style-type: none"> ・この上着が一番出ている。 ・思っていたより新商品があまり出ない。
12 「本・話などに登場する」	<ul style="list-style-type: none"> ・有名な野球選手のスキャンダル記事が新聞に出た。 ・この料理の作り方は本に出ています。 ・狐は日本の昔話によく出ている。
13 「質問・命令などが与えられる」	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者から質問が出た。 ・転勤の辞令が出た。 ・商品回収の指示が出た。
14 「結果が明確になる」	<ul style="list-style-type: none"> ・今日、検査の結果が出た。 ・新たな判決が出た。

	<ul style="list-style-type: none"> ・入学試験の合否が出ている。 ・利益が出た。
15 「現象・事態が発生する」	<ul style="list-style-type: none"> ・花の種から芽が出た。 ・虹が出ている。 ・自信で多数の死者が出ている。
15 a 「生理現象が発生する」	<ul style="list-style-type: none"> ・涙が出てしまった。 ・風邪の症状が出る。
16 「人の内面が表面に表れる」	<ul style="list-style-type: none"> ・怒りが顔に出る。 ・彼の性格が作品に出ている。 ・いつもの癖が出てしまった。
16 a 「欲望が外に表れる」	<ul style="list-style-type: none"> ・食欲が出る。 ・仕事の意欲が出る。
16b 「物の特徴が表面に表れる」	<ul style="list-style-type: none"> ・いい色が出ている。 ・現代的な感覚がデザインに出ている。

3-4-1-2 辞書における「出る」の分類

日本語学習者が最初に「出る」について、習うのは、「離れる」、「外へ移動する」といった用法であるが、実際の「出る」の意味の分類はきわめて複雑である。

表7は『日本語基本動詞用法辞典』（大修館書店）、『大辞泉』（小学館）、『学研国語大辞典 第二版』（学習研究社）に出てくる「出る」の用法をまとめたものである。

表7 「出る」の意味・用法の分類のまとめ⁴

日本語基本動詞用法辞典	大辞泉	学研国語大辞典 第二版
1. 中から外に移動する	1. ある範囲や中から外の方へ動き移る	1. 中から外に移る
	①そこから外へ行く	①外に行く
2. (ある目的を持って) ある場所を離れる	②境や一定の限度を越える	② [ものが表面に] 出っ張る。突き出る。

⁴ 表中の行に区切りのあるものは、筆者が別のカテゴリーとして扱っているものを示す。また太線の区切りは、カテゴリーの区分でもあることを示している。

3. 止まっていた乗り物が発進する	③そこを離れてほかのところへ行く。いままでいたところから別のところへ行く	③他のところに出向く。出発・出立する。
4. ある場所に行き着く	④卒業する	④ある所に行きつく。到着する。
	⑤ ある所に行き着く	⑤方に進む。
5. 商品が売れる	⑥商品が売れる	⑥仕事などをしていた特定の場所から去る。
		⑦売れていく。はける。さばける。
6. 内部にあったもの・隠れていた物が外部に現れる		2. [隠れていた物などが] 現れる。
	2. ①隠れていたもの、中に入っていたものなどが現れる。現れて見えるようになる。姿を現す	①おもてに現れて人目に触れるようになる。姿を現す。
	②なくしたものが見つかる	② [なくなったものなどが] 見つけられる。
7. 会合・活動などに参加する	③ある作品や場面などに現れる	③ [仕事などのために] 特定の場所に臨む。出席・出勤・出場・出演する。
	3. ①ある仕事をするために特定の場所にのぞむ。行事、集まりなどに加わる	④特定の方面に乗り出す。登場する。出馬する。
	②ある活動をするために、特定の方面・分野にすすんで働きかける。	
8. ある種の態度を取る	③ある態度をとる。ある態度で相手に対する	⑤ある態度で、相手にあたる。

9. 人の目にふれたり、公にされる	4. 広く人に知られるようにする	⑥他にしめすために、特定の場所に持ち出される。 出品・陳列・掲示される
		⑧出版・発行される。
		⑨文学・演劇などの芸術作品の中に登場する。
		⑩ある限度を超して、現れる。はみでる。
10. ある物事が新たに、あるいは結果として生じる 11. 店などが営業を始める	5. あらたに生じる	3. 新たに生じる。
	①自然現象・出来事などがおきる。発生する	①起こる。発生する。
	②地中から、産出される	② [勢いなどが] 新たに加わる。増す。
	③勢いなどがうまれる	③ [水などが] 外にあふれて流れる。
	④考えなどがうまれる。また、いろいろ考えて、ある結果がもたらされる	④産出される。生まれ出る。 ⑤味が生じる。
12. 食事、金銭、命令などが与えられる	6. 与えられる	4. 与えられる。供される。
	①発令されたり、支払われたりする	
	②もてなすために用意される。供される	
13. 事柄の由来がある起源から生じている	7. その所、起点から移動を始める。そこから出発する	5. ある源から系統を引く。
	①根源がそこにゆきつく。由来する。その源から血筋・系統を引く	

3-4-1-3 先行研究の問題点

先に述べた辞書の分類と伊藤健人（2003）の①位置変化構文、②出現構文、③発生構文、④離脱退去構文という4つの分類とを比較してみると、伊藤健人（2003）には、不十分な点があることに気付く。例えば、②の出現構文では、伊藤は「から」格について、「既にある主体が着点領域に移ること」と述

べているが、「目から涙が出た」という用例のように出現点は存在するが、その着点がない場合もある。また、③の発生構文についても、「もともとなかった主体が着点に生まれること」と述べているが、「台所から火が出た」のように、必ずしも着点があるとは限らない。④の離脱・退去構文について「主体が起点領域と着点領域の境界線を越え帰属先を変えること」と述べている。そして、この文型として [NP1 ガ NP2 カラ V] を提示し、「から」格しか示していない。しかし、伊藤は、この④の離脱・退去構文についての説明に、「NP2 は空間的な物から組織や団体などの非空間的なものまで広く許される」と書いている。だが、杉本 (2005) の例を見ると、「から」格ではない「を」格の「彼はやくざの〇〇組を出る決心をした。」という例が提示されており、「から」格だけではなく「を」格も適当だとしている。また、谷守 (1999) も、例「太郎が所属政党(を/から)離脱した。」を示し、を格もから格も、両者ともに使えるということを指摘している。

伊藤 (2003) の4つの分類は、全て「から」格であり、位置変化構文も「を」格に関する提示はない。「を」格の説明はただ一つ発生構文の構文的な制約として「NP2 のヲ格は不可」と指摘されているのみである。また、辞書の用例も「から」格が主で、「を」格についてはあまり触れていない。そこで、「から」格と「出る」との関連性を明らかにし、さらに、「を」格と置き換え可能なものは、どのようなカテゴリーなのか、その使用条件についても考察することにする。

3-4-1-4 「を」格、「から」格と移動動詞「出る」の構文分析

移動動詞「出る」の用法と「を」格、「から」格との関係を明らかにするため、『日本語基本動詞用法辞典』の「出る」の構文フレームを基に、各辞書の「出る」の用例に出現した具体的な語を提示し、さらにそれを基に分析を行った。使用した辞書は、『大辞泉』(1995)、『学研国語大辞典 第二版』(1994)、である。以下の用例はすべて、これらの辞典辞書の中に提示されているものであり、格助詞「を」格と「から」格を比較するために、その部分のみで示した。

【 意味・文型 】

[中から外に移動する]

構文フレーム：① [人・生き物・乗り物] {が/は} {所} から ([所] {に/へ}) 出る

共起例：

〈人・生き物・乗り物〉：私、ライオン、熊、列車、汽車、電車、特急、バス、船、飛行機

〈所〉：家、アパート、大学、銀行、刑務所、部屋、改札口、非常口、出口、門、窓、玄関、空港、トンネル、穴、店、布団、風呂、東京、田舎

用例：

1. 私は部屋から廊下に出た。
2. 列車がトンネルから出た。
3. ライオンがおりから出た。
4. ふろから出る。こたつから出る。庭へ出る。表へ出る。

構文フレーム：② [人・生き物・乗り物] {が/は} [所] を出る

共起例：

〈人・生き物・乗り物〉：私、船

〈所〉：門、部屋、港、家、図書館、船、汽車

用例：

1. 私は午前8時に裏口から家を出た。
2. 門を出る。
3. 部屋を出る。
4. 船が港を出る。

この「中から外への移動」する場合の格について、森田は、「から」格を示し、『から』はその地点・場所とそこ以外の場面との間に領域の境界線を越える意識である」と述べている。しかし、「この線から出ないでください」だけではなく、「この線を出ないでください」も可能である。つまり、「その地点・場所とそこ以外の場面との間に領域の境界線を越える」場合、「を」格も「から」格も共に可能であるとする、境界線を越えるか超えないかの問題ではなく、何か他の要素がその両者の違いを導き出すと考えるのが妥当であろう。

また、中と外の判断は話し手の位置、視点の違いによって異なってくるものと思われる。「から」格はポジションとしての起点の指示のイメージがあり、「を」格は分離、離れるというイメージが強いように思われる。森田は上に引用したように「から」は境界線を越える意識と述べているが、完全な方向名詞（東、西、上、下、中など）には境界線は考えられないが、「から」しか使えず、「を」は使えない。辞書の説明では、「出る」が境や一定の限度を越える場合には、ほとんど「から」が使われるという（『大辞泉』1995）。「を」は移動する場面や離れ去る地点を対象として取り上げられている。広さは問題ではないが、依然として広さのある物からの出発だということである。つまり、完全に方向になる名詞（東、西、上、下、中など）はそれを起点として、そこから離脱していくイメージは考えられず、

したがって、「を」格は使われず、「から」格しか使われない。

しかし、「出る」が越えるような時間的な継続的、移動のイメージを含む場合、境界、範囲、程度を超えてさらに継続、発展、展開していくというイメージを持つときには、例えば、「範囲を出る」、「域を出る」「40歳を出る」のような場合 には、「を」格がふさわしい。

例：部屋を出る （他の場所へ向かう）
部屋から出る （部屋の外に移動する）

この二つの例を比較すると、「部屋を出る」はどこかへ向かって出発するイメージがあるが、「部屋から出る」は単に部屋の外に出たというイメージしかなく、そこには移動してどこかへ向かうというイメージはない。

このことから、「[「を」格+出る] は、[中から外に移動する どこかへ向かう] ものであり、
[「から」格+出る] は [中から外に移動する ~~どこかへ向かう~~] となるだろう。これについては以下の図20で示す。

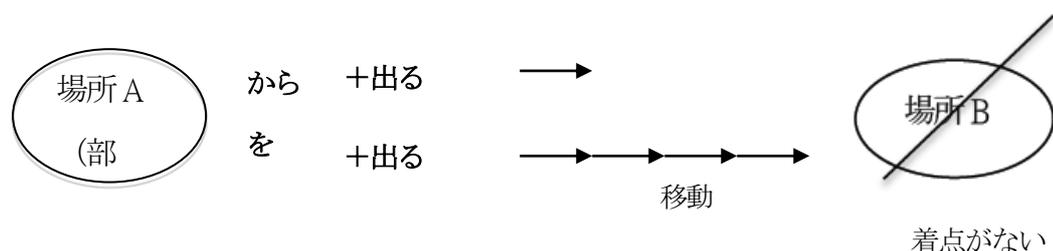


図20 起点・分離を表す「から」と出発点を表す「を」の関係図式

[(ある目的を持って) ある場所を離れる]

構文フレーム：[人・乗り物] {が/は} [所] を出る

共起例：

〈人・乗り物〉：人、

〈所〉：家、大学、下宿、刑務所、病院、村、田舎、故郷、店

用例：

1. 健二は家を出た (=家出する)。
2. 大学を出る (=卒業する)。
3. 下宿を出る (=引っ越しする)。

4. 故郷を出る。

〔ある目的を持って〕ある場所を離れる〕というカテゴリーでは、主語は、乗り物のような例文は少なく、ほとんどが人間である。

「を」は、時間的には少なくともかなりの長期間にわたって離れるのに対し、「から」は時間的には、一時的に出ることが多い。例えば、「を」は「故郷を出て、三月近くパリに過していると、感傷的になることが多かった。」(『日本文壇史』(1998)「故郷を出て17年」⁵(『ヨーロッパ絵で見る歴史散歩』(1999)など多数存在するが、長期間にわたる「故郷から出る」の用例はない。

〔ある場所に行き着く〕

構文フレーム：[人・乗り物・川・道]{が/は}([所]から)[所]{に/へ}出る

共起例：

[人・乗り物・川・道]：私たち、タクシー、道、川

[所]：海岸、日本海、表通り、駅前、運動場、郊外、甲板、廊下、沖、前、下、遠く、近く

用例：

1. 私たちは大通りから/を海岸に出た。
2. タクシーは裏通りから表通りへ出た。
3. この道は裏寂れた街から/を人で賑わう駅前に出る。
4. この川は、長野県の奥深い山中から新潟県を通って日本海に出る。
5. (今立っているところから) 一歩前へ出なさい。

この〔ある場所に行き着く〕カテゴリーでは、構文フレームを見ると〔～から～に/へ〕となり、出発点には「から」のみが現れ、「を」はない。確かに、「から～まで」のように範囲を表す場合、すなわち「新橋から銀座まで」のような場合には、出発点には「から」しか使えないだろう。また着点が「に」格の場合も、「新橋から銀座に出た」のように、出発点は「から」格しか使えない。「新橋を銀座に出た」というと、新橋は出発点にはならず、途中の経路、ないし通過点を表すことになる。また、例1の「私たちは大通りから/を海岸に出た。」の場合、「大通りから」は大通りが出発点となるが、「大通りを」の場合は、途中の経路となる。つまり起点を表す「から」に比べて、「を」は分離+移動の意味が強く「新橋から銀座に出た」の場合は、「出る」は、移動の出発の意味ではなく、到着の意

⁵ 下線筆者

味になる。もし「新橋を出て、銀座に出た」という場合は、「新橋を」は移動の出発点になるが、この場合の「出て、」は出発の意味を表す。図21で示すと、以下のようになる。

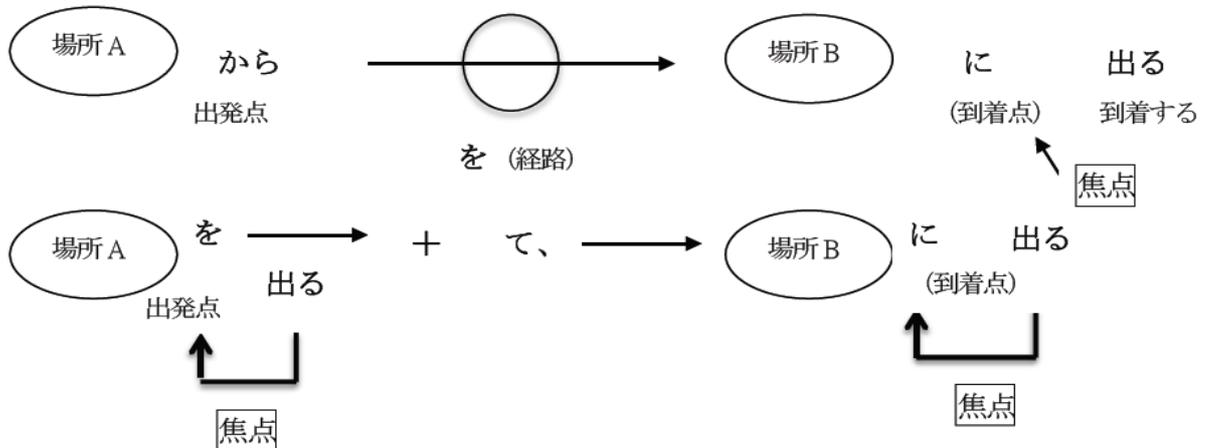


図21 「カラ～ニ出る」と「ヲ出て、ニ出る」の関係図式

したがって、移動の起点として、そこから離れ、移動することを意味している。例えば、「心臓を出た血が心臓に戻る」というような場合も、出発点「を」→循環（移動）→着点「に」と考えられる。しかし、「～に戻る」のような着点に焦点がある場合は、出発点の「から」格が使われ、「を」は使われない。また、循環の出発点としては「心臓を出た血が心臓に戻る」となり、単なる出発点（起点）として考えるなら「心臓から出た血が心臓に戻る」となる。したがって、循環（移動）のない鼻血の場合は、「鼻から血が出た」となるが、「鼻を血が出た」とはならない。

このことを以下の図22で示す。

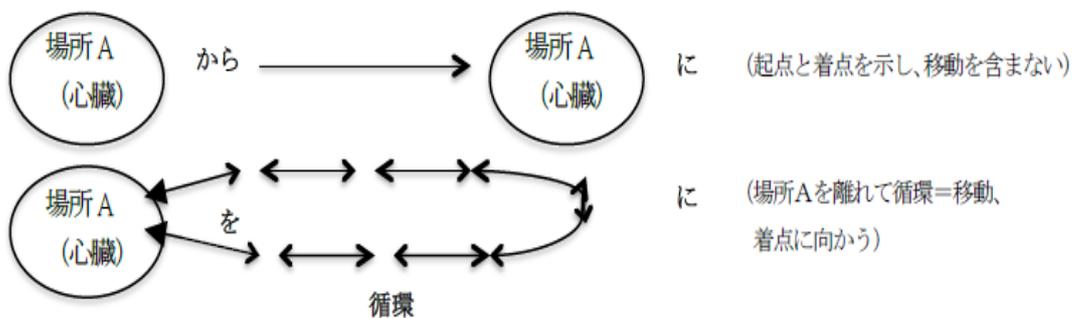


図22 単なる起点を表す「から」と循環の起点を表す「を」の関係図式

〔止まっていた乗り物が発進する〕

構文フレーム：〔乗り物〕 {が／は} (〔所〕 から) 出る

共起例：

〔乗り物〕：列車、船、汽車、電車、特急、バス、船、飛行機

〔所〕：番線

用例：

1. 次の列車は20分後に5番線から出ます。
2. 船が港から／を出る。
3. この列車は、この駅からは出ません。

この〔止まっていた乗り物が発進する〕の категорияでは、次の例のようにどこから出るのか、出発するのか、目的地への移動のイメージであれば、「を」、出発地点の指定、出現の意味としては「から」格のほうが適当であるように思われる。

☆ 8時の新大阪行きの「のぞみ」は、今東京駅を出て、新大阪に向かった。(出発して、大阪へ向かう様子)

☆ 船が港を出た。(出港して、目的地に向かって進んでいく様子)

☆ 8時の新大阪行きの「のぞみ」は何番線から出ますか。(どの線かをきく。どこかへ向かうという意味はない)

☆ 船が港から出た。(船が港の中から外海に移動した様子)

[内部にあったもの・隠れていた物が外部に現れる]

構文フレーム：① [天体・物・身体部分] {が／は} ([所] から) ([所] に) 出る

【用法】「～が」を使う場合、語順は「～から～に～が」の法が自然なことが多い。

共起例：

[天体・物・身体部位]：芽、双葉、穂、根、日、月、星、風、霧、虹、光、火、煙、釘、足、舌

[所]：東の方、靴

用例：

1. 太陽は東から出る。
2. アパートの隣室から火が出た。
3. 浅間山の噴火口から煙が出ている。
4. なくしたと思った財布が座布団の下から出てきた。
5. 壁から釘の先がちょっと出ている。
6. 地面から筍の先が出た。
7. 布団から足が出る。

この場合の出発点は、どこかへ向かって移動していくというイメージがないため、すべて「から」格となり、「を」格はない。「から」格については、『動詞の意味・用法の記述的研究』では、特定の地点から地点への移動ではなく、非常に広くて限界がはっきりしないような「海から山から」のような方向的なニュアンスを帯びた名詞には「から」が使われるとしている。また、『学研国語大辞典』は、「出発点としての地点・地域から、方向を表すものへと近づく」という場合も、「から」になると言う。確かにこのような場合、「を」格ではなく、「から」格が妥当だと思う。

構文フレーム：② ([人・生き物] は) ([身体 (部分)] から) [生理現象] が出る

共起例：

[人・生き物]：人

[身体部位]：額、手、足、目、鼻、口、背中、脇

[生理現象]：咳、しゃっくり、くしゃみ、つば、鼻水、あくび、涙、汗、乳、熱、血、膿

用例：

1. 優子は額から汗が出ていた。
2. 目から涙が出る。

3. 傷口から血が出ている。

これらも出発→移動のイメージがないため、「から」格のみが使われ、「を」格は使われない。

構文フレーム：③（[人] は）[力・心理・言葉] が（[所] に）出る

共起例：

[力・心理・言葉]：言葉、不平不満、怒り、喜び、感情、感じ、悲しみ、言葉、勇気、癖

[所]：顔、口

用例：

1. あの先生は感情 [喜び／悲しみ／怒り／不満] がすぐ顔に出る。
2. 非難の言葉が口に出る。
3. 実力 [勇気／悪い癖] が出る。
4. 彼は感情がすぐ顔に出る。

この3つの構文フレームは「内部にあったもの・隠れていた物が外部に現れる」の категорияに属しており、動詞「出る」の意味は、出発ではなく、出現である。そこにはどこかへ向かうという移動のイメージはない。したがって、その出発点は「から」のほうが適当となる。しかし、「を」格は、「出発、分離+移動」のイメージがあるので、使えなくなる。

もし、出現物がどこかに移動する場合には使用可能であろう。例えば、次の例である。

例：心臓から血が出る（出血する）（出現 → 「から」のみ）

心臓を出た血が心臓に戻る（循環 → 「を」が使用可能）

「を」と「から」と「出る」には密接な関係があると思われる。『動詞の意味論的文法研究』（1994）では、「を」格を取る自動詞を9つのタイプに分類し、その中の「動作の経由点」、「動作の起点」、「移動動作・作用の基点」を示すものが「を」格を取ると述べている。「出る」が「を」格をとるのは「分離+移動」のイメージを伴った場合しかないと思われる。

以上をまとめると、次のようになる。



他動詞「出す」：動作・作用の対象

自動詞「出る」：①一定の形での生活を意味する場所を離れる

②分離+移動

〔 食事、金銭、命令などが与えられる 〕

構文フレーム：[物・事] {が/は} [人・集団] に出る。

【用法】「～が」を使う場合、語順は「～に～が」のほうが自然な事が多い。

共起例：

[物・事]：奨学金、コーヒー、宿題、許可、ボーナス、お金

[人・集団]：学生、全員、登山者、会社員

用例：

1. この奨学金は3年以上の学生に出る。
2. 全員にコーヒーが出た。
3. 登山者に許可が出る。
4. 数学の宿題が出る。
5. 臨時のボーナスが会社員に出た。

〔食事、金銭、命令などが与えられる〕というカテゴリーは、『学研国語大辞典 第二版』では、所有関係における移動 と分類され、金の移動「お前のもらった金は、あれはすべて、芝の祖父さんから
でたものだそうだ」(『暗夜行路』) は「から」格の「物などを受け取る相手を表す」点と同じく、「を」
格は使えない。「発令、支払う」という点について、「許可がでる」「ボーナスがでる」は「が」格をと
り、出発点は、これも「から」格となる。

〔 店などが営業を始める 〕

構文フレーム：[店] {が/は} ([所] に) 出る

【用法】「～が」を使う場合、語順は「～に～が」のほうが自然な事が多い。

共起例：

[店]：店、喫茶店、屋台

[所]：駅前、表通り、境内

用例：

1. 新聞の広告に載っていた店が駅前に出た。
2. 今度表通りに喫茶店が出た。
3. 神社の境内に屋台の店がたくさん出ている。

[事柄の由来がある起源から生じている]

構文フレーム：[事] {が/は} [事] から出る

共起例：

[事]：熟語、文章、名言、名句、ことわざ、言い伝え、小話、昔話、迷信、俗信、論語

用例：

1. この言葉はオランダ語から出た。
2. この行事は昔の遊郭の習わしから出たものだ。
3. この句は論語から出ている。

〔事柄の由来がある起源から生じている〕というカテゴリーでは、「出所」と同じく、「源・根拠」を表す時には、「から」しか使えない。

3-4-1-5 「出る」に関するまとめ

「を」格、「から」格と移動動詞「出る」との分析を行ったが、そこから明らかになった結論は、先行研究とは、やや異なっていることがわかった。先行研究では「を」格は抽象的なもの、例えば、三宅(1995)「去年、太郎は大学 {を/*から} 出た」という例を引き、「から」格は具体的なものを表すとしている。つまり、「大学を出る」の「大学」は、抽象的なものを表しているために、「を」格がとられるという結論である。しかし、両者の違いは、「を」格が示すものが抽象的か具体的かという問題ではなく、動詞の意味と格助詞そのものの基本イメージに関連していることがわかった。つまり、「から」格は単なる離脱点、起点というイメージを表わし、「を」格は移動、通過の場所というイメージを含むため、出発後、ある場所へ向かって進んでいくというイメージがあり、そこからこれらの違いが出てくるものと考えられる。

以上の結果をまとめると以下のようなになる。

【両者が使える場合】

- 「から」 ①起点そのもの、あるいは起点の選択、指示のイメージがある。
- ②時間的には、一時的に出ることが多い。(出立後の継続の意味が薄いためか)
- ③着点がある場合には、両者ともに使える。しかし、「～から～まで」と「～から～に」の場合は「から」格しか使えない。「～を～に」の場合は、「を」格は経路を表す。

- 「を」 ①分離、離れ移動するイメージが強い。出立し、どこかへ移動し向かう、一定の形での生活を意味する場所を離れて、別のところで暮らすようになるなど。
- ② 時間的には、移動の継続の意味から、長時間、あるいは、かなりの長期間にわたって離れ
- ることが多い。
- ③着点がある場合には、「～を出て、～に」の場合は使用可能である。

【「を」が使えない場合】

- ① 「方向を表す名詞(東、西、上、下、中など) + 出る」の場合は、方向は起点ではなく、この場合の「出る」はどこかへ向かう移動の出発点ではなく、「出現」であるため、「を」格は使えない。
- ② 「出る」と「から」格の用法と同じく「物などを与えてくれる相手、授与の起点」、「事柄の由来・出所」の場合も、離脱後の継続的移動のイメージがないため「を」格は使えないことがわかった。
- ③ 内部にあったもの・隠れていた物が外部に現れる場合には、「から」格しか使えない。
- 「を」
- 格は、循環や移動などを含んだ出発点のイメージしかない。

【「から」が使えない場合】

- ① 時間的な継続的、移動のイメージを含む場合、「から」格は使えない。
- 境界、範囲、程度を超えてさらに継続、発展、展開していくという場合、「から」格は使えない。
- ② 分離、離れ移動するイメージが強い。出立し、どこかへ移動し向かう、一定の形での生活を意味する場所を離れて、別のところで暮らすようになる場合、「を」格しか使えない。

3-4-2 出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「落ちる」について

先に述べたが、動詞「落ちる」も「出る」と同様に、「を」格と「から」格がよく置き換えられる移動動詞で「出る」に次いで、多いことがわかった。「を」格と「から」格の置き換え可能な移動動詞「落ちる」の分類は、先行研究では、「瞬間動詞」とも言われ、「移動動詞」とも言われている。「落ちる」の文型は「から」と深く関係があると思われる。しかし、「を」との関係も少なからずあるようだ。『日本語基本動詞用法辞典』(1989)によると、上から下へ自然の力で移動する場合には、「妹が二階から落ちた」「弟は階段を落ちた」の両者が使えるとしている。また、地位・品質・程度などが低い場合には、「地位を／から落ちる」の両者が使えると指摘している。そこで、両者ともに使える場合のニュアンス、場面による差異について詳しく考察し、使えない原因を探り出す。また、「落ちる」についての先行研究は、ほとんど「落ちる」という動詞そのものの意味分析であり、格助詞「を」、「から」との関係にはあまり触れていない。本研究では、まず先行研究における「落ちる」の基準について、「落ちる」の統語的振舞い、意味ネットワーク(意味拡張)を踏まえて、基本的な特徴を明らかにしたいと思う。次に、辞書、日本語表現活用辞典、コーパスなどによる多くの実例を通じ、構文や共起するものをまとめ、格助詞「を」格と「から」格が最も置き換えられるのは、どのカテゴリーなのか、置き換えられないものには、どのような要因があるのか、どのようなルールに従っているのかを探り出す。最後に、先行研究による「落ちる」の基本的な特徴と「を」格「から」格との関連性を探ることとする。

さらに、辞書、日本語表現活用辞典などによる多くの実例を通じ、構文や共起するものをまとめ、格助詞「を」格と「から」格が最も多く置き換えられるのは、どのカテゴリーなのか、置き換えられないものには、どのような要因があるのか、どのようなルールに従っているのかを探り出す。最後に、先行研究による「落ちる」の基本的な特徴と「を」格「から」格との関連性を探ってみたい。これらの分析を通じて、「を」格「から」格と移動動詞「落ちる」との繋がりを明らかにし、「を」格と「から」格のコア・イメージを明らかにすることを目的とする。

3-4-2-1 先行研究における「落ちる」の定義と構文

「落ちる」の定義は以下のように示されている。

森田良行(1977)は、次のように述べている。

「落ちる」はある位置(上の位置)を占めていたものが何かの理由、他の力によってそこから離され、行き着くところ(下端)まで一挙に移ること。次の三つの条件がある。

① ある位置にあったものが、そこから離れ去る作用。

- ① には、二つもある。一つは、そのものが全体がその位置（上位）を離れ、落下する場合、いま一つは、全体から一部が分かれて離脱する場合である。「二階から落ちる」、「都を落ちる」。
- ② そこを離れてから（引力などによって）行き着くところまで移動する作用。（主として上から下へ）
- ③ そこが終局のところまで行き着くこと。③の“終局のところまで行き着いてしまう”という意識が働く。“中間段階は飛ばして、一挙に下端まで”である。「落ちる」には到着点に焦点があることを意味する。

この三つの段階「離脱-移動-到着」のどこを強調するかで「落ちる」に種々の意味が出てくると述べている。

（森田良行 1977）

『動詞の意味・用法の記述的研究』（1972）では、「落ちる」について、『おちる』は、ふつうのばあい、上から下への移動を表わし、したがって、帰着点は下にあるのだが、その方向性がうすれて、単に移動の帰着点を示す意味しかもたない、というのに近くなるばあいがある」と述べている。

柴田武（1976）は、「オチルは、物体が重力によって移動することを表わし、移動の到着点のみが重要視されている。移動が意図的でない」と述べている。

太田真由美（2012）では、「落ちる」を6つのタイプにわけ、以下の図1で示している。

別義1：〈物体が〉〈存在していた空間的に上の領域から〉〈重力に従い〉〈空間的に下の領域に〉〈移動する〉

「酔っぱらって、階段からおちた」

「屋根（木）からオチル」

別義2：〈物体の部分が〉〈本来の空間的に上の位置から〉〈重力に従い〉〈空間的に下の位置に〉〈移動する〉

別義3：〈物体から〉〈物体の一部が〉〈分離し移動、または消滅し〉〈その結果〉〈物体が〉〈分離し移動、または消滅した物体の一部が〉〈存在しない状態に〉〈変化する〉

別義4：〈人の状態〉〈それまでの状態から〉〈異なった状態に〉〈変化する〉

別義5: 〈程度が〉 〈それまでの上の位置から〉 〈大幅に〉 〈下の位置に〉 〈低下する〉

別義6: 〈物体が持つ力から〉 〈力の一部が〉 〈消滅し〉 〈その結果〉 〈物体が持つ力が〉 〈消滅した力
の一部が〉 〈存在しない状態に〉 〈変化する〉

.....▶ 破線はメタファー
——▶ 実線はメトニミー

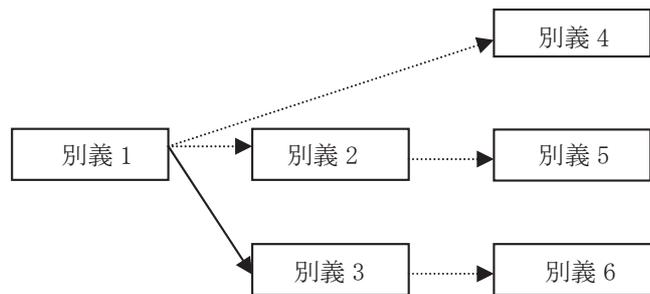


図 23 「落ちる」の多義的別義間の関係

(太田

2012)

『日本語多義語学習辞典 動詞編』(2012)では、次の図24のように示している。

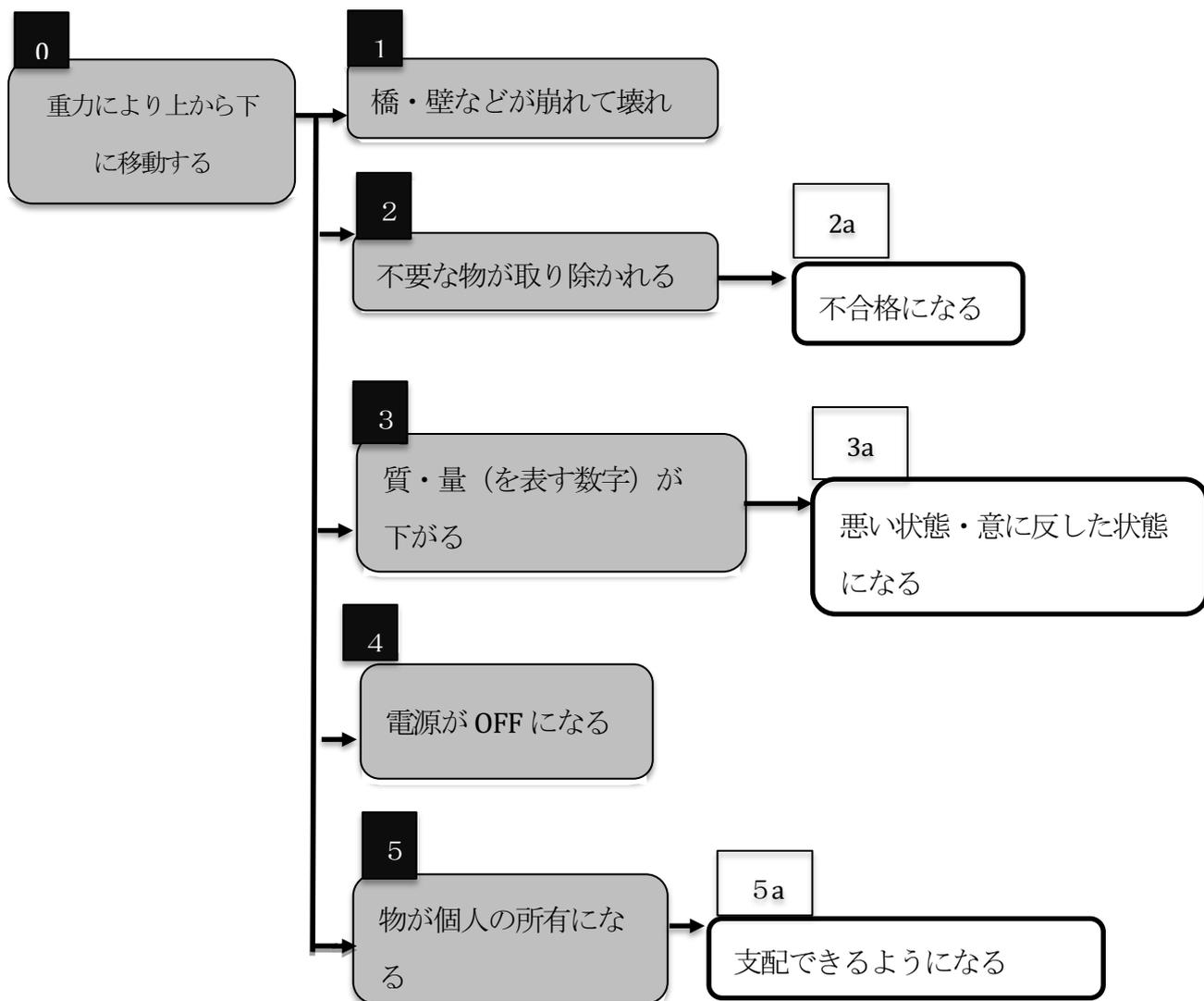


図24 「落ちる」の用法

3-4-2-2 辞書における「落ちる」の分類

表8は、「落ちる」に関する『日本語基本動詞用法辞典』（1989）（大修館書店）、『大辞泉』（1995）（小学館）、『学研国語大辞典 第二版』（1988）（学習研究社）の用法と用例の分類をまとめたものである

日本語基本動詞用法辞典	学研国語大辞典	大辞泉
<p>1. 上から下へ自然の力で移動する</p> <p>例：妹が二階から落ちた</p> <p>猿が木から落ちる</p> <p>本が手から落ちた</p> <p>飛行機が海に落ちた</p> <p>地震で棚から本が落ちる</p> <p>弟は階段を落ちた</p> <p>涙がほおを落ちる</p>	<p>1. [その意図がなく、自然の力によって] 高い方から低い方へ位置が移る。落下する。</p> <p>「読んでいた本が彼の手から落ちる」</p> <p>「川を越すたびに、橋が落ちていないのを意外に思った」</p> <p>「幾千年の後には此古池が、人の知らない間に、落ちた椿の為に、埋もれて、元の平地に戻るかもしれぬ」</p>	<p>1. 上から下へ自然に、また、急に移動する。</p> <p>㊦ 落下する</p> <p>㊧ 雨・雪などが降る</p> <p>㊨ 日・月が沈む</p> <p>㊩ 光・視線などが注ぐ</p> <p>㊪ 客のお金などがその場所で使われる</p>
<p>2. 付着していたものが取れる</p> <p>例：ズボンから汚れが落ちた</p> <p>化粧[布のシミ・体のあか</p> <p>／色／ペンキ]が落ちる</p>	<p>2. [雪・雨などが] 降る。</p> <p>「当日は午少し前から、ちらちら白いものが落ち始めた」</p>	<p>2. その場所から離れてなくなる。</p> <p>㊫ ついていたものが取れる</p> <p>㊬ 病気・憑き物などが除かれる</p> <p>㊭ 減って細くなる。ある部分がくぼ</p> <p>んだ状態になる。へこむ</p>
<p>3. 入っているべき名・記号・語・</p> <p>文が抜ける。</p> <p>例：彼の名前が名簿から落ちていた論文から参考文献が落ちてしまった契約書から大切な条</p>	<p>3. ついていたものがとれてなくなる。</p> <p>「色が落ちる」</p>	<p>3. その中に入れるはずのものが漏れる。一部分が欠ける。ぬける。</p> <p>「電話番号がリストから落ちている</p>

件が落ちている。		
4. 試験で不合格になる、または、その結果学校や会社などに入る事ができない。 例：弘は司法試験に落ちた。 真一は東京の国立大学を落ちた	4. 落第する。落伍する。 「第一志望の学校を落ちた場合の為に、そうするのが、その頃の習慣であった」	4. 落第する。落伍する。
	5. ひそかに逃げる。へんびな場所に移る。 「都を落ちて来て此の村に居を構えた公卿が」	5. 都を離れて地方へ移っていく。また、戦いに敗れて他の土地へ逃げっていく。 「都を落ちる」
5. 地位・品質・程度などが低い、または、低くなる。 例：その力士は番付が大関から関脇に落ちた 成績がトップからビリに落ちる		6. 物事の程度や段階、価値や力などが下がったり、悪くなったりする。低下する。 ㊦劣った状態になる。衰える。 ㊧地位などが下がる。 ㊨落ちぶれる。零落する。 ㊩品性が低くなる。墮落する。

表8 「落ちる」の意味・用法の分類のまとめ

3-4-2-3 「落ちる」の定義と「を」格、「から」格に関する辞書の問題点

以上の『日本語多義語学習辞典 動詞編』(2012)と『日本語基本動詞用法辞典』(1989)(大修館書店)、『大辞泉』(1995)(小学館)、『学研国語大辞典 第二版』(1988)(学習研究社)を見ると、「落ちる」の基本的な定義として「上から下への非意図的な移動」を挙げていることがわかる。

『日本語基本動詞用法辞典』(1989)では、「妹が二階から落ちた」という用例が出ている。この「妹が二階から落ちた」という用例の場合、「二階を落ちる」とは言えない。これに対して、「階段から／を落ちる」は両者が使える。また、『日本語基本動詞用法辞典』(1989)には、「涙がほおを落ちる」という用例が出ているが、「ほお」の場合もそうである。また、4の「落ちる」が「落第する」とか「ひそかに逃げる」という意味の場合は、「を」格の方が適切であり、「から」格は不適切である。「記号・語・文が抜ける」の場合は、「から」格の方が適切であろう。これら辞書の定義を見ると、すべて「上から下への非意図的な移動」を挙げている。しかし、これらを見ると、「～から落ちる」という用例が多く、実際に辞書の用例を見ても、「から」格のほうが頻繁に使われている。そこで、「から」格と「落ちる」との関連性を明らかにし、さらに、「を」格と置き換えられるのはどのようなカテゴリーなのか、使用状況も考察することにする。

3-4-2-4 「を」格、「から」格と移動動詞「落ちる」の構文分析

以下の「落ちる」の文型を『日本語基本動詞用法辞典』(1989)から、共起例は現代日本語書き言葉均衡コーパス、『大辞泉』(1995)、『学研国語大辞典 第二版』(1988)、『学研国語大辞典 第四版』(1994)などの用例をまとめ、「落ちる」の構文分析を行い、共起する要素を探り出す。

[意味・文型]

1. 上から下へ自然の力で移動する

構文フレーム：① [人・生き物・物] {が／は} {所} (から／*を) ([所] {に／へ}) 落ちる

共起例：

〈人・生き物・物〉：私、妹、猿、本、飛行機、雨

〈所〉：二階、階段、木、手、棚、空、足、頭、屋根、ベッド、惑星、天井、椅子、ソファー運転席、橋、塔、山の上、かご、馬、宇宙、崖、枝、滝、瞳、高さ、高い場所／ところ、上、舞台、ベランダ、窓、ヘリコプター、車、自転車、ポケット、ビル、頭上、お尻、腹、背中、腰、唇、リフト、船、目、容器、脚立、蛇口

用例：1. 妹が二階から落ちた

2. 猿が木から落ちる
3. 本が手から落ちた
4. 飛行機が空から海に落ちた
5. 地震で柵から本が落ちる
6. 頭から落ちているのか、足から落ちているのか。無意識のうちに両手が空をかく。(『銀の戦士』2002)
7. 親父が左官で、壁を塗ってて屋根から落ち、一年ほど生きていて死んだ。(『奥州の牙』2001)
8. 深夜にベッドから落ちて頭を打った。(『AERA (アエラ)』朝日新聞社 2001)
9. 他の惑星から落ちてくる石には畏敬の念を持ち…。(『野生の果実』2002)
10. 突然そうきかれ、驚いたリビーは危うく椅子から落ちそうになった。
(『キスはおあずけ! 2004』)
11. クレーンの運転席から落ちる子供を! (『あたしの中の王子さ』2002)
12. 力任せに引っ張り出すため、ほかの洗濯物も一緒に出てかごから落ちる場面があった。
(『活動分析アプローチ』2001)
13. なかば閉じられた瞳から落ちる視線の先には、小さな布のうえに横たわった幼子キリストが…(『フィレンツェ・ミステリーガイド』2003)
14. 三メートルほど吹っ飛び、尻から落ちて、男は叫び声をあげた(『罅・街の詩』2001)
15. 逆に琴ノ若の左差し手を抜いての上手投げに腹から落ち、痛い1敗を喫した白鵬(はたき込み)垣添垣添が低くぶちかましたが…(『大相撲』2005)
16. 足をつくのではなく、お尻と背中から落ちてください(『空中ブランコ』2004)

構文フレーム：② [人・生き物・物] {が/は} ([所] を) 落ちる

共起例：

〈所〉：階段、ほお、斜面

用例：1. 弟は階段 (を/から) 落ちた

2. 涙がほお (を/から) 落ちる

3. 斜面 (を/から) 落ちる力を効率的に取り込んだショートターンをすることです(『月刊SKI JOURNAL』2002)

用法1. [上から下へ自然の力で移動する]というカテゴリーでは、「から」格と「を」格ともに使える。しかし、これには、使用制限がある。「から」格にはただの基点のイメージのみが含まれ、移動の経路は含まれていないである。「から」格と動詞「落ちる」の関係では、下へ移動する離脱点のイメージがある。しかし、この場合、下に向かう移動の経路が含まれるのなら「を」格となる。この以下の図24で示す。

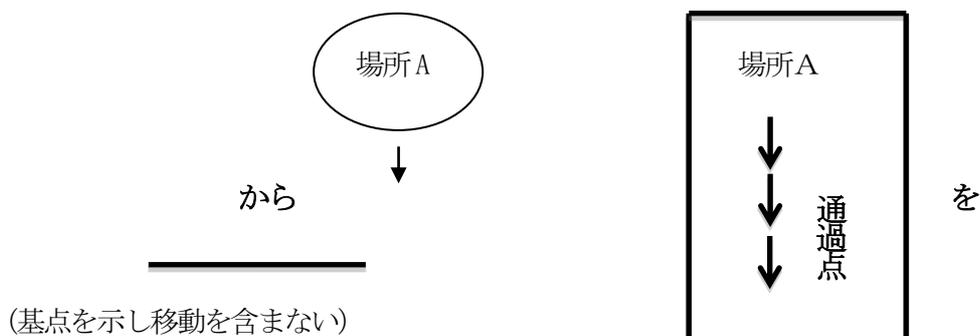
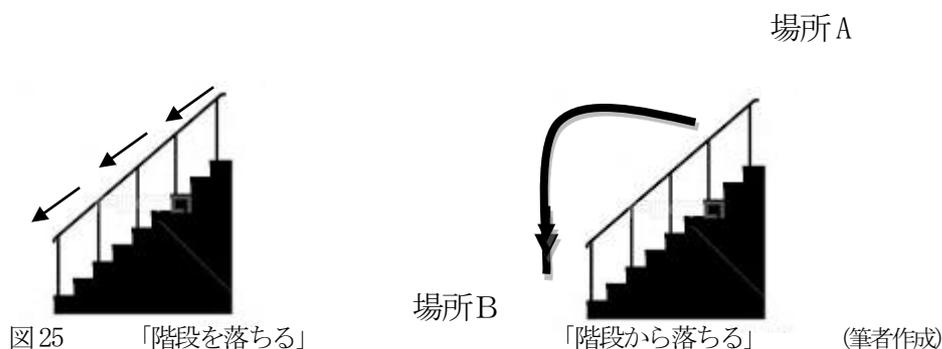


図24 「基点を表わす「から」のと通過点を表わす「を」格のイメージ」

例「階段 から / を 落ちる」の場合、「から」格、「を」格の両者が使えるが、ここにはニュアンスの違いがある。「階段から落ちる」の場合には、階段から空中を飛んで落ちる感じがし、途中の連続的な移動はない。また、「から」格を使うと、よく後ろに「怪我をした」という言葉が来ることが多い。これに対して、「階段を落ちる」の場合には、階段をゴロゴロ落ちていく移動のイメージがある。しかし、後ろに「怪我をした」はあまり来ない。これは「階段から落ちる」が「空中を飛んで落ちる」ために、怪我に結びつきやすいものと思われる。「階段 から / を 落ちる」のイメージの違いを図25で示す。



「落ちる」の前に来るすべての名詞が上に示されているように使えるわけではない。構文フレーム①の共起例から見ると、すべて「から」格の用例であるが、「を」格と置き換えられる名詞は「階段」、

「崖」、「滝」である。その原因は上に示されているようで、「から」格はどこから落ちて、その場所から空間を飛ぶようなイメージであり、「を」格は移動の経路を示すため、その場所は垂直でなく、移動、通過の経路がある場所にしか使えない。構文フレーム②「弟は階段（を／から）落ちた」、「涙がほお（を／から）落ちる」、「斜面（を／から）落ちる」の共起例のようである。以下の図26で示す。

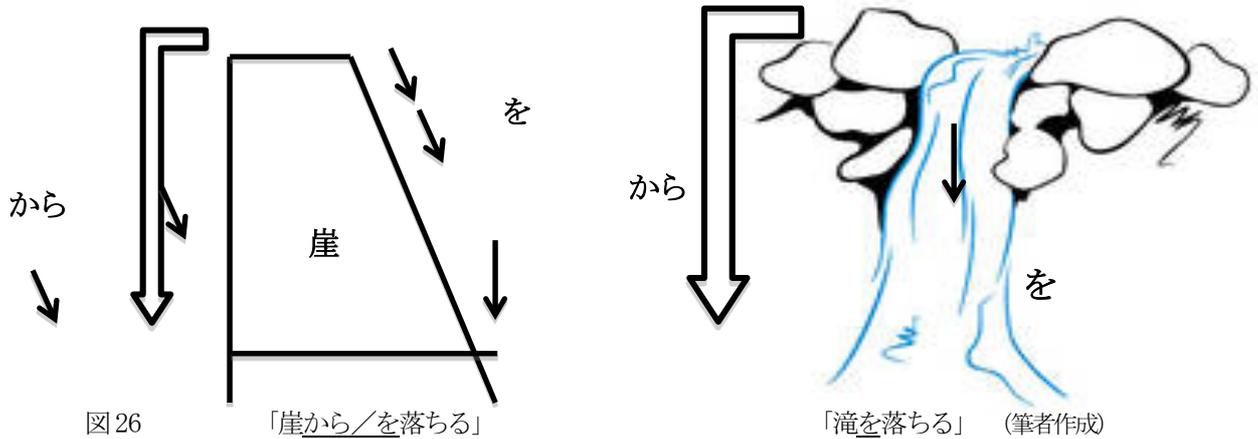


図26「崖（から／を）落ちる」は「から」格と「を」格とも使える。「から」は左の矢印のように垂直的に空中を飛んでいくイメージがあり、「階段から落ちる」と同じように、後ろによく「怪我をした」が来る。「崖」の場合は、よく後ろに「致命的な怪我をした／死んだ」が来る。それに対して、「を」格は右の矢印のように、移動通過のイメージで、後ろにはあまり「致命的な怪我をした／死んだ」は来ない。

構文①の共起例で身体部位（腹、腰、背中など）がこの場合「から」格の方が適切である。身体部位だけでなく、物も可能である。その理由は、離脱点のどこから落ちる、場所から落ちるのではなく、「身体どの部位から先に落ちたか」の意味である。つまり、すでに着点の位置に落ちたという意味である。この場合には、移動がないので、「から」格しか使えない。以下の図27で示す。



図27では、「どこ部位から先に落ちた」の意味で、①から先に落ち、最後は②に落ちるというイメージである。

2. 付着していたものが取れる

構文フレーム：[物] {が/は} [所] (から/*を) 落ちる

共起例：

〈物〉：汚れ、

〈所〉：ズボン、

用例：1. ズボン (から/*を) 汚れが落ちた

2. 化粧[布のシミ・体のあか/色/ペンキ]が落ちる

この[付着していたものが取れる]というカテゴリでは、一部の物が取れ、なくなる場合には、移動がないので、「から」格の方が適切である。

3. 入っているべき名・記号・語・文が抜ける。

構文フレーム：[文字・言葉] {が/は} [書類・言語作品] (から/*を) 落ちる

共起例：

[文字・言葉]：名前、参考文献、大切な条件、電話番号

[書類・言語作品]：名簿、論文、契約書、リスト

用例：1. 彼の名前が名簿 (から/*を) 落ちていた

2. 論文 (から/*を) 参考文献が落ちてしまった

3. 契約書 (から/*を) 大切な条件が落ちている

4. 電話番号がリスト (から/*を) 落ちている

この[入っているべき名・記号・語・文が抜ける]のカテゴリでは、2の[付着していたものが取れる]と同様に、入っている物が抜け、なくなる場合にも、移動がないので、「から」格の方が適切である。

4. 地位・品質・程度などが低い、または、低くなる。

構文フレーム：① [人・組織・乗り物・物] は ([事・数量] が) ([数値・地位] から/*を)
([数値・地位] {に/へ}) 落ちる

共起例：

[数値・地位]：大関、トップ、C級1組

[数値・地位]：関脇、ビリ

- 用例：1. その力士は番付が大関（から／＊を） 関脇に落ちた
2. 成績がトップ（から／＊を） ビリに落ちる
3. C級1組（から／＊を） 落ちるのはいちばんばからしい（『新・対局日誌』2001）

構文フレーム：② [人] {が/は} [地位] （を/から） 落ちる

共起例：

[地位]：トップ

用例：1. 彼はついにトップの座（を/から） 落ちた

この「地位・品質・程度などが低い、または、低くなる」というカテゴリーでは、構文フレーム①着点を表わす「に」格を修飾するので、「から」格のほうがふさわしい。「から」格は、トップの地位から2番、あるいは他の地位に落ちるイメージであり、下位への移動であれば、高い地位でなくても使用可能である。構文フレーム②では、「から」格も「を」格も使えるが、「を」格は、必ず最も高い地位から落ちて、その地位を失う意味が含まれるので、トップあるいは、一番という地位でなければならない。以下の図28で示す。

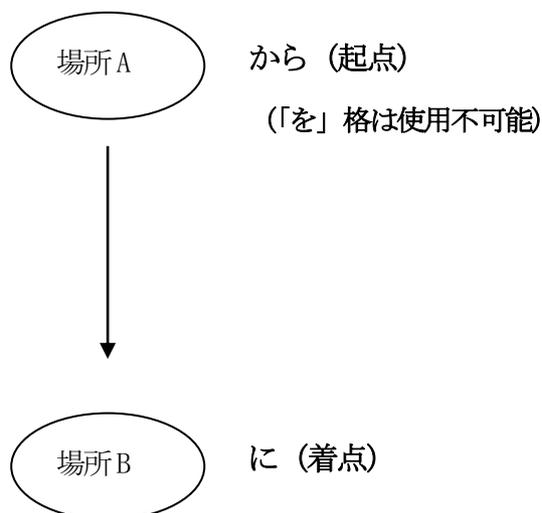


図28 「から」格と着点の「に」格

5. 試験で不合格になる、または、その結果学校や会社などに入る事ができない。

構文フレーム：① [人] {が/は} [学校] (*から/を) 落ちる

共起例：

[学校]：医学部、志望校、国立大学

用例：1. 医学部 [志望校] (*から/を) 落ちる

2. 真一は東京の国立大学 (*から/を) 落ちる

この[試験で不合格になる、または、その結果学校や会社などに入る事ができない]というカテゴリーでは、「を」格しか使えない。「学校を落ちる」は「落伍する」というマイナスの意味で、プラスの意味は「学校を出る=卒業する」である。両者とも「を」格しか使えない。「学校を出る」の場合には、学校を出て、他の所に行くという意味で、「学校を落ちる」は学校に入れない、他の準備に進むという意味である。

6. ひそかに逃げる

共起例：1. 都 (*から/を) 落ちる

2. 都 (*から/を) 落ちて来て此の村に居を構えた公卿が...

この[ひそかに逃げる]というカテゴリーでは、「落ちる」は「逃げる」、「負ける」という意味で、必ず都のような上位の場所から田舎のような下位の場所への移動のイメージがあり、経路があるため、「を」格の方が適当である。もし、「から」格であれば、落下ということになり、「都から落下する」ということになり、考えられない。これに類似した用例として「故郷 (*から/を) 離れる」があるが、「から」格は使えない。「故郷を離れる」は故郷を離れて、どこか遠くの別の場所へ移動するイメージが含まれるので、「を」格の方がふさわしいものと思われる。

3-4-2-5 「落ちる」に関するまとめ

「を」格、「から」格と移動動詞「落ちる」に関する分析の結果をまとめると以下ようになる。

【両者が使える場合】

「から」① 上から下へ垂直に、飛ぶような場所の基点。(経路を含まない)

② 地位が低くなる場合。地位の高さは関係ない。(経路を含まない)

- 「を」
- ① 上から下への移動が含まる。
 - ② 上から下への移動の経路がある場合に限られる。
 - ③ 地位が低くなる場合、最も高い地位から滑り落ちていくイメージがなければならない。

【「から」しか使えない場合】

- ① 着点「に」格がある場合。「～から～に」
- ② どの部位から先に落ちたかという場合。
- ③ 物がとれる、なくなる、抜ける場合。

【「を」しか使えない場合】

- ① 落伍する、落第する、不合格になる場合。
- ② 負けて都から田舎へ逃げる。

3.4.3 出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「おりる」について

動詞「出る」、「落ちる」に次いで、動詞「おりる」は、調査の結果、出現率が高かった。この「降りる」は『岩波 国語辞典』(2009)によると、「高い所から低い方へと移って、ある位置・場所に着く」とある。この用法の場合には、「山をおりる」「壇からおりる」のように「を」格と「から」格の両者が使えるとしている。また、「乗り物から出る」場合にも、「電車からおりる」と「船をおりる」のように「を」格と「から」格の両者が使えると指摘している。両者ともに使える場合のニュアンス、場面による差異について考察し、使えない原因を探り出すことにする。

「降りる」に関する先行研究を見ると、ほとんど「降りる」という動詞そのものの意味分析であり、格助詞「を」「から」との関係についてはあまり触れていない。本研究では、まず先行研究における「降りる」の基準について、「おりる」の統語的振舞い、意味ネットワーク(意味拡張)を踏まえて、基本的な特徴を明らかにしたいと思う。次に、辞書、『日本語基本動詞用法辞典』(1989)、『日本語多義語学習辞典 動詞編』(2012)、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(少納言)』などによる多くの実例を通して、構文や共起するものをまとめ、格助詞「を」格と「から」格が最も置き換えられるものは、どのカテゴリーに属するのか、また、置き換えられない場合には、どのような要因があるのか、さらに、どのようなルールに従っているのかを探り出す。最後に、先行研究による「おりる」の基本的な特徴と「を」格「から」格との関連性を探ってみたい。これらの分析を通じて、「を」格「から」格と移動動詞「おりる」との繋がりを明らかにし、「を」格と「から」格のコア・イメージを明らかにすることを

目的とする。

3-4-3-1 先行研究における「おりる」の定義と構文

「おりる」の定義は以下のように示されている。以下3点。(下線筆者)

まず、『ことばの意味1 辞書に書いてないこと』(1976)では、まず、「おりる」⁶は、「人間の空間的な上下の移動を表わす」と述べ。また、「降りる」の主体は、人間以外のものでも構わないとし、何らかの到着点に焦点が置き、そこまでの移動と基点から完全に離れ、主体の有意的な動作で、高い所から低い所への移動であると述べている。

例1 二階からオリル。(基点)

例2 長い石段をゆっくりオリテいった。(経路)

例3 郵便物を取りに一階にオリタ。(到達点)

例4 ×物価は先月より幾分オリタ。(オリルが人間の空間的な上下の移動を表わす(p. 25))⁷

例5 ×外では気温が零下五度までオリタ。(オリルが人間の空間的な上下の移動を表わす(p. 25))

例6 遮断機がオリタ。(もう通れない)→オリルの主体は人間以外のものでもかまわない

例7 屋上から宣伝のたれ幕がオリテいる。(「たれ幕」の先が地面についていることが暗示されている)

例8 年金がオリタ。(年金を入手した人に焦点を置いた)→何らかの到着点に焦点が置かれ、そこまでの移動

例9 船(タクシー・電車)をオリル。 } 「船」、「議長」などの基点から完全に離れる

例10 議長(勝負)をオリル。

例11 ×椿の花がポトリとオリタ。(主体の有意的な動作)

例12 山をオリル。(到達点に焦点を合わせる、基点を完全に離れる)

例13 ×船で川をオリル。(高い所から低い所への移動ということも考えられない場合にはオリルは使えない)

『ことばの意味1 辞書に書いてないこと』(1976) 柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進
(pp. 24-31 より)

⁶ 『ことばの意味1 辞書に書いてないこと』(1976)では、「オリル」というカタカタ表記が使われている。

⁷ ()内は、者が『ことばの意味1 辞書に書いてないこと』から引用し付したもの。

次に、『日本語類義表現のニュアンスの違いを例証する類語使い分け辞典』（1998）では、「おりる」について、到着点に焦点のある・全体的・連続的な下への移動と何かを辞めるとして、以下の例を挙げている。

例1 山〔階段・坂道〕を下りる。（経路が含まれているとしても、それから離れて平地に出ることが目的）⁸

例2 木から下りる・5階から2階に下りる・地上に下りる・霜が降りる・鍵や幕が下りる
（最初の場所・基点を離れるとしても、明らかに到着点に視点がある。

例3 権力の座〔役目・ゲーム〕を/から下りる。（「を」を「から」に置き換えても意味は同じ）

例4 ×川を下りる。（川そのものからはなれることになってしまっ意味をなさなくなる。山なら冬山や険しい山など、下りるのに困難を感じる場合は「下る」がふさわしい）

例5 階段〔はしご〕を下りる。（一段一段、順に段を踏んで下まで移動する）

最後に、『日本語表現活用辞典』（2004）では、次のような例を挙げている。

- ①（階段、クラブ、はしご、坂道、石段、スロープ、崖）を下りる
- ②（電車、列車、車、バス、船、エレベーター、馬、山、高速道路）を/から⁹降りる
- ③（台、壇上、舞台、マウンド、土俵、リング、2階、屋上、屋根、木、塔のてっぺん、山麓、山頂、空）から下りる
- ④（階下、地下、火口底、麓、血面、地上、庭）に下りる
- ⑤（霜、露、シャッター、遮断機、滑車、科技、幕、旗、鳥、飛行機、ケーブルカー）が下りる
- ⑥（許可、認可、命令、裁決、判決、助成金、年金、恩給）が下りる
- ⑦（主役、政権の座、座長の任、プロジェクト、仕事、番組、ゲーム、勝負、試合）を降りる

田中 茂範『空間と移動の表現』（1997）pp. 29では、「を」格の操作子機能について、「を」が空間辞として振舞う際の条件は、以下の例に見られるように「移動動詞との共起」であるとしている。

⁸（ ）は筆者が付加した

⁹「を/から」は原著では、「を」のみであったが、「から」も置き換え可能であると考え、筆者が付け加えた。

18a. 「乗客がバスから降りる」

b. 「乗客がバスを降りる」

19a. 「いかだが岸から離れる」

b. 「いかだが岸を離れる」

20 「明日はその公園を歩く予定だ」

以上の例を挙げ、「(X) を」は「Xを動作が作用する対象として取り立てよ」という「意味づけの仕方の要請を行う助詞」であると見なすと述べている。この「Xを動作が作用する対象として取り立てよ」という機能が「を」の操作子機能であるとし、「表現の意味づけ」は、この操作子機能を使って行われると述べている。そして、この「意味づけ」の結果として「を」が空間辞として認定され、さらに移動動詞によって空間辞化された「を」に〈移動の経路〉という意味が含意される。そして、「山を登る」は、「(X) を」の〈Xを動作が作用する対象として取り立てよ〉という操作子機能から自然に引き出されるというのがここでの論点であるとしている。

この操作子機能を「を」に付与する立場からいえば、「バスを降りる」というのは、「(起点) が問題なのではなく、〈降りるという動作が作用する対象としてのバス〉が話題になっていると考えるべきであろう」としている。

また、「Xから」はXを〈起点〉として、「Xを」Xを〈対象〉として捉えるということが重要であると述べている。さらに、移動動詞と「を」が共起することによって、「を」には〈移動動作が作用する対象〉すなわち、〈経路〉が含意されると述べ、以下の用例を挙げている。

21 a. 階段を降りる

b. ?階段から降りる

22 a. ?屋根を降りる

b. 屋根から降りる

田中氏は、上記の用例 21 を挙げ、一般的に〈階段〉は「おりる」という動作の〈起点 (地点)〉にはならないとし、飛び降りる場合には、この階段という〈地点〉が前景化され、「階段から飛び降りる」

という言い方が自然になるとしている。また、子供が危険な階段にいる場合には、(母親が)「早くその階段から降りなさい」という方が自然であるとしている。同様に、〈屋根〉は〈降りる行為が行われる地点〉であるとし、〈降りる動作が作用する対象〉すなわち〈経路〉ではないとしている。しかし、寺院の大屋根のような場合、屋根てっぺんから軒まで移動する場合には、移動の経路が存在し、「屋根をおりる」ということが可能ではないだろうか。また、屋根の軒から地面へ移動する場合には、「屋根からおりる」と言えるのではないだろうか。

『日本語多義語学習辞典 動詞編』(2012) では、「降りる」の用法について以下の図 29 で示している。

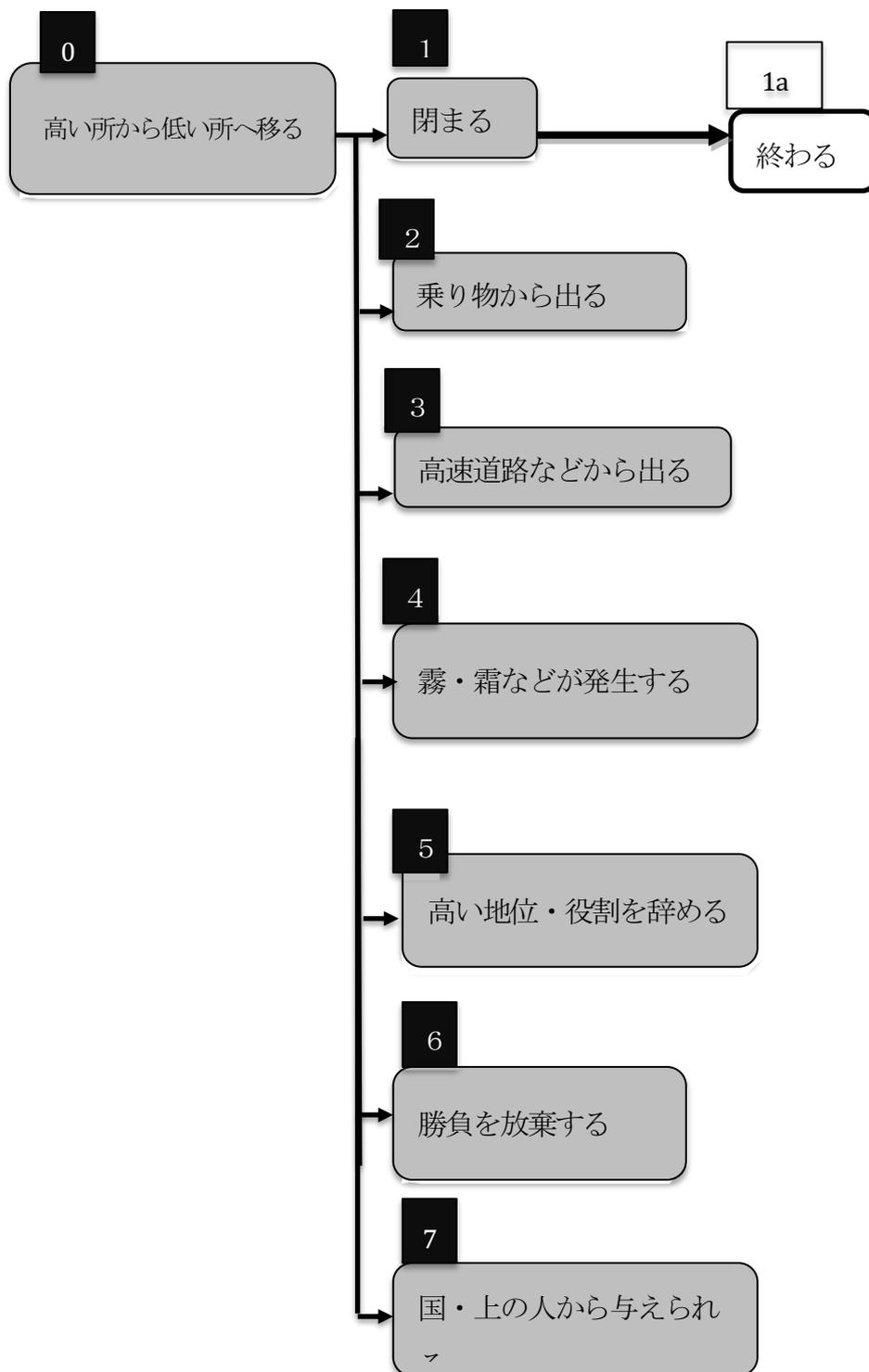


図 29 「おりる」の用法

3-4-3-2 辞書における「おりる」の分類

次の表9は『日本語基本動詞用法辞典』(1989)(大修館書店)、『大辞泉』(1995)(小学館)、『学研国語大辞典 第二版』(1988)(学習研究社)の分類をまとめたものである¹⁰。

日本語基本動詞 用法辞典	学研国語大辞典	大辞泉	岩波 国語辞典 第7版
2. 上から下 へ移動する	1. 上から下に移る。 ①高いところから下方へ 移る 「彼が段階を降りてくる と、下の部屋には二番目の 赤ちゃん坊が小さい布団の 中で眠っていた。」 ②(上から)下方へ動い てきてある位置に達する ③おろした状態になる 「いつかそつと行って見よ うとしたら、錠おりて居て どうしても開かなかった よ」	1. 高い所から低い方へと移っ て、ある位置・場所に着く。上 から下へ移動する。「山を一・り る」「木から一・りる」 2. 物が人の操作によって下の方 へ移動する。「錠が一・りる」 「幕が一・りる」	1. 上から下に移る。 ①高い方の所から(動いて来 て)下の位置・場所に着く 「山をおりる」、「壇からおり る」
2. 乗り物の中か ら外に出る	2. 乗り物から出る 「もう船を降りた」	3. ①乗っていた乗り物から出 る。「バスを一・りる」 ②(下りる)からだの外へ出 る。「回虫が一・りる」	② 乗り物から出る 「電車からおりる」「船をおり る」
3. ある役職から 退く	3. 高い地位から退く。職を やめる。 また、役がらをことわ	4. ①官位・役職を退く。職を辞 める。「管理職を一・りる」	③高い地位から退く。 「位をおりる」 ④勝負事などで、参加する権利

¹⁰以下のカテゴリーは「を」と「から」に関する「降りる」に限ってまとめた。

	る。 「ぼく自身は役員定期改選で機関紙部長をおりましたのでね。」	②俳優などが配役を断って、その役を辞める。「主役をー・りる」	をすてる。 「今日はついていないからもうおりするよ」
4. 地位の上の者から下の者へ物や許可などが与えられる	4. 官公庁から・支給（下付）される。また、命令・許可などが言い渡される。 「恩給が下りる。」	5. （下りる）官公庁などから、支給・下付される。「認可がー・りる」「年金がー・りる」	⑤役所などから、指示や決定が与えられる。 「許可がおりる」「恩給がおりる」
5. 霜・露などが生じる	5. 霜・露・霧・もやなどが（空から降って来たような感じに）生じる。 「目の前一面に濃いガスが下りて…」	6. （降りる）霧や霜などが地上・空中などに生じる。「露がー・りる」	2. 霧や霜が地上・草葉等の上に生ずる。置く。 「初霜がおりる」
	6. 体内から下に出る 「回虫がおりる」		3. もとあった所から下に離れる。 ①体内から下に出る 「虫下して回虫がおりる」 ②硯で墨がすれる 「この硯は墨がよくおりる」

表9 「降りる」の意味・用法の分類のまとめ

3-4-3-3 先行研究における問題点

以上の先行研究をまとめてみると、「おりる」に共通するものは「上から下への移動」のイメージである。『日本語類義表現のニュアンスの違いを例証する類語使い分け辞典』（1998）では、「権力の座〔役目・ゲーム〕を／から下りる」は「を」格も「から」格も使用可能であるとしている。しかし、そのニュアンスの違いについては説明してない。また、『日本語表現活用辞典』（2004）では、「を」を「から」に置き換えられる状況についても説明してない。さらに、「階段をおりる」は「を」格が示されている。しかし、「2階からおりる」は「から」格のみであるのに対して、「階段から／を降りる」は

両者ともに使えるのではないだろうか。また、『日本語類義表現のニュアンスの違いを例証する類語使い分け辞典』（1998）では、「*川を下りる」を非文であると指摘しているが、その理由として「下りるのに困難な感じる場合は「下る」がふさわしい」と述べている。しかし、困難な場合だから、「下る」になるのであろうか。筆者の考えでは、「崖をおりる」はほぼ垂直の崖をロープなどを使って、上から下への移動は、「崖をおりる」となるのではないだろうか。それに対して、「崖をくだる」は急斜面に近い崖を歩いて、上から下まで移動するといったイメージがある。新明解国語辞典を見ると、「おりる」について、「下の方へ向かって、低い位置に到達する」と書かれている。また、「くだる」に関しては、「[斜面などに沿ったりして] 高い位置から低い位置へ向かって移動する」と述べている。すなわち、「おりる」は上の位置から下の位置までの移動をさして、上の位置から下の位置に繋がる連続的な経路がないと考えられる。一方、「くだる」は上の位置から下の位置までを繋ぐ緩やかな経路、例えば、川や坂などがあり、それに沿って、移動するというのではないだろうか。したがって、「電車をおりる」とは言うが、「*電車をくだる」とは言わない。また、「エレベーターで一階をおりる」とは言うが、「エレベーターで一階をくだる」とは言わない。

本研究では、「を」格と「から」格がともに使用可能な場合に、どのような違いがあるのか、それを通して、「を」格、「から」格の基本的なイメージを探ろうとするものである。したがって、「を」格と「から」格の両者が使える場合に限って、進めていくことにする。

3.4.3.4 移動動詞「おりる」と「を」格「から」格の構文分析

以下の「おりる」の構文は『日本語基本動詞用法辞典』（1989）から取り出し、共起例に関しては「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、『大辞泉』（1995）、『学研国語大辞典 第二版』（1988）、『岩波国語大辞典第7版』（2009）、『日本語表現活用辞典（2004）』などの用例をまとめ、「おりる」の構文分析を行い、共起する要素を探り出した。

[意味・文型]

1. 【上から下へ移動する】

構文フレーム：① [人・生き物・乗り物] {が/は} ([所] から) [所] {に/へ} 降りる

共起例：

〈人・生き物・乗り物〉：人、サル、飛行機、シャッター、滑車、幕、

〈所〉：台の上、木、空、空港、天井、エレベーター、車、飛行機、汽車、トラック、馬車、ベッド、運転席。

- 用例：1. 健二は台の上から地面に降りた。→（着点が含まれる）
2. サルが木から降りた。→○「を」
3. ツルが空から地上に降りた。→（着点が含まれる）
4. 滑車が天井から下りる。→起点のみを表し移動の経路がない→*「を」

この「上から下への移動する」というカテゴリーでは、「を」格と「から」格ともに使えるものは2の用例のみである。用例1、3の場合は、着点を表す「に」格があるため、「から」格のほうがふさわしくなる。また、用例4の場合は、起点のみ表し、途中の経路は含まれていない。これに対して、「サルが木からおりた」と「サルが木をおりた」という場合、「から」格は起点としての「木」、すなわち、「木」の上部を表しているが、「サルが木をおりた」という場合の「を」格には、垂直に立つ「木」の上部から「木」の幹をつたわって、下に移動する経路を表しているようなニュアンスがある。つまり、「を」格が何らかの移動の経路を含んでいない場合には使用することができないのではないだろうか。

構文フレーム：② [人・生き物・乗り物] {が/は} [所] を降りる

共起例：

〈所〉：タラップ、はしご、階段、坂道、

用例：1. 首相はタラップを降りた。

2. 子供がはしごを降りる。

3. 猫が階段を降りてくる。

4. 車が坂道を下りる。

○「から」(限定、選択、強調、指定)

構文フレーム1②では、用例2「子供がはしごを／からおりる」と用例3「猫が階段を／からおりてくる」では「を」と「から」の両者ともに使えるが、そこにはニュアンスの違いがある。「子供がはしごからおりる」と「猫が階段からおりる」の場合には、上から飛び降りた感じがし、途中の移動経路はない。あるいは、「はしご」の上部から下の位置への単なる移動を言っており、その経路については述べていない。

それに対して、「子供がはしごをおりる」の場合には、はしごを一段一段、順に段を踏んで下まで移動するイメージがある。つまり、経路としても、「はしご」のイメージがある。「子供がはしごを／からおりる」の違いを図30で示す。

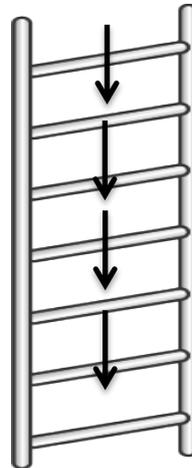
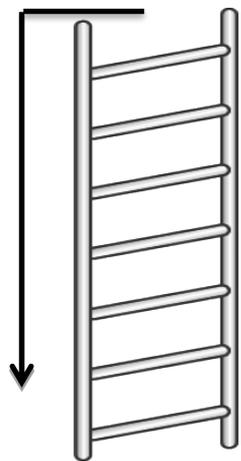


図30 「はしごからおり

「はしごをおり

また、「から」格には、限定、選択、強調、指定のイメージが強い、例えば、通常「階段をおりる」が使われ、「階段からおりる」は使われないが、「正面の階段は工事中で使えないので、裏の非常階段からおりてください」といった場合には使用可能である。これは、移動の経路を表しているものではなく、どの階段かという限定、選択、強調、指定の意味を表しているからだと考えられる。図31で示す。

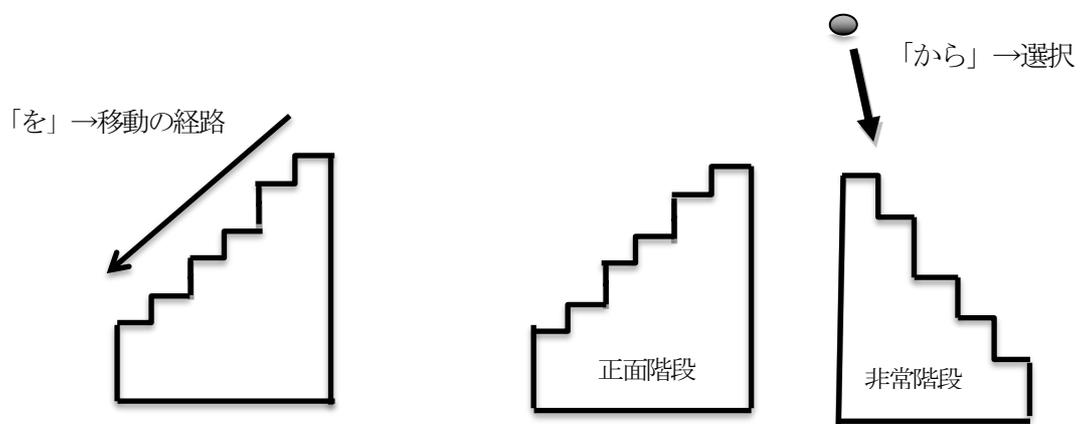


図31 「階段をおりる」

「非常階段から降りる」

用例4「車が坂道をおりる」の場合には、「を」のほうが適切である。「を」は図32のような移動するイメージであり、「から」は上から飛び降りた感じがし、途中の移動はないため、「坂道から下りる」は不自然だと思われる。

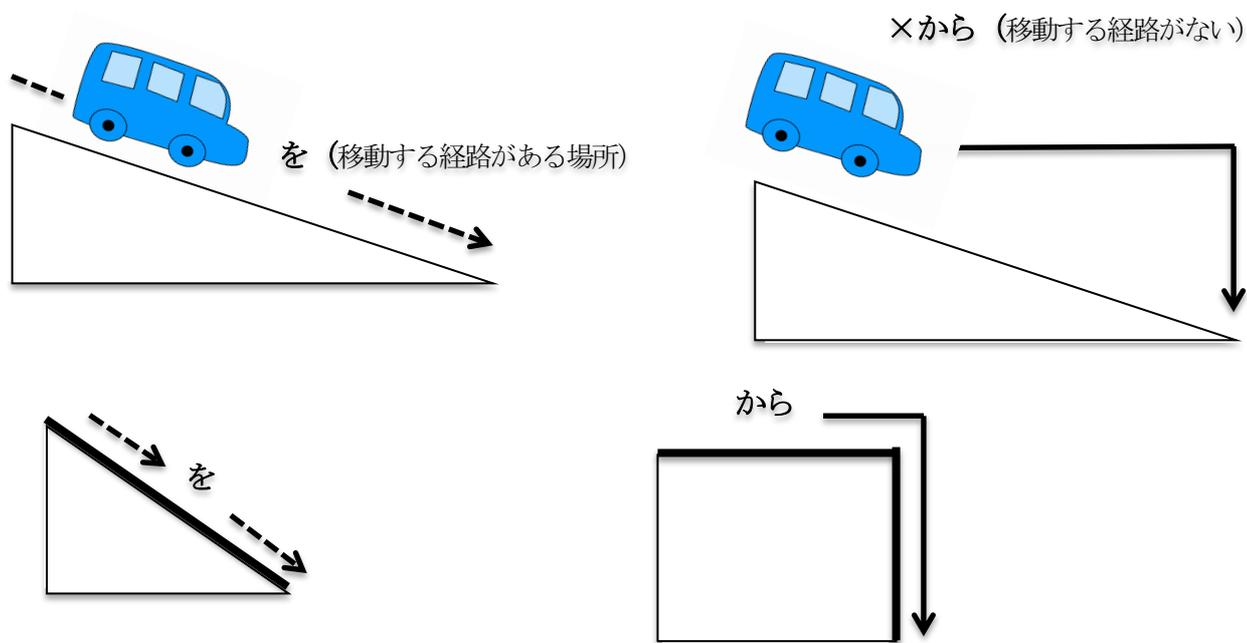


図32 「車が坂道をおりる」

× 「車が坂道からおりる」

2. 【乗り物の中から外に出る】

構文フレーム：[人・生き物] {が/は} [乗り物] {を/から} 降りる

共起例：

〈乗り物〉：列車、タクシー、車、バス、車、船

用例：1. 恵子は青森で列車を降りた。→○「から」

2. タクシー [車/バス] から降りる。→○「を」

3. 犬が車から降りる。→×「を」(人間である場合には「を」格が使用可能) 継続はない、
目的もない

4. 乗客が船から降りた。→○「を」

用例1「恵子は青森で列車を降りた」の場合は、列車をおりてからどこかへ向かったというイメージがある。用例2「タクシー [車/バス] から降りる」は、単に、下車した。あるいは、タクシー [車/バス] の中から外へ移動したというイメージである。例えた、「タクシー [車/バス] から人がおりてきた」という場合であるが、それは、タクシー [車/バス] の中から外に移動したという情景が目浮かぶ。これに対して、「タクシー [車/バス] をおりた」はそこを出発点として、どこかへ向かって移動して行くイメージがある。用例3の「犬が車から降りる」は、犬が一人でどこかへ出掛けるというイメージはないので、「から」となる。つまり、車から外への移動である。用例4の「乗客が船から降りた」は、単に、下船したという移動のイメージのみであるが、「乗客は船をおりた」というと、乗客は船を下船して、どこかに向かったというイメージがある。これらのことから、「～から おりる」は単なる上の位置から下の位置への移動動作を表しているが、「～を おりる」はそこからおりて、どこかへ向かうというイメージがある。

3. 【ある役職から退く】

構文フレーム：[人] {が/は} [地位・役割] を降りる

共起例：

[地位・役割]：委員長、議長、主役、

用例：1. 田中さんは委員長を降りた。

2. 議長 [主役] を降りる。

○「から」：高い地位から下に移動する。
「を」：辞職の意味に変化。その役を辞める、辞職、定年退職、他の役をしない。移動ではなく、辞めること。地位の高さは関係ない。①やめる、終える②去ってどこかへ行く。～を卒

用例1「田中さんは委員長を降りた」と用例2「議長 [主役] を降りる」の意味は「を」格動詞「辞職する」。定年退職するという意味に近く、「から」も使える。この場合には高い地位から下に移動するというイメージがある。

4. 【地位の上の者から下の者へ物や許可などが与えられる】

構文フレーム：① [物・事] {が/は} [人・組織] から ([人・組織・事] に下りる

共起例：

[人・組織] : 国、役所

用例 : 1. 開発計画に国から助成金が下りる。

2. 建築事務所に役所から工事の許可が下りた。

3. 祖父に年金が下りる。

} ×「を」

この場合、具体的動作ではなく、抽象的な移動を表している。そのため、移動、通過という具体的な動作を表していないので、「を」格ではなく、「から」のほうがふさわしい。逆に言えば、「を」格は、何かに向かって、進んでいくというイメージがあり、そのため、そのようなイメージがない場合は、使われないのではないだろうか。

5. 【霜・露などが生じる】

構文フレーム : ① [自然現象] {が/は} [所] に降りる

共起例 :

[自然現象] : 初霜、夜露、夕闇

用例 : 1. 関東地方に初霜が降りた。

2. 草の葉に夜露が降りる。

3. 街に夕闇が降りる。

また、『日本語表現活用辞典』(2004) では、次の用例を挙げ、「を」格と「から」格の使用の可能性については述べているが、置き換えた場合の違いについては説明していないため、筆者の考えを述べることにする。

① (階段、タラップ、はしご、坂道、石段、スロープ、崖) を下りる

『日本語表現活用辞典』が述べている「階段、タラップ、はしご、坂道、石段、スロープ、崖」のうち、「坂道」と「スロープ」のみは「から」格に置き換えられることができない。この理由を考えると、段がある場合には「を」格も「から」格も使用可能であるが、「坂道」と「スロープ」のように、段がない場合には、「から」格は使用不能である。これは、「を」格には連続した経路、移動の場所のイメージがあるが、「から」格には連続した移動の経路のイメージがない。したがって、「坂道」と「スロープ」の場合には、「から」格を使うと、起点のイメージとなってしまう

い、そこを起点として、飛び降りるような感じがしてしまい、「から」格では不自然になってしま
うと考えられる。

③ (電車、列車、車、バス、船、エレベーター、馬、山、高速道路) を/から降りる

「を」格は乗換、下車の場合には「新宿駅で電車を/*から降りた」どこかへ移動していく意味で、
「から」格は動作の起点を表し、ホームへ移動するといったイメージがある。例えば、「電車から人が
おりてきた」というような場合は、ホームでの情景描写のように感じられる。これに対して、「新宿駅
で電車をおりた」という、新宿駅で電車をおりて、どこかへ向かったという移動の出発点といった
感じがする。

「馬を降りる」も、おりた後どこかへ向かったというイメージがあり、「馬から降りる」は馬の背
中から地面に移動する動作を表しているように思われる。一方、「山をおりる」は山頂から山道を移
動していくようなイメージがある。「山からおりる」は途中の山道を移動していく経路のイメージは
なく、山頂から麓へ単に位置を移動したというイメージになる。「高速道路をおりる」は、「高速
道路」から普通の道に移って、どこかへ向かって進んでいくイメージがある。一方、「高速道路から
おりる」はどこかへ向かって移動していくイメージはなく、単に、「高速道路」から一般路に移ると
いう位置の変更といったイメージがある。

③ (台、壇上、舞台、マウンド、土俵、リング、2階、屋上、屋根、木、塔のてっぺん、山麓、山
頂、空) から下りる

これらの例のうち、「山麓からおりる」は、やや不自然に感じられる。また、「台、壇上、2階、屋
上、塔のてっぺん、山麓、山頂」は、「を」格を使うと、不自然になる。この理由としては、これら
は、起点を表し、移動の経路を含んでいないためだと考えられる。

④ (階下、地下、火口底、麓、地面、地上、庭) に下りる

⑤ (霜、露、シャッター、遮断機、滑車、科技、幕、旗、鳥、飛行機、ケーブルカー) が下りる

⑥ (許可、認可、命令、裁決、判決、助成金、年金、恩給) が下りる

⑦ (主役、政権の座、座長の任、プロジェクト、仕事、番組、ゲーム、勝負、試合) を降りる

④から⑥は「を」格も「から」格も使われない。⑦は「を」格も「から」格も使われる。ただ、そ
の違いを考えると、「から」格には「起点」の強調のイメージがあり、「を」格は、その位置から移
動して、どこかに向かっていくようなイメージ、あるいは、辞めてどこかへ去るような感じがすること

が多いようだ。この用例の中ではなかったが、ヤフーで「負けたまま終わるのではなくて、勝ってリングを降りる姿を見せるのが親父の仕事」という用例があったが、これは、選手を辞め、「リング」を去るといったイメージで書かれていた。もし、これが、「リングからおりる」だったら、単に「リング」の上から下に移動したというイメージが強いのではないだろうか。

3-4-3-5 「おりる」に関するまとめ

「を」格、「から」格との違いについて移動動詞「おりる」を通して分析を行ったが、両者の違いは、動詞の意味と格助詞そのものの機能とに関連していることが分かった。つまり、先行研究が主張する「を」格「から」格が下接する名詞が抽象的なものであるか、具体的なものであるかの問題ではなく、「を」格の持つ移動、通過の場所というイメージから、「を」格+「おりる」の「を」格は単なる出発点ではなく、上から下への移動・通過の場所を表すと考えられる。一方、「から」格は単なる離脱点、起点を表わすため、「から」格+「降りる」は上から下への移動の単なる離脱点、起点を表していることが分かった。

以上のことをまとめると以下のようなになる。

【「を」格と「から」格の両者が使える場合】

「を」 ①移動、通過のイメージが強い。「山をおりる」

②移動する経路がある場合。

「階段をおりている途中で、足を滑らせた」

「から」①限定、選択、強調、指定。

「正面階段は人目につくので、裏の非常階段からおりてください」

②「に」格で表される着点がある場合には「から」格が使われる。「空から地上におりる」

【「を」が使えない場合】

① 移動する経路がない場合「*2階をおりる」→「2階からおりる」

【「から」が使えない場合】

① 移動する経路がある場合。「*坂道からゆっくりおりた」→「坂道をゆっくりおりた」

344 「を」格と「から」格のまとめ

以上「出る」、「落ちる」、「おきる」と「を」格と「から」格をめぐって、分析を行ってきたが、この分析の結果として、「を」格と「から」格の違いについて、次のようにまとめることができよう。

【「を」格】

- ①移動、通過、またどこかへ向かうイメージ。
- ②移動する経路がある場合。
- ③移動の継続、長時間、あるいは、長期間にわたって離れることが多い。
- ④「～を出て、～に」の場合には、着点があっても「を」格が使用可能である。
- ⑦地位が低くなる場合、最も高い地位から滑り落ちていくイメージがなければならない。
- ⑧落伍する、落第する、不合格になる場合。
- ⑨負けて都から田舎へ逃げる。
- ⑬境界、範囲、程度を超えてさらに継続、発展、展開していくという場合。

これら「を」格に共通するイメージをまとめると、「どこかを出て、どこかへ向かって進んで行く」というイメージである。

【「から」格】

- ①起点そのもの、あるいは起点の選択、指示のイメージがある。
- ②時間的には、一時的に出ることが多い。(出立後の継続の意味が薄いためか)
- ③「～から～まで」と「～から～に」の場合は「から」格しか使えない。
- ④「方向を表す名詞(東、西、上、下、中など)」の起点。
- ⑤「物などを与えてくれる相手、授与の起点」、「事柄の由来・出所」の場合
- ⑥内部にあったもの・隠れていた物が外部に現れる場合
- ⑦上から下へ垂直に、飛ぶような場所の基点。(経路を含まない)
- ⑧地位が低くなる場合。地位の高さに関係ない。(経路を含まない)
- ⑨着点「に」格がある場合。「～から～に」
- ⑩どの部位から先に落ちたかという場合。
- ⑪物がとれる、なくなる、抜ける場合。

- ⑫限定、選択、強調、指定。
- ⑬「に」格で表される着点がある場合には「から」格が使われる。
- ⑭移動する経路がない場合

これら「から」格に共通するイメージには、どこから向かって進んでいくというイメージはなく、したがって、「経路や継続性のない起点、あるいは、単なる離脱、出現の場所、また、それら起点の限定、選択、強調、指定」などのイメージがあることがわかった。

以下の図 33 と図 34 で示す。

【「を」格のイメージ図式】



図 33 「『を』格のイメージ図式」

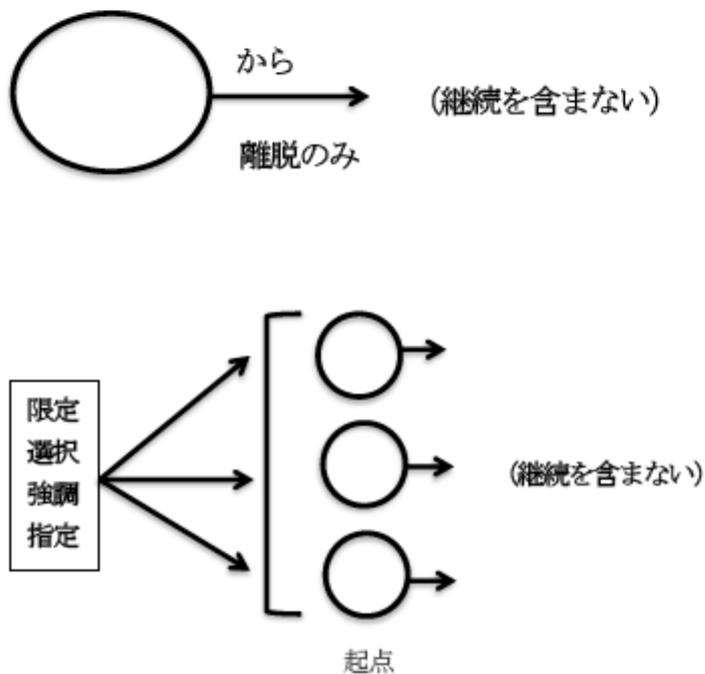


図 34 「『から』格のイメージ図式」

4. 結論

本論文の第1章においては、1-1「研究動機」、1-2「研究方法」、1-3「本研究の構成」について述べた。

第2章においては、「格助詞「を」の先行研究」を行った。2-1、「格助詞についての諸説と定義」では格助詞とは何かについて、大槻文彦の『広日本文典』(1897) 山田孝雄は『日本口語法講義』(1922) 橋本進吉『国語法要説』(1934) 時枝誠記『日本語文法口語篇』(1950) 『大辞林』(1995) 『国語大辞典第二版』(1995) 『大辞泉』(1998) 『日本語学辞典』(1998) を用い、格助詞とは何かについて、分析を行った結果、格助詞とは、名詞につき、その名詞が文中の述部に対してどのような関係を持っているのか、すなわち格を表すものであるという結論を得た。また、格助詞に何が含まれるかということは、各研究においてやや異なっていたが、「を」格はすべての研究において、格助詞に含まれていることがわかった。

2-2「辞書、参考書等における格助詞「を」の用法分類」では、『明鏡 国語辞典 第一版』、『新明解国語辞典第六版』、『岩波国語辞典第7版』、『大辞林』、『学研国語大辞典第二版』、『角川 国語大辞典』、『日本語大辞典 第二版』、『学研現代新国語辞典 改訂第四版』などの代表的な辞書を取り上げ、分類を行った。また、参考書などにおける「を」格の用法について、一般的には、ごく簡単に触れているものが多い中で、詳しく述べている『基礎日本語2 (1980)』、『動詞の意味的文法研究 (1940)』、『文法の基礎知識とその教え方 (1991)』を取り上げ、その用法について分類し、分析を行った。その結果、分類があまりにも多く、また、同じ用例に対して、異なる解釈を与えているなど問題点が多いことがわかった。そのため、新たに独自の分類を行い、適切な解釈を与える必要があると結論を付けた。

2-3では、個々の格助詞は独自の基本的なイメージ、すなわちコア・イメージのようなものを持ち、個々の動詞と結びつくことによって、格の用法が生み出された。

2-4の「森山新『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』から見た「を」格の用法においては、森山の『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』(2008)の日本語のヲ格用法と認知言語学から見た分析を取り上げた。森山は、「を」格の用法として、以下のものを挙げている。

- ① 対格：「子供を殴る」「家を建てる」「本を貸す」「母を恋しがる」
- ② 場所：
 - a. 起点：「駅を出る」「故郷を去る」「大学を卒業する」
 - b. 経路：「道を渡る」「駅を通過する」「空を飛ぶ」

- ③ 状況：「太郎が雨の中を行く」「豪雨の中を敵と戦った」
 ④ 時：「思春期を経て大人になる」「4年間を仙台で過ごした」

そして、森山はヲ格のプロトタイプを「対格」であるとし、「場所」、「状況」、「時」の用法はそれらの拡張としている。「対格」は「被動作主（PAT）などプロファイルされた動力連鎖或非対象的關係における末尾（tail）の参与者を表す」とし、「被動作主など、視点領域の受動的参与者」として、また、際立ちの面から「第二の際立ちが与えられた参与者（1m）」を表すとしている。この「対格」の用法から「場所」、「状況」、「時」が拡張されるという。そして、この「対格」と「場所」、「状況」、「時」とに共通するスキーマは「ガ格参与者を起点とする動力連鎖の終点に置かれ、その支配を受けている」とし、「受動的参与者」がメタファーにより、「場所」となり、さらにスキーマのプロファイルから「起点」、「経路」が生じると説明している。しかし、言語教育という観点から見ると、その用語も説明も極めて難解であり、「を」格は初級授業においてどのように指導すべきか困惑してしまう。やはり、イメージ化などによって、日本語の語彙力のない学習者にとっても理解可能な直観的な方法を考えるべきであろう。このことを踏まえ、「を」の基本用法に入っていく。

第3章「格助詞「を」の基本用法」においては、国立国語研究所の調査『現代雑誌九十種の用語用字第一冊総記・語彙』（1962）から全動詞を抽出し、さらに、『日本語基本動詞用法辞典』（1989）に出ている動詞を加え、1168語からなる動詞の一覧表を作った。その動詞一覧表を基に、先行研究を参考しながら、いろいろな格助詞と結びながら、分析を行った。そして、その中から特徴的なものを取り上げ、格助詞「を」に関し、「対象」、「目的」、「場所」という3つの大きな基本用法を抽出した。その基本用法について述べていった。

まず、3-2では、「対象」、「目的」、「場所」のうち、対象を最も基本的な用法であるとし、以下の図を提示した。



そして、用例の分析から、まず「対象」を分け、それを「直接的な対象」と「一方方向・多方向（全方向）」と「移動対象・再帰的移動対象」と「認知（知覚・思考）感情の対象」に分け、この「認

知（知覚・思考）感情の対象」を「認知（知覚）の対象」と「認知（思考）の対象」と「感情の対象」に分けた。図式化すると図 36 のようになる。

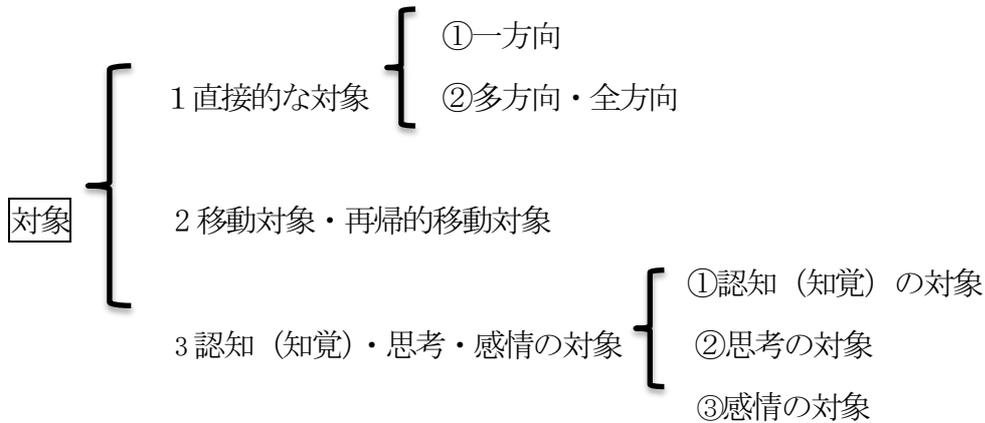
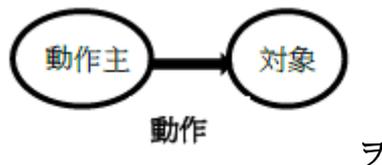


図 36 対象のまとめ

3-2-1 の「直接的な対象」では、「ベビーカーを押す」、「おもちゃを壊す」、「ドアをたたく」、「野菜を切る」、「ご飯を食べる」などの用例を挙げ、「動作主がある対象物に対して直接何らかの作用を加えるもの」として以下の図を示した。



3-2-2 の「一方向・多方向（全方向）」では、まず「犯人をみんなで囲む」という用例を挙げた。この用例は、一方向から対象物へ向かうという解釈では、説明がつかない。この例を分析すると、多くの動作主が犯人に向かうという状況が考えられる。これは、一方向ではなく、多方向から、あるいは、全方向から犯人に向かっていくと言う行為とその向っていくところのもの（犯人）を「を」格で表すと分析した。そして、そのイメージ図式を以下のように示した。

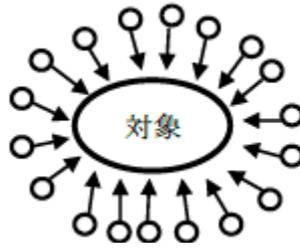


図 37 多方向

次に、「畑を柵で囲む」という用例を出した。これは、犯人に向かって進んでいくわけではないが、その柵の内側にある畑に向かって柵を立てていくということで、上記の犯人を囲むという用例を拡張であると考えた。したがって、「を」格は畑を表すことになる。

次に、「品物を包装紙で包む」という用例を挙げた。これは、ある品物全体を一枚の紙で包むということであるが、これも、「犯人をみんなで囲む」という用例の拡張として考えられる。「犯人をみんなで囲む」という場合には、多数の人たちが、犯人に全方向から向かうということであるが、「品物を包装紙で包む」というのは、その多くの人々が一つとなって、すなわち、一枚の包装紙となって、「品物（対象物）へ全方向から向かうということである。その結果を次の図 38 のように示した。

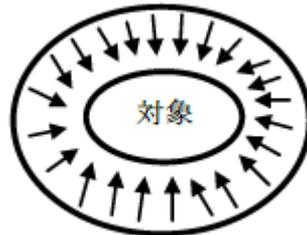


図 38 全方向

この類例として、「おにぎりを握る」と「海苔でご飯を巻く」という用例を出した。「おにぎりを握る」は、「おにぎりを手で握る」となり、上記の「品物を包装紙で包む」の包装紙がおにぎりに相当することがわかる。同様に、「海苔でご飯を巻く」も、海苔が包装紙に相当することがわかる。次に、「車をカバーで覆う」、「捕った獲物を木の葉で隠す」は、上記の例を全方向がその一部で多方向からそのものに向かっていくということを表している。そのイメージ図式として、以下の図 39 を示した。

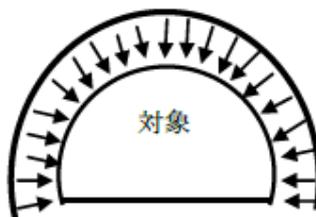


図39 多方向

そして、この「直接的な対象」のイメージ図式を以下のようにまとめた。

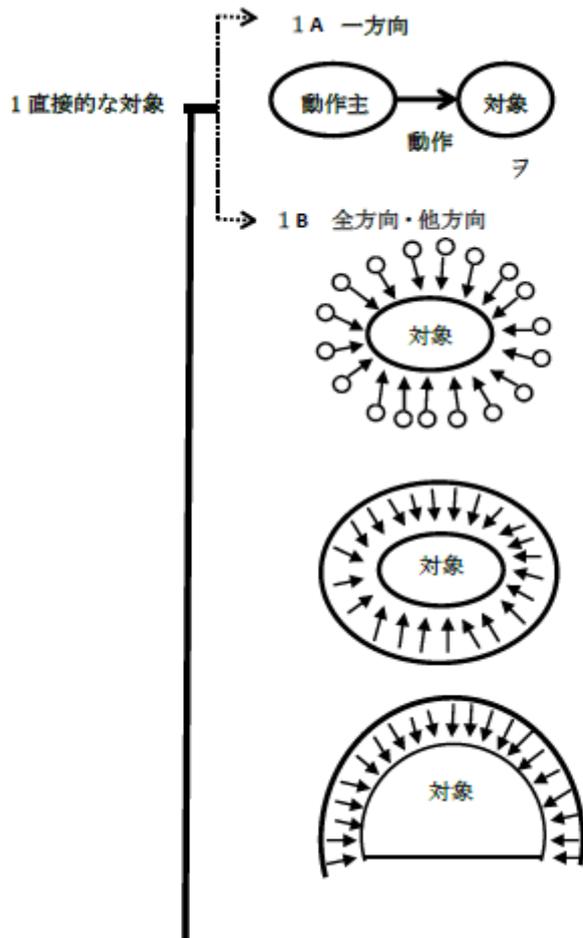


図40 「直接的な対象」のイメージ図式

3-2-3の「移動対象・再帰的移動対象」では、「花に水をかける」という用法の分析を行った。「花に水をかける」という用例で、「かける」対象は何かと問えば、たいていの人は「花」だと答える。これは、対象格には、「を」格ばかりでなく、「に」格や「が」格もあるということに関係しているだろう。それでは、この「花に水をかける」という文の中で、「を」格は、どのような役割を果たしているのかといえ、ば、「花に水をかける」時に、実際に作用を加えて、移動させるもの「移動物」を表しているということがわかる。このような何らかの事物の移動行為においては、その行為の中の移動させる対象物

を「を」格が表していることがわかった。これに類する動詞としては、「投げる」、「かける」、「置く」、「入れる」、「あげる」、「しまう」などが挙げられる。

次に、「シャワー（水）を浴びる」という用例について考えてみた。これも、「浴びる」対象は「シャワー（水）」だとしたら、なかなか理解しにくい。この「浴びる」も、「かける」に類した構造を持っていると考えられる。「かける」場合は、「を」格はその移動物（水）を表していた。この「浴びる」の場合も移動物（水）を表していると考えられる。それでは、着点はどこにあるのか、このことを考えてみると、実は、着点は自分の体であることが分かる。着点が他者であれば、「私は子どもに水を浴びた」となるはずである。しかし、この文は非文となる。「浴びる」という動作の対象（着点）を自分自身でなければならない。しかし、「私は自分にシャワーを浴びた」も非文となる。つまり、自分自身を対象として含意している動詞は着点を表示できないと言えるのであろう。このような動詞を「再帰的移動動詞」と名付けた。ただ、この動詞の場合も、「を」格は移動物を表していることには違いない。これに類する言葉として、「着る」、「履く」、「かぶる」などが挙げられる。この移動対象と再帰的移動をイメージ図式で示すと、以下の図41のようになる。

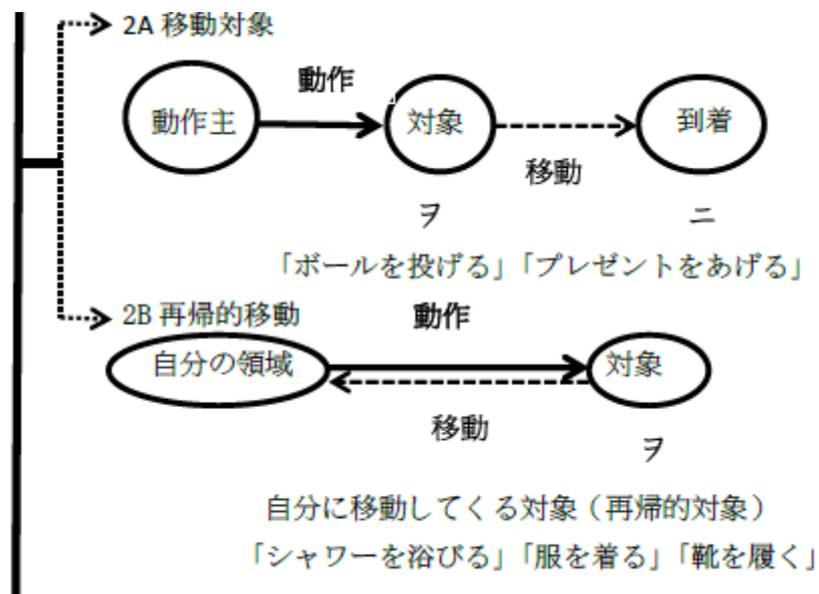


図41 移動対象・再帰的移動

3-2-4の「認知（知覚）・思考・感情の対象」においては、人間の内的な精神的、あるいは、心的作用の対象について、「認知（知覚）」、「思考」「感情」の三種に分け、まず、「認知（知覚）の対象」から分析を行った。

この「認知（知覚）の対象」は、いわゆる五感と言われるもの、すなわち、視覚、聴覚、嗅覚、味

覚、感覚の五つが挙げられる。このうち、嗅覚、味覚、感覚は認知的働きが弱い。それに対して、視覚、聴覚はとも認知的なものといっていだろう。これら五感のうち、視覚に関しては、「～を見る」、「～が見える」という二つの異なった表現がある。「～を見る」と「～が見える」の違いは、前者が視覚を通して、対象物を認識しようとするものである。すなわち、視覚を通して、その対象物に意識を集中して捉えることである。これに対して、「～が見える」は、対象物が視覚を通して、感じられることである。また、「～を聞く」、「～が聞こえる」の場合は、「～を聞く」が聴覚を通して、その対象物、すなわち音を認識しようとするものである。つまり、聴覚を通して、その音に意識を集中して捉えようとするものである。これに対して、「～が聞こえる」は、対象物すなわち音が聴覚を通して、感じられることである。この「見る」、「聞く」という知覚行為の対象は「を」格で表され、「見える」、「聞こえる」の場合は、「が」格で表される。この関係を以下の図42で示した。

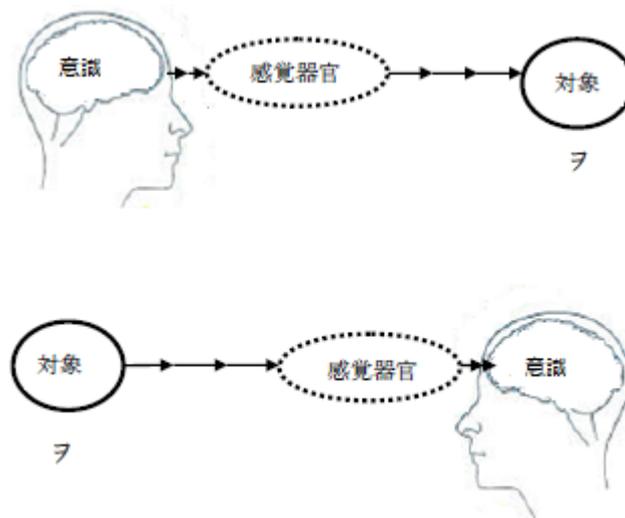


図42 認知 (知覚) の対象

3-2-4-2では「思考の対象」について分析した。この思考作用としては、「考える」、「思う」、「知る」、「比べる」、「数える」などが挙げられる。この「考える」あるいは、「思う」、「知る」、「比べる」、「数える」という思考作用の内容は異なるが、その思考作用の向かうところのものを「を」格で示しているという点では共通している。この関係を以下の図43で示した。

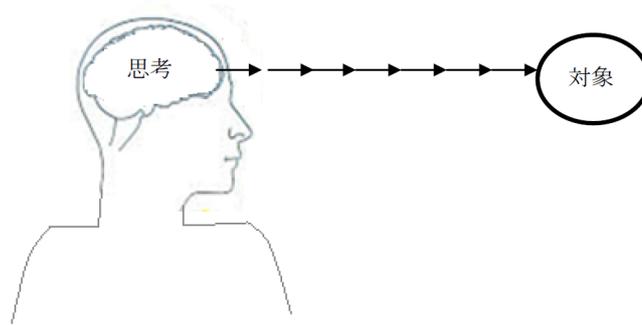


図43 「思考の対象」

3-2-4-3の「感情の対象」では、感情の対象について分析した。この感情の対象を「を」格、「に」格、「が」格の三種類があることがわかった。「悲しむ」、「憎む」、「嫌う」、「喜ぶ」などの感情の対象は、いずれも「を」格を取る。しかし、「注目する」、「注意する」、「気をつける」など、また、「驚く」、「おびえる」、「うっとりする」、「がっかりする」などの対象は「に」格で表される。さらに、「好き」、「嫌い」、「憎い」、「嬉しい」などのような感情の対象は「が」格を取る。

このうち、「悲しむ」、「憎む」、「嫌う」、「喜ぶ」などのうち、「悲しむ」、「喜ぶ」に関しては、「を」格と「に」格が存在する。しかし、「憎む」、「嫌う」に関しては、その対象格は「を」格のみで、「に」格は存在しない。この「を」格と「に」格の二つの対象格を持つ「悲しむ」と「喜ぶ」について、分析を行った。その結果、「を」格は来る場合には、「そして紙吹雪が舞う。相手チームの不幸を喜ぶのがルールのようなものである」のように、単なる内的な感情を表すのではなく、それを祝賀する、祝うといった感情を表す行為の対象を示しているようなニュアンスがあることがわかった。これに対して、「に」格が来る場合には、感情の向かう対象というよりもそれによってその感情が引き起こされ、その対象と感情とが区分しがたいようなニュアンスがある。また、「を」格しか取らない「憎む」、「嫌う」はその対象となるものが存在しないときには、使えないという特徴があり、明らかに対象に向かう激しい感情を表していることがわかる。

この感情の「を」格をイメージ図式化したものが図である。

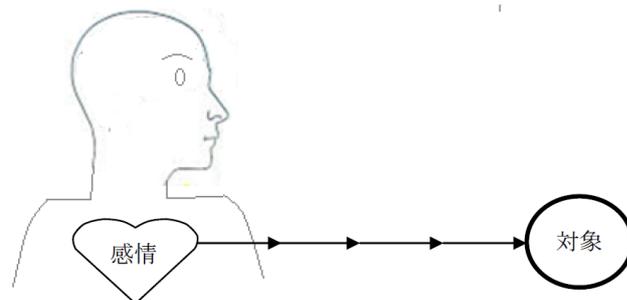
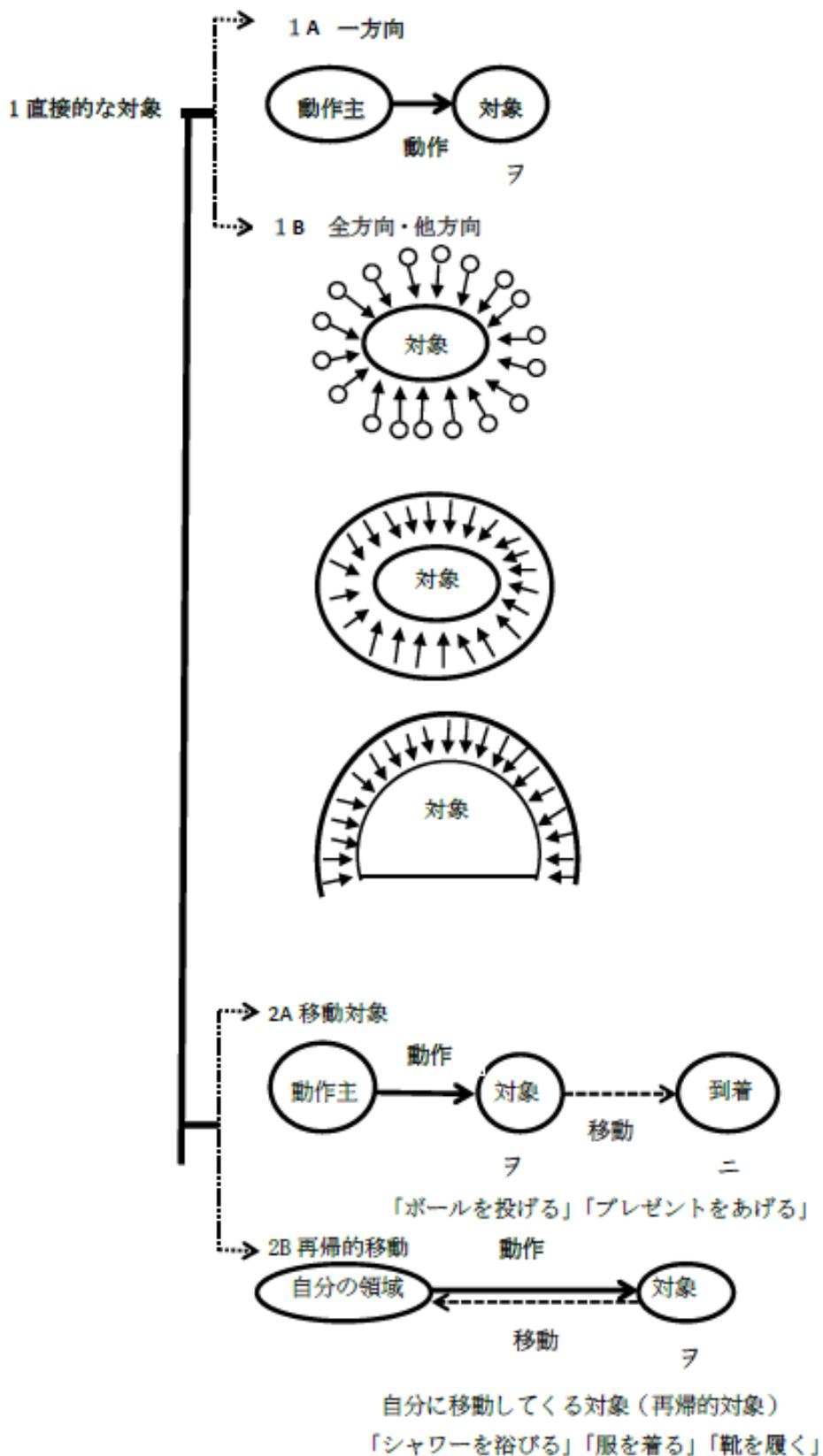


図44 「感情の対象」

3-2-4-4の「まとめ」では、3-2の「対象」の全体的な関連を示した以下のような図式を提示した。



→ 3 認知知覚思考（動作）感情対象
 認知知覚対象

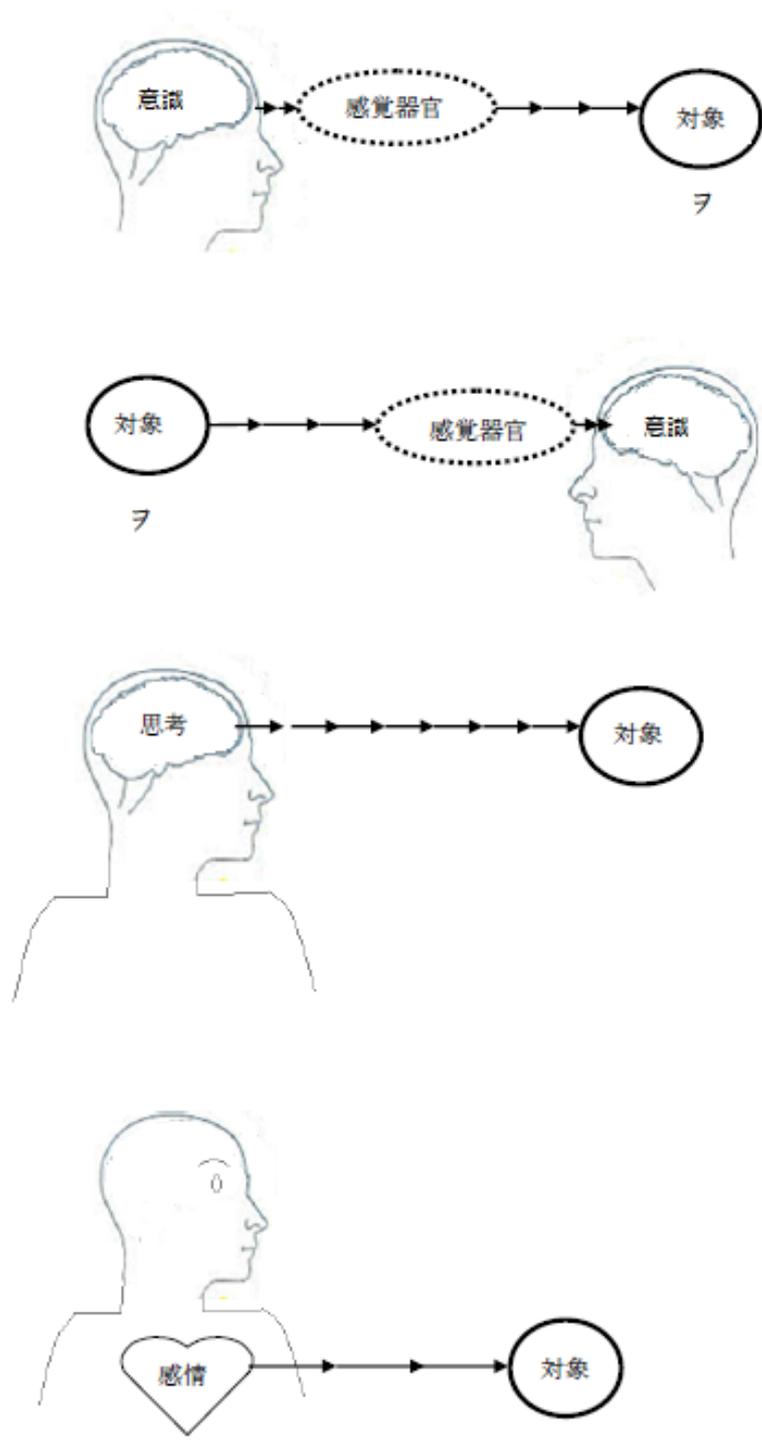


図45 「対象」のまとめ

3-3 の「実現目的・目標」では、3-2 の「対象」に続き、「目的」の用法について、分析を行った。この「目的」という用法は、ほとんどの先行研究、あるいは、辞書、参考書などには取り上げられておらず、僅かに森田『動詞の意味的文法研究』と『大辞林』、『日本語大辞典 第二版』の三種のみである。この「目的」という区分を立てる必要は「対象」があるものに対して、直接的に作用するものであるのに対して、例えば、「ハンバーグを作る」、「家を建てる」などは「ハンバーグ」、「家」というものが目の前に存在して、それに対して、作用を加えるというものではない。これらは、様々な動作・行為などを行った結果、最終的に完成するものである。したがって、本論文では、「目的」ではなく、「実現目的」と名付けた。3-3-1 の「実現目的・完成物・所有権」では、この「実現目的」の用法にさらに分析を行い、「実現目的」の下位分類として、「完成物」、「所有権」の2分類を立てた。完成物に関しては、「を」格は、今述べたように様々な動作・行為などを行った結果、最終的に完成するものを表している。しかし、「得る」、「盗る」、「買う」、「もらう」などは完成物の実現とは言えない。これらの動詞に結びつく「を」格は、完成物の実現ではなく、「所有権」の実現であると考えられる。したがって、実現目的の下に、「完成物」と「所有権」の実現という分類を立てた。さらに、この、「所有権」の実現の特殊な例として、「席を替わる」、「主役を替わる」、「見張りを替わる」、「電話を替わる」などが挙げられる。「席を替わる」が、一つの「席」をめぐる、「座る」人間が交替する場合には、その「席」の新しい「所有権」が実現されるものと考えられる。同様に、「見張りを替わる」も「見張り」という役割を入れ替わることによって、新しい「所有権（管理権）」を実現するものと考えられる。さらに、「主役を替わる」、「電話を替わる」も同様である。

以上のことを示すと、以下の図46と図47のようになる。

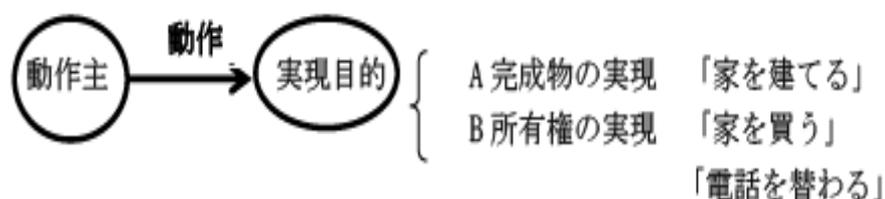


図46 一般的な「所有権」の実現

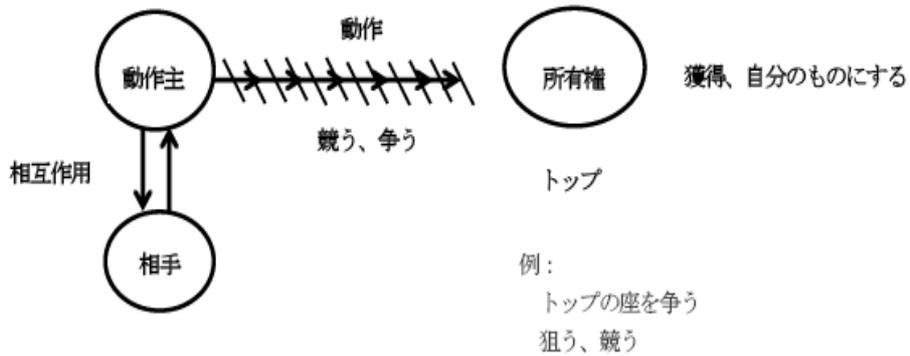


図 47 特殊な「所有権」の実現

次に、3-3-2の「目標・方向・到達」という用法について論じた。この用法に属する用例としては、「東を指す」、「時計の針が三時を指す」、「医者を目指す」、「母親の後を追いかける」、「トップを争う」、「優勝を狙う」などである。例えば、「東を指す」という用例は、今まで述べてきた対象物に直接作用を加えるとか、また、完成、実現などにも関係がない。この用例を分析すると、ある目標に向かつてある指などの尖ったものの先を移動させるという動作・行為を行うものである。その指などの尖ったものの先にあるものを示していると言えるだろう。「医者を目指す」という用例の「を」格も同様である。すなわち、様々な努力をし、進んでいく先にある「医者」という地位を示している。これは、あくまでも進んでいく先にあるものを示しているだけで、それに到達する必要はない。また、「母親の後を追いかける」も必ずしも母親に到達する必要はなく、その後ろにできるだけ近づこうと進んでいく、その先にあるものを示している。「優勝を狙う」も同様である。

以上のことをまとめると、この目標には、「東を指す」のような「方向」を示すものと、「到達目標」を示すものがある。いずれも、それに向かって進んでいく先にあるものを「を」格は示している。

以上のことを示すと、以下の図 48 のようになる。



図 48 「目標」

3-4 の「出発・移動・通過」では、格助詞「を」の3つ目の用法「場所」について論じた。この「場所」の用法は、自動詞「出る」「出発する」「出港する」「離陸する」「離れる」など出発の自動詞と組み合わせたり、出発点を表す。また、「走る」「歩く」「散歩する」「飛ぶ」「泳ぐ」など移動を含む自動詞と組み合わせたり、移動の場所を表す。また、「通る」「通過する」「こえる」「過ぎる」「抜ける」など、通過を表す自動詞と組み合わせたり、通過点を表す。これらの特徴はいずれも、何らかの移動性の自動詞と結びついていることがわかる。

この「を」格が表す移動の場所は、移動という行為が出発性、移動性、通過性のどれかによって、出発点、移動の場所、通過点の3つに分かれてくるが、出発性の移動動詞の場合には、「を」格によって、その出発点が焦点化され、移動性の動詞においては、その移動していく場所が、そして、通過性の移動動詞の場合には、その通過点が焦点化されるものと考えられる。

この関係については以下の図 49 で示される。

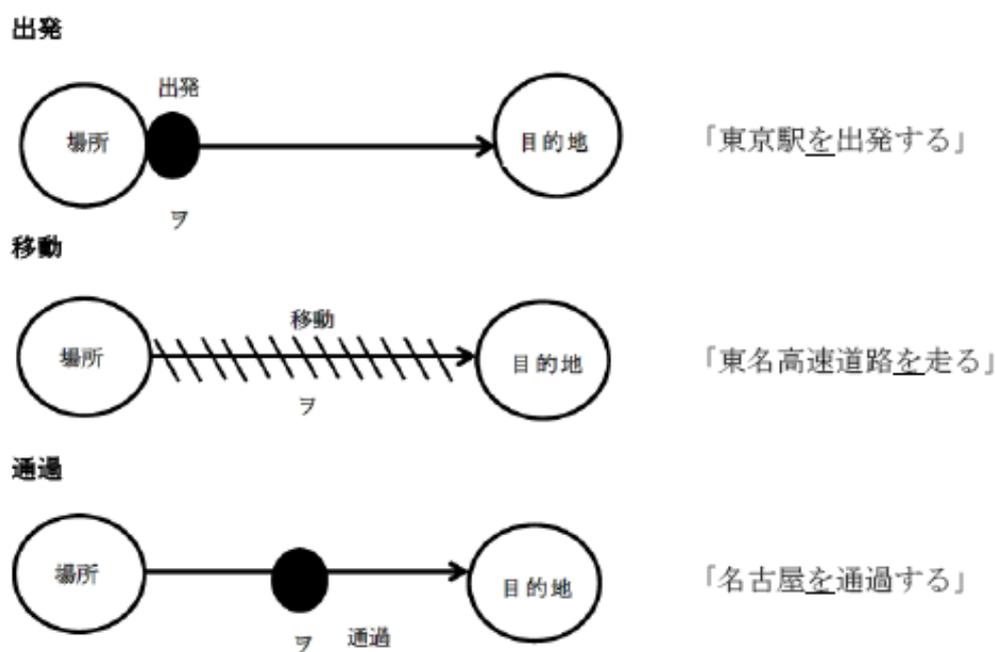


図 49 「出発・移動・通過」

3-4-1 から 3-4-3 では、「出発・移動・通過」という用法では、「を」格と「から」格とが置き換え可能であるため、これらの比較分析を通して、また、「を」格と「から」格の特性についてより深く分析した。

この分析にあたって、「を」格と「から」格の置き換え可能な動詞の中から、その出現率の高い順に「出る」、「落ちる」、「おりる」を選び、比較分析を行った。

その結果、先行研究とはやや異なっている結論を得た。先行研究では出発点の「を」格と「から」格の違いを抽象的なものと具体的なものの違いとしている。例えば、三宅（1995）では、「去年、太郎は大学 {を/*から} 出た」という例を引き、「から」格は具体的なものを表すとしている。しかし、分析の結果、両者の違いは、「を」格が示すものが抽象的か具体的かという問題ではなく、動詞の意味と格助詞そのものの基本イメージに関連していることがわかった。つまり、「から」格は単なる離脱点、起点というイメージを表わし、「を」格は何かに向かって進むというイメージを含むため、「を」格は、ある場所に向かって、移動する時の出発点、あるいは起点となるということが分かった。そのために、大学を卒業した場合には、「大学を出た」となる。

このことは、単なる出血とすれば「心臓から血が出る」となるが、循環と考えれば、「心臓を出た血が心臓に戻る」というように、出発点「を」→循環（移動）→着点「に」という流れが考えられる。

以上の分析から次ぎの結論を得た。

【「を」格と「から」格の両者が使える場合】

「から」格①起点そのもの、あるいは起点の選択、指示のイメージがある。

②時間的には、一時的に出ることが多い。（出立後の継続の意味が薄いためか）

③着点がある場合には、両者ともに使える。しかし、「～から～まで」と「～から～に」の場合は「から」格しか使えない。「～を～に」の場合は、「を」格は経路を表す。

「を」格 ①分離、離れ移動するイメージが強い。出立し、どこかへ移動し向かう、一定の形での生活を意味する場所を離れて、別のところで暮らすようになるなど。

② 時間的には、移動の継続の意味から、長時間、あるいは、かなりの長期間にわたって離れることが多い。

③着点がある場合には、「～を出て、～に」の場合は使用可能である。

【「を」格が使えない場合】

① 「方向を表す名詞（東、西、上、下、中など）+出る」の場合は、方向は起点ではなく、

② この場合の「出る」はどこかへ向かう移動の出発点ではなく、「出現」であるため、「を」格は使えない。

② 「出る」と「から」格の用法と同じく「物などを与えてくれる相手、授与の起点」、「事柄

の由来・出所」の場合も、離脱後の継続的移動のイメージがないため「を」格は使えないことがわかった。

- ③ 内部にあったもの・隠れていた物が外部に現れる場合には、「から」格しか使えない。「を」格は、循環や移動などを含んだ出発点のイメージしかない。

【「から」格が使えない場合】

- ① 時間的な継続的、移動のイメージを含む場合、「から」格は使えない。
- ② 境界、範囲、程度を超えてさらに継続、発展、展開していくという場合、「から」格は使えない。
- ③ 分離、離れ移動するイメージが強い。出立し、どこかへ移動し向かう、一定の形での生活を意味する場所を離れて、別のところで暮らすようになる場合、「を」格しか使えない。

次に、3-4-2の「出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「落ちる」について」では、「落ちる」という動詞を中心に分析を行った。

その結果をまとめると以下ようになる。

【両者が使える場合】

- 「から」① 上から下へ垂直に、飛ぶような場所の基点。(経路を含まない)
- ② 地位が低くなる場合。地位の高さは関係ない。(経路を含まない)
- 「を」① 上から下への移動が含まる。
- ② 上から下への移動の経路がある場合に限られる。
- ③ 地位が低くなる場合、最も高い地位から滑り落ちていくイメージがなければならない。

【「から」しか使えない場合】

- ① 着点「に」格がある場合。「～から～に」
- ② どの部位から先に落ちたかという場合。
- ③物がとれる、なくなる、抜ける場合。

【「を」しか使えない場合】

- ①落伍する、落第する、不合格になる場合。
- ②負けて都から田舎へ逃げる。

つぎに、3-4-3の「出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「おりる」について」では、「おりる」という動詞を中心に分析を行い、次の結論を得た。

【「を」格と「から」格の両者が使える場合】

「を」①移動、通過のイメージが強い。「山をおりる」

②移動する経路がある場合。

「階段をおりている途中で、足を滑らせた」

「から」①限定、選択、強調、指定。「正面階段は人目につくので、裏の非常階段から降りてください」

②「に」格で表される着点がある場合には「から」格が使われる。「空から地上におりる」

【「を」が使えない場合】

① 移動する経路がない場合「*2階をおりる」→「2階からおりる」

【「から」が使えない場合】

③ 移動する経路がある場合。「*坂道からゆっくりおりた」→「坂道をゆっくりおりた」

3-4-4の『「を」格と『「から」格のまとめ』では、3-4-1から3-4-3までの分析から得られた「を」格と「から」格のイメージをまとめた。

そして、「を」格に共通するイメージを総合し、まとめ、「どこかを出て、どこかへ向かって進んで行く」というイメージを引き出した。

また、「から」格に共通するイメージには、どこから向かって進んでいくというイメージはなく、したがって、「経路や継続性のない起点、あるいは、単なる離脱、出現の場所、また、それら起点の限定、選択、強調、指定」などのイメージがあることがわかった。

以下の図50と図51になる。

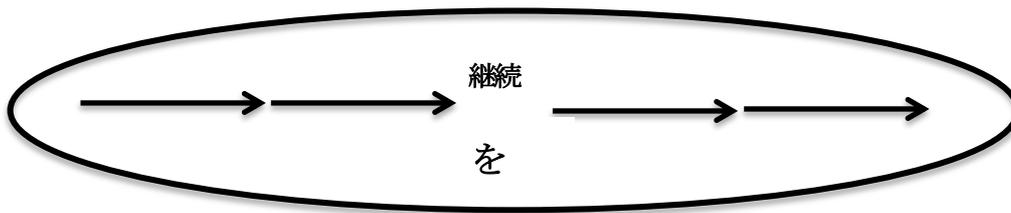


図50【「を」格のイメージ図式】

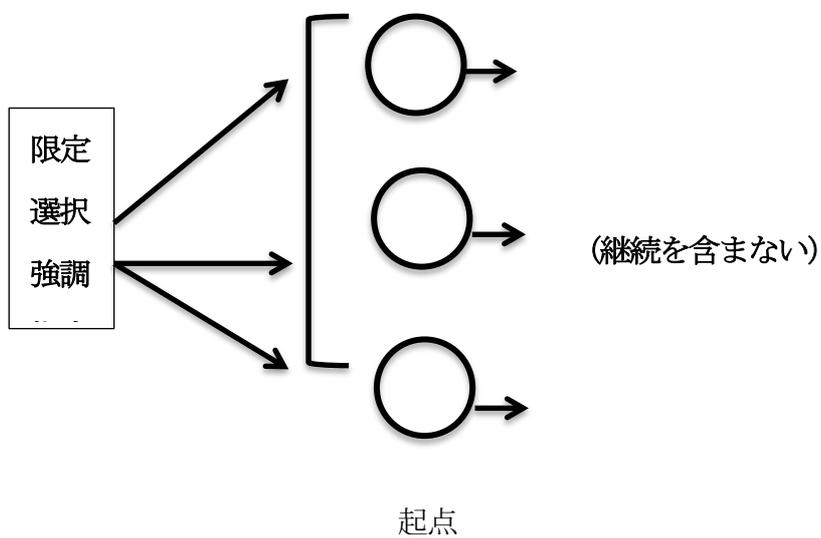
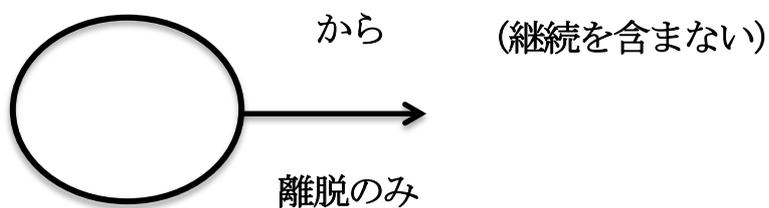
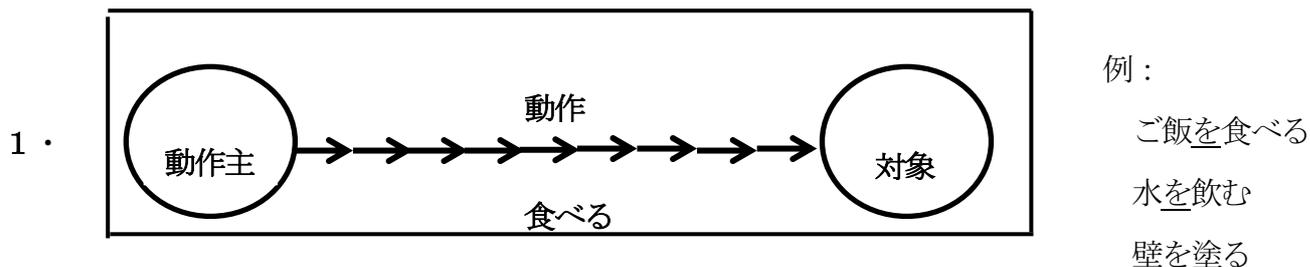


図51【「から」格のイメージ】

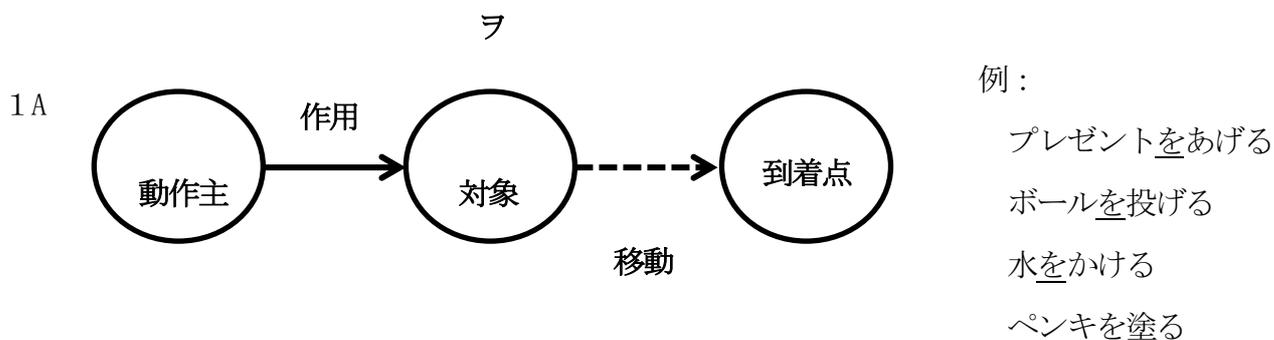
以上第2章から第3章までの分析とその結論について述べてきた。そして、「を」格の用法の分析から、以下のような様々な図式を得た。

まず、第一に分析したのは、「動作、作用の直接的な対象」に関するものであった。それは、「動作主がある対象物に対して直接何らかの作用を加えるときの動作、作用が向かって進んでいくところのもの」を「を」格が表しているというものであった。これを図示すると、図52の1のようになる。

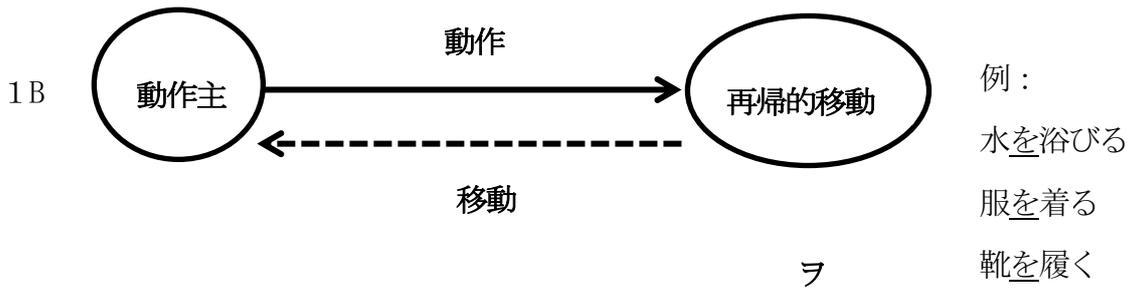
図52 「対象」



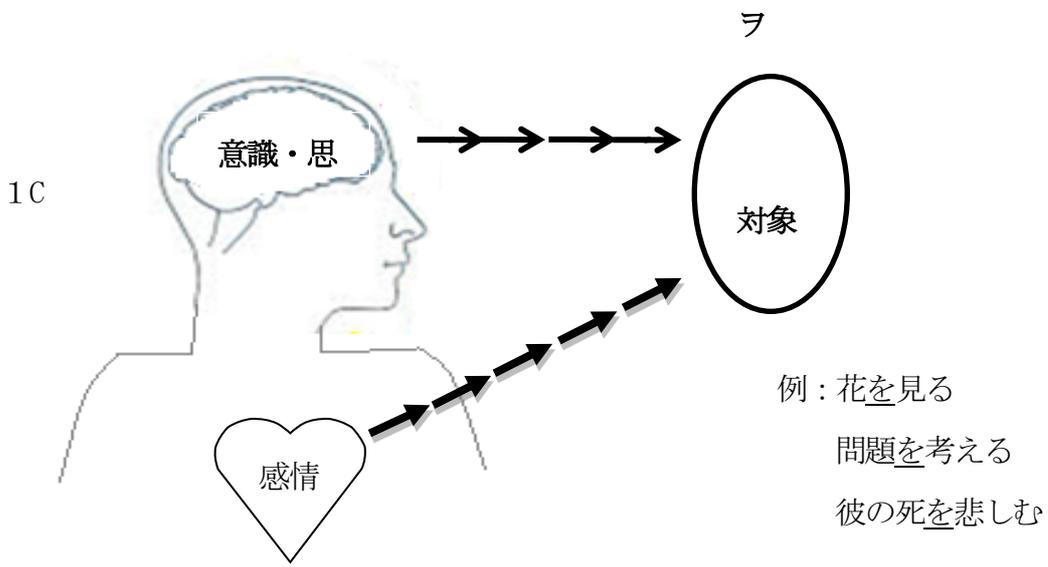
次に、「動作、作用の直接的な対象」の一種として、「移動対象」を挙げた。これは、「花に水をかける」などであるが、動作主が水に作用を加え、水を移動し、花の上に移すという関係であるが、「を」格は、その移動するための動作の進んでいく先にあるもの、すなわち、水を表している。これを図示すると、図52の1Aのようになる。



次に「水を浴びる」、「服を着る」、「靴を履く」、「帽子をかぶる」などであるが、これらは1Aの「移動対象」の一種であるが、その到着点が動作主そのものであるが、この場合、その到着点としての動作主は、示すことができない。これを「再帰的移動」と名付けた。そして、「を」格は、上記の「移動対象」と同様に、その移動するための動作、作用を向かうところの移動物を表している。



1Cでは、「認知（知覚）・思考・感情の対象」の対象について論じたが、この場合の「を」格は、認知（知覚）・思考・感情の向かって進んでいくところのものを表しているということがわかった。これを図示すると、以下のようなになる。



2は、「家を建てる」、「ハンバーグを作る」のように、いろいろな行為を行い、最終的にそのものを完成させる。「実現目的」を表している。これは、あることの実現に向かって進んでいくその先にあるものを指している。図示すると、以下の図53のようなになる。

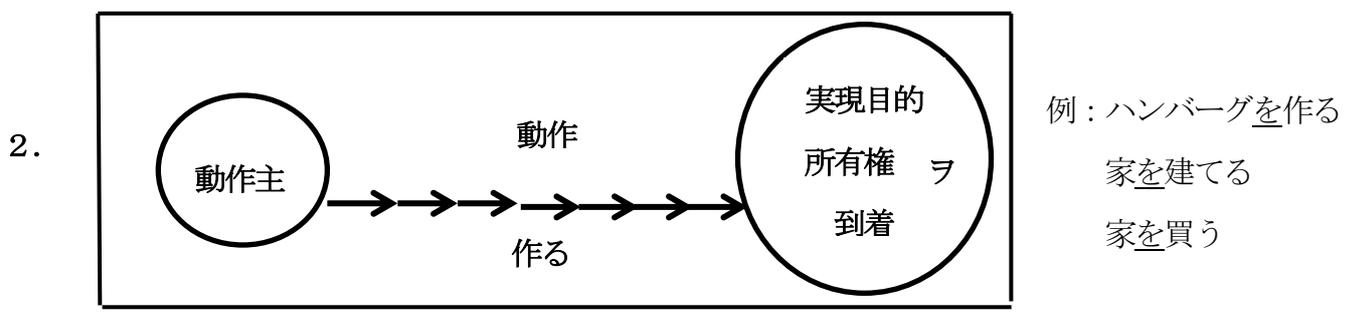
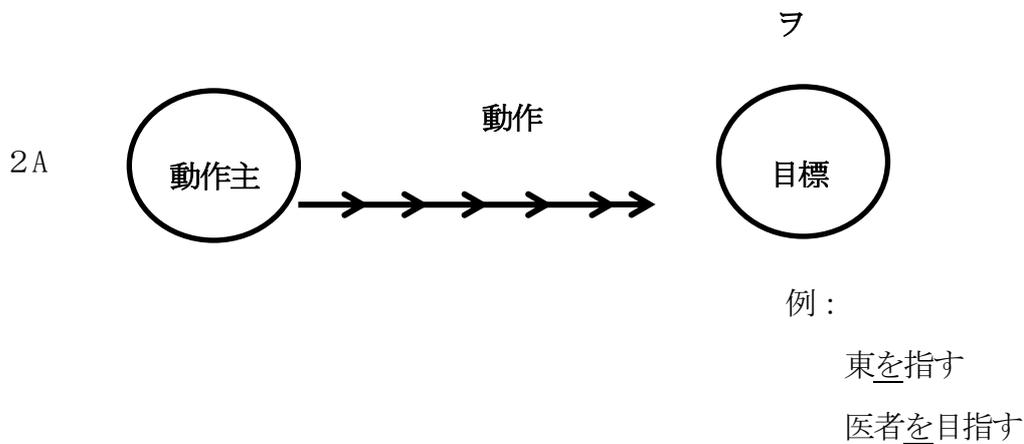


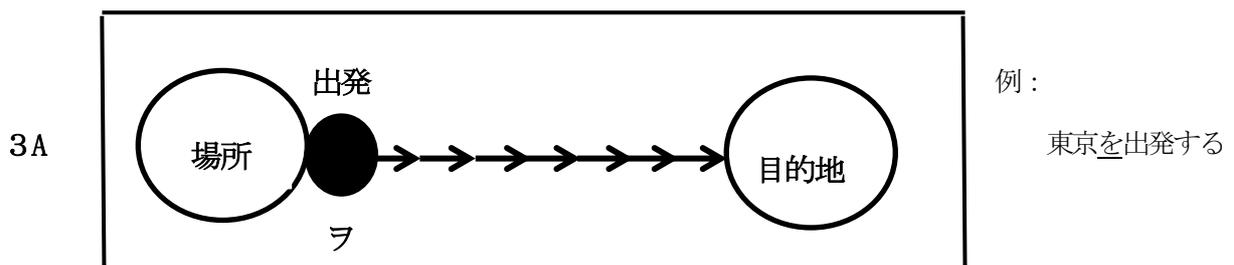
図53 「実現目的・所有権」

2Aでは、「東を指す」、「医者を指す」、「母親を追う」など「を」格は、その動作の進んでいく先にあるものを指し、その動作の進んでいく方向を決定している。

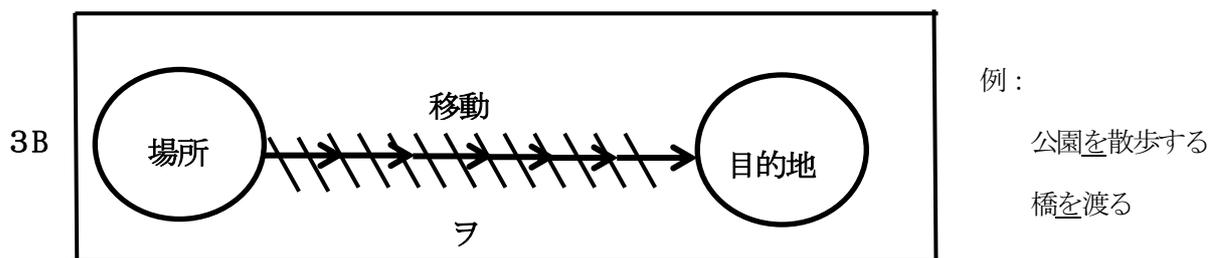


3. 場所

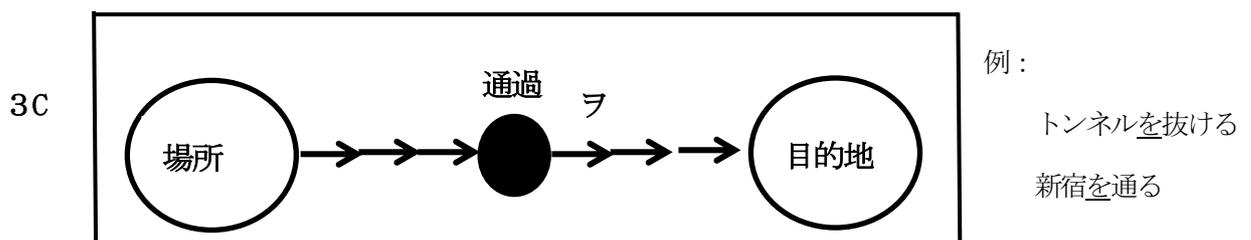
次は、「出発・移動・通過」の場所に関するもので、出発性の移動の自動詞では、「を」格は、出発点となる。図示すれば、以下のようになる。



移動性の移動の自動詞では、「を」格は、移動の場所を表す。図示すれば、以下のようになる。

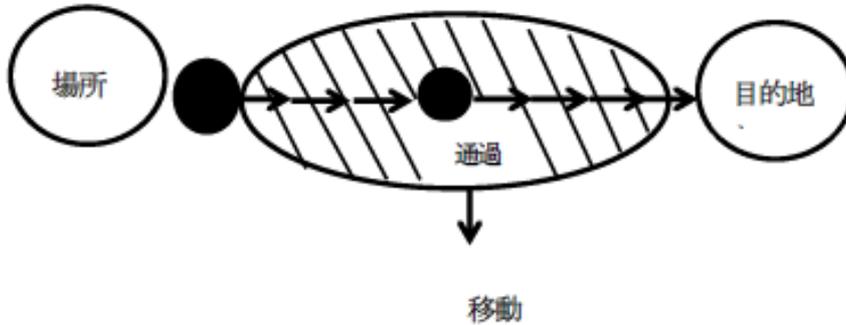


通過性の移動の自動詞では、「を」格は、通過点を表す。図示すれば、以下のようになる。



以上の「出発」、「移動」、「通過」の関係を一つの図に示せば、以下のようになる。

3A 出発+B 移動+C 通過



例：東京を出発して、高速道路を走り、名古屋を通過して、京都に着いた。

3A

3B

3C

以上が「を」格の各用法のイメージ図式である。

これらの用法を見ると、「直接的な対象」、「移動対象・再帰的移動対象」、「認知（知覚）・思考・感情の対象」、「実現目的・目標」などに示されている「を」格は、「何かに向かって進んでいく動作のその先にあるもの」を示している。また、「出発・移動・通過」を表す移動の自動詞に関わる「を」格は、「何かに向かって進んでいく移動動作の場」を表しているということがわかった。この両者に共通する「を」格のコア・イメージは何かに向かって進んで行くという言葉で表されるだろう。以上が本研究の結論である。

図示すれば、以下の図55と図56のようになる。

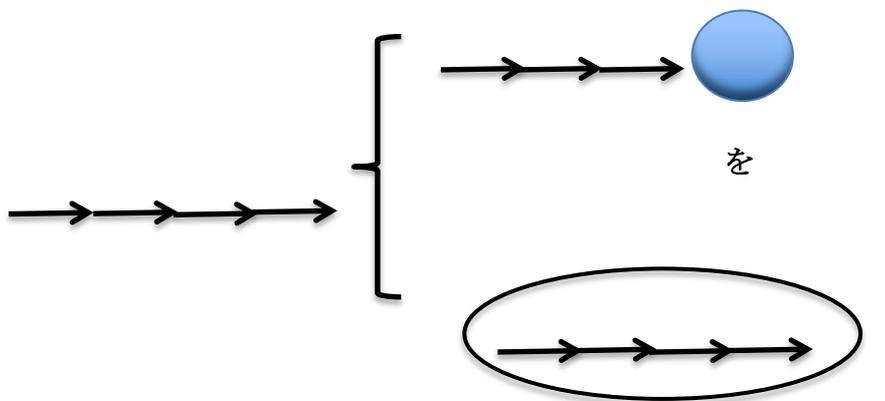


図55 「を」格のコア・イメージ

を

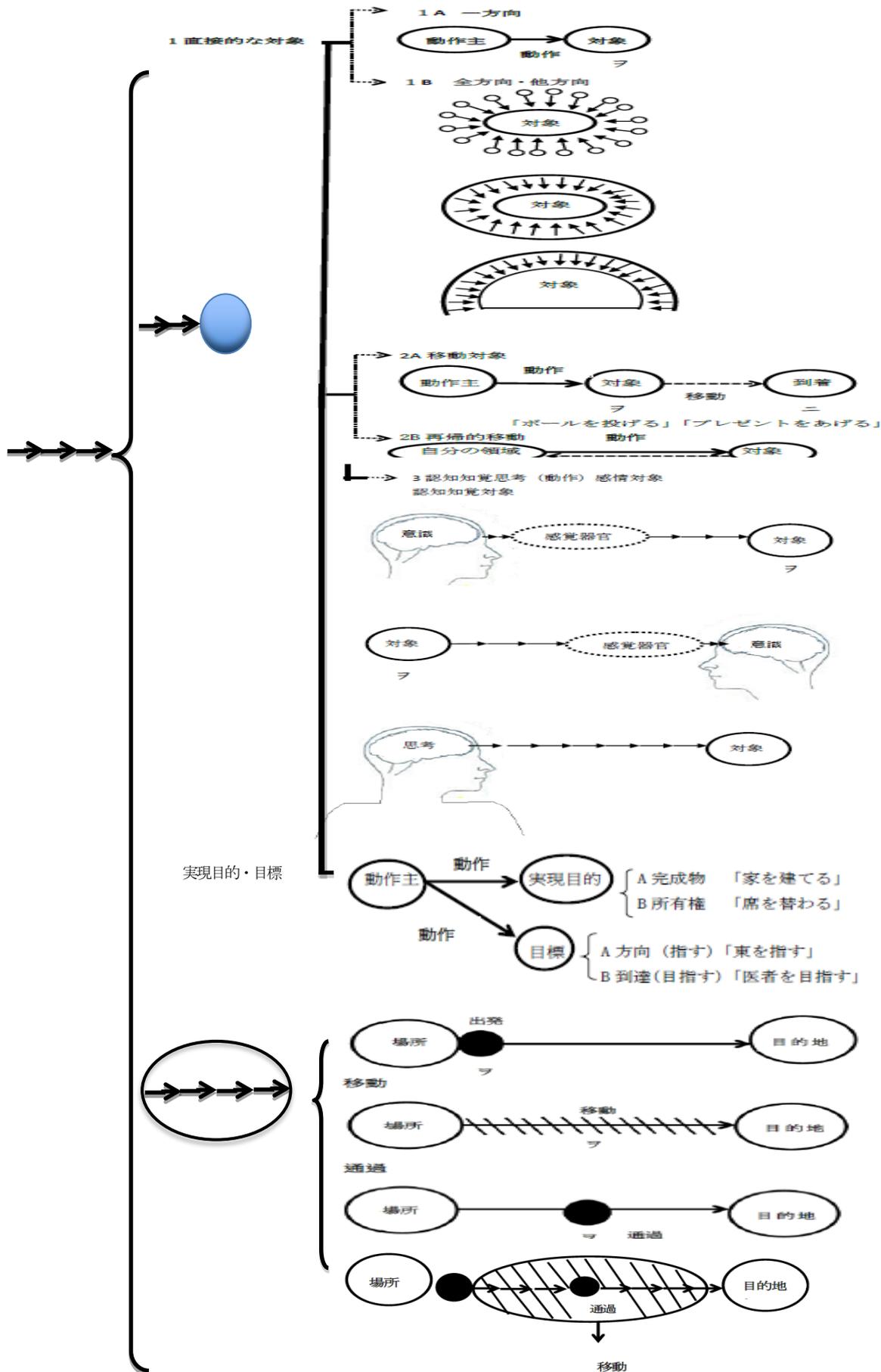


図56 「を」格のコア・イメージのま

4-1 今後の課題

本研究では、「を」格、「から」格と「出る」、「落ちる」、「降りる」の関係を明らかにするため、「出る」「落ちる」、「降りる」と他の格助詞「に」、「へ」などには、あまり触れなかった。また「出る」「落ちる」、「降りる」の慣用表現と多義研究にもふれていない。また、サ変動詞、複合動詞、慣用句的と「を」格については分析の対象としていないので、この点を今後の課題はしたい。

謝辞

本論文を作成するにあたり、指導教授石川守教授から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに心より感謝申し上げます。拓殖大学大学院の日本語教育研究科に交換留学生として来日して以来、修士論文の作成、博士後期課程での研究、そして博士論文の作成と、石川先生には、ひとかたならぬお世話になりました。修士交換留学期間に、研究の楽しさ、難しさを経験することができ、その上、日本の様々な文化を理解する機会に恵まれましたのも先生のお陰です。

また、学位論文審査において、貴重なご指導とご助言を頂いた拓殖言語教育研究科言語学専攻阿久津智教授、ならびに木村政康教授に心より感謝を申しあげます。

あわせて「守屋交流協会奨学金」と「日本語交流協会奨学金」にはご支援を頂き、誠にありがとうございます。

様々な機会を頂きました中でも、学術交流の場として、日本語教育学会、ならびに台湾日本語文藝研究学会で発表を行い、真剣に議論を交わせたことは、研究を進める上で大きな励みとなりました。誠にありがとうございます。

以上のような貴重な体験も、省みれば、長栄大学に交換留学の機会を与えて頂けなければ、かなうことが出来なかったものでした。

留学生として、博士論文を書き上げるまでには、大勢の方々のお世話になりました。研究を続ける上でも、日常生活での注意が欠かせません。保証人の喜田修先生、拓殖大学大学院教職員の皆様には、日頃より、様々なアドバイス、学究生活における多大なご協力とご支援を頂きました。この機会にお礼を申し上げます。

その他、研究を進めるにあたり、ご支援、ご協力を頂きながら、先輩、学友など、ここにお名前を記すことが出来なかった多くの方々に心より感謝申し上げます。

最後に私事ながら、博士課程に進学する機会を与えてくれた両親にこの場をお借りして感謝の念を示したいと思います。父や母が温かく見守り続けてくれたお陰で今の自分があります。

本研究の成果が、こうした皆様のご期待に沿うものかどうかは、本論文をお読み頂く方々のご判断に委ねることとして、ここでは今後一層の精進を続けて行くことを誓い、謝辞に致したいと思います。

孫逸珊

参考文献

- 荒井文雄 (1992) 「移動動詞の意味構造とアスペクト極性」 『京都産業大学国際言語科学研究所
所報』 京都産業大学国際言語科学研究所
- 荒正子 (1975) 「から格の名詞と動詞とのくみあわせ」 『教育国語』 40, 41 むぎ書房
- 井上和子 (1989) 『日本文法小事典』 大修館書店
- 池上嘉彦(1994) 「〈移動〉のスキーマと〈行為〉のスキーマー日本語の『ヲ格+移動動詞』構造の類型論
的考察一」 『外国語科研究紀要』 41・3:34-53 東京:東京大学教養学部外国語科編
- 石井正彦(1983a) 「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」 『日本語学』 2-8:79・90
東京:明治書院 石井正彦(1983b) 「現代語複合動詞の語構造分析一〈動作〉・〈変化〉の観点から
一」 『国語学研究』 23:32・43 仙台:東北大学文学部「国語学研究」刊行会
- 青木博史 (2010) 『語形成から見た日本語文法史』 ひつじ書房
- 青木三郎・竹沢幸一編 (2000) 『空間表現と文法』 くろしお出版
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』 東京大学出版会
- 石綿敏雄 (1999) 『現代言語理論と格』 ひつじ書房
- 伊藤武彦ほか (1993) 『文の理解にはたす助詞の働き』 風間書房
- 伊藤健人 (2002) 「日本語の格助詞表現の意味解釈について」 『明海日本語』 7 明海大学
- 伊藤健人 (2003) 「動詞の意味と構文の意味 - 「出る」の多義性に関する構文文法的アプローチ」
『明海日本語』 8) pp. 39-52
- 伊藤達也 (2008) 「「出る」と Sortir : トポロジー空間の召喚と構築的意味論」 『名古屋外国語大学紀
要』 34号 pp105-122
- 伊藤健人 (2008) 『イメージ・スキーマに基づく格パターン構文』 ひつじ書房
- 生田守・久保田美子 (1997) 「上級学習者における格助詞「を」「に」「で」習得上の問題点」 『日本語
国際センター紀要』 第7号 国際交流基金日本語国際センター
- 池上嘉彦 (1993) 「〈移動〉のスキーマと〈行為〉のスキーマー日本語の「ヲ格+移動動詞」構造の類型
論的考察一」, 『外国語科研究紀要』 41-3, 東京大学教養学部外国語科
- 『意味論入門』 『日本語学』 15-12 (1986) 国広哲弥
- 宇都宮裕章 (1997) 「ヲ格の境界性一「範囲」を定める格としての認定一」, 『静岡大学教育学部研究報
告
(人文・社会科学篇)』 48, 静岡大学
- 江副隆秀 (1987) 『外国人に教える日本語文法入門』 創拓社

- 小鹿良太(1993)『国文法の達人』文英堂
- 奥田靖雄(1979)「意味と機能」『教育国語』58 むぎ書房
- 奥田靖雄(1996)『ことばの研究・序説』 むぎ書房
- 奥田靖雄(1967b)「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8 東京:むぎ書房(奥田 (1996):3・20 に所収)
- 奥田靖雄(1968・1972)「を格の名詞と動詞のくみあわせ」『教育国語』12、13、15、20、1、23、25、26、28 東京:むぎ書房(言語学研究会編(1983):22-149 に所収) 奥田靖雄(1979)「意味と機能」『教育国語』58 東京:むぎ書房(奥田(1996):159-170 に所収)
- 岡田幸彦(2001)「空間移動を表す動詞の分析—構文特性・アスペクト特性・タクシス特性に基づいて」『日本語科学』(10)
- 岡田幸彦(2004)「移動自動詞の語彙的意味の特性としての方向性—現代日本語を例に—(1)」『マテシス・ユニウェルサリス』 独協大学外国語学部言語文化学科
- 岡田幸彦(2005)「移動自動詞の語彙的意味の特性としての方向性—現代日本語を例に—(2)」『マテシス・ユニウェルサリス』 独協大学外国語学部言語文化学科
- 岡田幸彦(2006)「移動自動詞の語彙的意味の特性としての方向性—現代日本語を例に—(3)」『マテシス・ユニウェルサリス』 独協大学外国語学部言語文化学科
- 夏海燕(2017)『動詞の意味拡張における方向性』ひつじ書房
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1993)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- 影山太郎(2002)「概念構造の拡充パターンと有界性」『日本語文法』2(2)、日本語文法学会
- 北原博雄(1999)「日本語における動詞句の限界性の決定要因—対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論」黒田成幸・中村捷(編)『ことばの核と周縁—日本語と英語の間』くろしお出版
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15 むぎ書房
- 金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 黒田史彦(2000)「移動同士と共起するヲ格名詞句について」『関西外国語大学大学院研究論集』 関西外国語大学大学院
- 近藤安月子・姫野伴子(編著)(2012)『日本語文法の論点 43』研究社
- 国広哲弥(2006)『日本語の多義動詞—理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店
- 久保田美子(1993)「第2言語としての日本語の縦断的習得研究—「を」「に」「で」「へ」の習得過程について」『日本語教育』82号 日本語教育学会

- 黒田史彦(2000) 「移動動詞と共起するヲ格名詞句について」『関西外国語大学大学院研究 論集』
14:53・70 大阪:関西外国語大学大学院
- 『岩波国語辞典 第7版』(2009) 岩波書店
- 『学研国語大辞典 第二版』(1988) (学習研究社)
- 『学研現代新国語辞典 改訂第四版』(1994) 学習研究社
- 『角川国語大辞典』(1982) 角川書店
- 『研究社 日本語表現活用辞典』(2004) 研究社
- 『基礎日本語2 意味と使い方』(1980) 角川書店
- 小林典子(2001) 「学習者の文法処理方法」『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 『国立国語研究所報告 113 日本語における表層格と深層格の対応関係』(1997) 国立国語研究所
三省堂
- 国立国語研究所『動詞の意味・用法の記述的研究』(1972) 秀英出版
- 国立国語研究所, 『分類語彙表-増補改訂版-』(2004)
- 小泉保『日本語の格と文型—結合化理論にもとづく新提案』(2007) 大修館
- 斎藤倫明(1992) 『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味』ひつじ書房
- 定延利之(2000) 『認知言語論』大修館書店
- 定延利之(2002) 「時間から空間へ—〈空間的分布を表す時間語彙〉をめぐって—」生越直樹編
『対照言語学』東京大学出版会
- 定延利之(2000) 『認知言語論』東京:大修館書店
- 定延利之(2002) 「時間から空間へ—〈空間的分布を表す時間語彙〉をめぐって—」生越直樹編
- 柴谷方良(1990) 「助詞の意味と機能について」国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会
(1990)所収
- 鈴木一彦・林巨樹『研究資料日本文法 第5巻 助辞編(一) 助詞』 明治書院
- 鈴木重幸(1972a) 『日本語文法・形態論』むぎ書房.
- 鈴木重幸(1972b) 『主語. 文法と文法指導』むぎ書房
- 鈴木重幸(1992) 『主語論をめぐって』言語学研究会 1992 ことばの科学5. むぎ書房.
- 菅井三実(1998) 「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」, 『名古屋大学文学部研究論集(文学)』44
(130), 名古屋大学
- 菅井三実(1999) 「日本語における空間の対格標示について」, 『名古屋大学文学部研究論集
(文学)』45 (133), 名古屋大学

- 杉本武 (1986) 「第 3 章 格助詞―「が」「を」「に」と文法関係―」, 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武
『いわゆる日本語助詞の研究』, 凡人社
- 杉本武 (1993) 「状況の「を」について」, 『九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学編)』 6, 九州工業大学
- 杉村泰 (2009) 「コーパスを利用した複合動詞「一残る」の意味分析」 『言語文化論集』 30(2): 171-180. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 杉村泰 (2016) 「日本語の格助詞「を」と「から」の選択」 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 砂川有里子(1984) 「『二』と『カラ』の交替と動詞の意味構造について」 『日本語・日本文化』 12:71・87 大阪:大阪外国語大学研究留学生別科
- 丹保健一 (1998) 「「ヲ出る」「カラ出る」の文法(その2)」 三重大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学. (49) p. 17-25
- 高橋太郎(1987b) 「動詞の動詞らしさ」『国語学会昭和 62 年度秋季大会』(公開公演)岐阜:国語学会(高橋太郎(1994):9-32 に所収)
- 高橋太郎 (1994) 『動詞の研究―動詞の動詞らしさの発展と消失―』 むぎ書房
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』 ひつじ書房
- 竹沢幸一 (1998) 「格の役割と構造」 中右実 (編) 『日英語比較選書 9 格と語順と統語構造』 研究社
- 谷口秀治 (2000) 「「必須格構造からみた日本語文型の一分類-文型教材のためのデータベースとして-」 『大分大学教育福祉科学部研究紀要』 22 巻 2 号, pp. 443-453
- 谷守正寛 (1999) 「分離点を表すヲとカラ、および有情性について」 鳥取大学教育地域科学部紀要・教育・人文科学 p. 275-283。
- 田忠魁・泉原省二・金相順 『日本語類義表現のニュアンスの違いを例証する類語使い分け辞典』 (1998) 研究社出版
- 田窪行則(1984) 「現代日本語の場所を表す名詞類について」 『日本語・日本文化』 12:89・115
大阪:大阪外国語大学研究留学生別科
- 竹林一志(2004) 『現代日本語における主部の本質と諸相』 くろしお出版
- 塚本秀樹 (1991) 「日本語における格助詞の交替現象について」 『愛媛大学法文学部論集 文学科編』 24
- 津留紀子・舛井雅子・柳田恵里子(1998) 「会話力の獲得を中心とした初級日本語における助詞習得の問題とその指導」 『熊本大学留学生センター紀要第 2 号』 熊本大学留学生センター
- 大辞泉 増補・新装版 (1995) 株式会社 小学館

- 太田 真由美 (2012) 「移動動詞「おちる」の意味分析」名古屋大学大学院国際言語文化研究科 言語と文化第13号 p.9-26
- 田中 茂範 (1997) 『空間と移動の表現』 研究社出版
- 田中章夫 (1977) 「助詞 (3)」『岩波講座日本語7 文法 II』 359-454、岩波書店
- 竹沢幸一(1998) 「格の役割と構造」中右実(編)『日英語比較選書9 格と語順と統語構造』:2・102 東京:研究社
- チャールズ J. フィルモア 田中春美 船城道雄(訳) (1975) 『格文法の原理-言葉の意味と構造』三省堂
- 寺村秀夫(1968) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版
- 富田 隆行 (1991) 『これだけは知っておきたい日本語教育のための文法の基礎知識とその教え方』凡人社
- 柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進 (1976) 『ことばの意味1 辞書に書いてないこと』平凡社
- 杉本泰 (2005) 「起点を表す格助詞「を」と「から」の使い分け」。名古屋大学言語文化研究会 p.109-118
『日本語基本動詞用法辞典』(1989) 大修館書店
- 中島文雄 (1987) 『日本語の構造』岩波書店
- 成田徹男 (1979) 「動詞の意味と格一『移動』に関する動詞を中心に一」『人文学報』東京都立大学人文学部
- 成田徹男 (1979) 「格による動詞分類の試み一自然言語処理用レキシコンのために一」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究5一計算機用レキシコンのために一』情報処理振興事業協会
- 長嶋善郎(1976) 「複合動詞の構造」『日本語講座第四巻 日本語の語彙と表現』東京:大修館書店(斎藤倫明・石井正彦(編))
- 中村 渉 (2004) 「格システムと格融合の類型論」『認知言語学論考』NO.4, ひつじ書房, 2004
- 成田徹男(1979) 「動詞の意味と格一『移動』に関する動詞を中心に一」『人文学報』132:47-64
東京:東京都立大学人文学部
- 成田徹男(1981) 「空間的移動を意味する「～てくる・～ていく」『人文学報』東京:東京都立大学人文学部
- 成田徹男(1983) 「格による動詞分類の試み一自然言語処理用レキシコンのために一」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究5一計算機用レキシコンのために一』:160・181 東京:情報処理振興

事業協会

日高水穂 (1999) 「ことばに関するアンケート調査 1997-1998」日高水穂編 『秋田大ことばの調査』

第1集

新屋映子(2003) 『日本語運用文法 文法は表現する』 凡人社

新屋映子(2014) 『日本語の名詞指向性の研究』 ひつじ書房

仁田義雄(1986) 「格体制と動詞のタイプ」 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』 東京:情報処

理振興事業協会

仁田義雄 (2009) 『日本語の文法カテゴリをめぐって』 ひつじ書房

仁田義雄 (1993) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房

仁田義雄 (1991) 「連語論—ヲ格名詞の対象性」 『国文学 解釈と教材の研究』 ひつじ書房

仁田義雄 (2005) 『日本語教育事典 新版』 大修館書店

仁田義雄 (2007) 『日本語学研究事典』 明治書院

仁田義雄(1980) 『語彙論的統語論』 明治書院

『日本語表現活用辞典』 (2004) 研究社

『日本語大辞典第二版』 (1995) 講談社

『明鏡 国語辞典第一版』 (2002) 大修館書店

三宅知宏 (1995) 「ヲとカラ 一起点の格標示—」 宮島達夫・仁田義雄(編) 『日本語類義表現の文法
(上) 単文編, くろしお出版』 p. 67-73

三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対象標示について」, 『言語研究』 110, 日本言語学会

宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 国立国語研究所

宮島達夫(1986) 「格支配の量的側面」 『論集日本語研究現代編』

宮島達夫(1994) 『語彙論研究』 東京:むぎ書房

野田尚史 (1991) 『初めての人の日本語文法』 くろしお出版

松本曜 (2017) 『移動表現の類型論』 くろしお出版

松木新次郎 (1982) 「動詞の結合能力をめぐって」 『日本語教育』 47

松木新次郎 (1988) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房

松田文子 (2001) 「コア図式を用いた複合動詞後項「〜こむ」の認知意味論的説明」

『日本語教育』 111、日本語教育学会

松村明(1995) 『大辞林』 小学館

松下大三郎 (1928) 『改撰 標準日本口語法』 紀元社 (勉誠社、1989)

- 松本洋介(1994)『新総合国語便覧』第一学習者
- 丸山直子(2007)「辞書記述のためのコーパス利用 動詞の格情報とその記述法」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 18 年度研究成果報告書』
- 丸山直子(2011)「動詞の格情報—国語辞書の記述とコーパス—」『東京女子大学日本文学』107
- 楠本徹也(2002)「を」格における他動性のスキーマ」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28.東京外国語大学留学生日本語教育センター.pp.1-12.
- 宗宮喜代子(2012)『文化の観点から見た文法の日英対照:時制・相・構文・格助詞を中心に』ひつじ書房
- 森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』 明治書院
- 森田良行(1995)『日本語の視点』創拓社
- 森田良行(1973)「動詞における格支配と意味」『十周年記念論文集』東京:早稲田大学語学教育研究所
- 森田良行(1976)「動詞の文型と意味について」『講座日本語教育』東京:早稲田大学語学教育研究所
- 森田良行『基礎日本語—意味と使い方』(1977) 角川書店
- 森田良行(1977)『基礎日本語—意味と使い方』角川書店
- 森田良行(2002)『日本語文法の発想』 東京:ひつじ書房
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 森山卓郎(1987)「方向・移動の形式をめぐって」『語文』49:29・40 大阪:大阪大学国語国文学会
- 森山 新(2012)『日本語多義語学習辞典 動詞編』 株式会社アルク
- 西尾実ほか(1992)『岩波国語辞典第4版』岩波書店
- 李在鎬・伊藤健人(2008)「決定木を用いた多義語分析:多義動詞「出る」を例に」認知言語学論文集 Vol 8. 55-65, 1
- 李 善姫(2001)「格支配による移動動詞の分類と考察」東京外国語大学大学院平成 12 年度修士論文
- 李 善姫(2004)「格結合頻度からみた移動動詞の語彙的意味」『日本研究教育年報』8:1-27
東京:東京外国語大学日本課程・留学生課共編
- 類語研究会編(1991)『似た言葉使い分け辞典』 創拓社
- 安原和也『ことばの認知プロセス』三修社
- 山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄『新明解国語辞典第六版』(2005) 三省堂
- 山梨正明(1987b)『深層格の核と周辺—日本語の格助詞からの一考察』小泉保還暦論文集 大学書院

- 山梨正明 (1993) 「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本語の格をめぐって』仁田義雄編, くろしお出版
- 山梨正明 (1994) 『日常言語の認知格モデル』1~6. 月刊言語 vol. 23. No. 1~6.
- 吉本啓 (1993) 「日本語の文階層構造と主題・焦点・時制」言語研究 103 号. 日本言語学会
- 庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

参考資料—動詞—一覧表

あ

相変わる

愛する 2A 直接的な動作の対象

会う

合う

逢う

あえぐ

仰ぐ 3 移動・通過・出発

上がる 3 移動・通過・出発

揚がる 3 移動・通過・出発

騰がる 3 移動・通過・出発

飽きる

あきる

諦める 1 目標・目的

開く

空く 2A 直接的な動作の対象

明ける 2A 直接的な動作の対象

開ける 2A 直接的な動作の対象

上げる 2B1 移動対象

挙げる 2B1 移動対象

憧れる

あしろう 2A 直接的な動作の対象

あじわう 2A 直接的な動作の対象

あずかる 2A 直接的な動作の対象

あずける 2B1 移動対象

焦る

遊ぶ

与える 2B1 移動対象

あたる 2A 直接的な動作の対象

扱う 2A 直接的な動作の対象

集まる

集める 2B1 移動対象

充てる 2B1 移動対象

当てる 2B1 移動対象

あてる 2B1 移動対象

浴びる 2B1 移動対象

溢れる

編む 1 目標・目的 (セーターを編む)

2A 直接的な動作の対象

(糸を編む)

誤る 1 目標・目的

あゆむ 3 移動・通過・出発

あらう 2A 直接的な動作の対象

荒らす 2A 直接的な動作の対象

争う 1 実現目的 (所有権・使用权・占有権) の実現

改める 2A 直接的な動作の対象

表す 1 目標・目的 (人間の気持ち

を) 2A 直接的な動作の対象

著す (姿をあらわす)

あらわれる 3 移動・通過・出発

有る

在る

歩く 3 移動・通過・出発

合わす 2A 直接的な動作の対象

会わす 2A 直接的な動作の対象

あわせる 2A 直接的な動作の対象

慌てる

案じる 2A 直接的な動作の対象

案ずる 2A 直接的な動作の対象

い

言い出す

言う 2B1 移動対象(情報伝達)名を言

う

生かす 2A 直接的な動作の対象

活かす 2A 直接的な動作の対象

いきる 3 移動・通過・出発

いける (いけない)

いける (酒がいける口だ)

急ぐ 1 目標・目的 (計画を急ぐ)
2A 直接的な動作の対象 (工事

を)

いただく 2A 直接的な動作の対象

致す 2A 直接的な動作の対象

頂く 2 B2 再帰的移動

痛む

傷む 2 C 志向対象 (対象物について
悲しむ)

悼む 2 C 志向対象

傷める 2 C 志向対象

炒める 2A 直接的な動作の対象

至る 3 移動・通過・出発

いたわる 2A 直接的な動作の対象

営む 2A 直接的な動作の対象

祈る 1 目標・目的

嫌がる 2 C 志向対象

いらっしゃる 3 移動・通過・出発

居る

入る

要る

入れる 2B1 移動対象

祝う 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚
の対象

う

植える 2B1 移動対象

伺う 1 目標・目的

窺う 1 目標・目的

浮かぶ

うかびあがる

浮かべる

うく

受け止める 1 目標・目的

受け取る 2 B2 再帰的移動

動かす 2 B 移動対象

動く (席を動かさないで)
3 移動・通過・**出発**

(ここを動かさないで)

失う 2 C 志向対象

うづく

埋める 2B1 移動対象

歌う 1 目標・目的

疑う 2B1 移動対象

打つ 2B1 移動対象

撃つ 2B1 移動対象

討つ	2B1 移動対象	追い出す	2B1 移動対象
打ち明ける	1 目標・目的	追いつく	
うちこむ	2B1 移動対象	追い詰める	2B1 移動対象
写す	2B1 移動対象	負う	2B1 移動対象
映す	2B1 移動対象	追う	2B1 移動対象
移す	2B1 移動対象	応じる	
促す	2A 直接的な動作の対象 (相手を促す)	応ずる	
	1 目標・目的 (出発を促す)	終わる	2A 直接的な動作の対象
	生まれる	覆う	2A 直接的な動作の対象 (表面を布で覆う) 隠す。見えないようにする。
生む	1 目標・目的		(包む、隠せる、隠す、囲む、カバーする)
産む	2B1 移動対象(外に出す)	犯す	2A 直接的な動作の対象 力を加えて、そのものの現在の形を壊す「法律を犯す」
裏切る	2A 直接的な動作の対象	侵す	2A 直接的な動作の対象 相手の領域に直接力を加えて、領域を破壊する
恨む	2C 志向対象	置く	2B1 移動対象
売る	2B1 移動対象	於く	
売り出す		起きる	
売れる		起き上がる	
うろつく	3移動・通過・出発	補う	2B1 移動対象 1 目的
上回る	3移動・通過・出発	送る	2B1 移動対象
え		贈る	2B1 移動対象
描く	1 目標・目的	送り出す	
選ぶ	1 目標・目的	遅れる	
	2A 直接的な動作の対象	後れる	
得る	2B1 移動対象		
演じる	1 目標・目的		
演ずる	1 目標・目的		
お			
追いかける	1 目標・目的		

起こす	2A 直接的な動作の対象	おののく
興す	2A 直接的な動作の対象	おびえる
おこたる	2A 直接的な動作の対象	おびやかす
起る		覚える 2 B2 再帰的移動
興る		思う 2 C 志向対象 (想像する)
怒る		思い浮かべる
抑える	2A 直接的な動作の対象	思いがける
収める	2B1 移動対象	思い切る
納める	2B1 移動対象	思い込む
押す	2A 直接的な動作の対象	思い出す 2 B2 再帰的移動
推す	2A 直接的な動作の対象	思いつく
擦す	2A 直接的な動作の対象	泳ぐ 3 移動 ・通過・出発
教える	2B1 移動対象	及ぶ
押しかける		及ぼす 「及ぶ」の他動詞化。「影響を及ぼす」
押し切る		
押し込む		折る 2A 直接的な動作の対象
押し付ける		居る
惜しむ	2 C 志向対象	下りる 3 移動 ・通過・ 出発
押し寄せる		降りる 3 移動 ・通過・ 出発
襲う	2A 直接的な動作の対象	折り返す
恐れる	2 C 志向対象	織り込む
陥る		折れる
落ち着く		下す 2B1 移動対象
おっしゃる		あるものに働きかけて、下の方に移動させる
落とす	2B1 移動対象	
訪れる		卸す 2B1 移動対象
劣る		負わす 「怪我を負わす」(させる)
踊る	1 目標・目的	その場所に怪我を残す(比喻)
衰える		終わる 2A 直接的な動作の対象
驚く		あるものに力を加えて、そのもの

の動きを止める（終える）

か

買い入れる

解する

2 B2 再帰的移動

あるものに力を加えて、その情報を自分に移動すること

害する

2A 直接的な動作の対象

生理状態や気持ちを好ましくない状態にする

傷つけて、相手にとって好ましくない状態

自分の責任にあるものの状態を悪くする。誰かのせいで悪くする

買う

2 B2 再帰的移動

手に入れる。お金で自分の所有物に移す。対象物に何か動作を加えて、

対象物が自分の領域に移す。

飼う

2A 直接的な動作の対象

動物を自分のものとして、養い育てる

返す

2B1 移動対象

他の人のものを一時的に自分の管理領域に移したものを相手の元に戻すこと。

帰る

3 **移動**・通過・出発 「この道を

帰

る」移動の場所。「道を歩く」同じ

かえりみる

2 B2 再帰的移動

過去を思い出すこと。自分の過去

でないといけない。

変える

2A 直接的な動作の対象

ある動作を加えて、そのものを別のものにする。変化させる。

移動のメタファー。抽象的。

替える

2B1 移動対象

前にあったものを代わりにそのものに移動してそのものを新しい所に置く。あるものに働きかけて、移動させる。

代える

2B1 移動対象

抱える

2A 直接的な動作の対象

掲げる

2B1 移動対象

「旗を掲げる」

人に見えるように、低い場所からあるものを高い場所に移動する。

輝く

耀る

懸る

掛かる

斯かる

かがる（裁縫）

関わる

書く

1 実現目的

描く

1 実現目的

画く

1 実現目的

搔く

2A 直接的な動作の対象

欠く

2A 直接的な動作の対象

ある動作を加えて、そのものの一部分がない状態にする

「石を欠く」

かき回す 2A 直接的な動作の対象

限る 2A 直接的な動作の対象
ある状態でストップさせる
「人数を限る」

隠す 2A 直接的な動作の対象
そのものを見えないようにすること。

隠れる

掛ける 2B1 移動対象
移動させる対象物
「テーブルに毛布を掛ける」

賭ける 2B1 移動対象 (抽象的)
「お金を賭ける」 移動する対象物
博奕、宝くじ、競争

欠ける

駆ける 3 **移動**・通過・出発

かけこむ 3 **移動**・通過・出発
「道を～にかけこむ」 着点「に」

かけつける 3 **移動**・通過・出発

囲む 1 目標
ある目標の周囲に物を置く、位置する。柵を囲む。全体を表している。

重なる

重ねる 2B1 移動対象

飾る 1 目標

化す

貸す 2B1 移動対象

課する 税金・義務を課する。
2B1 移動対象

傾げる 2A 直接的な動作の対象

かすめる 2A 直接的な動作の対象
進み向かう所のものを指す

稼ぐ 2B1 移動対象 再帰的移動

数える 2A 直接的な動作の対象
進み向かうところのものを解明する

片付ける 2B1 移動対象
ある場所に移動させる

固まる

傾く

傾ける 2A 直接的な動作の対象

固める 2A 直接的な動作の対象
作用を加えて固くする。流動的なものをある作用を加えて非流動的なものにする。

語る 2B1 移動対象 情報の移動
その内容を相手に伝える

騙る 2B1 移動対象

勝つ

担ぐ 2B1 移動対象
肩に担ぐ。お神輿を担ぐ。背中に移動させる。

叶う

敵う

悲しむ 2C 感情の志向対象

兼ねる 1 目標
二つの役割を果たす。演じる、果たす。

かねる (できにくい意)

庇う

被せる 2B1 移動対象

被る 2 B2 再帰的移動
 (浴びる) 移動物が自分に移動する
 水を被る
 構う
構える 1 実現目的
嚙む 2A 直接的な動作の対象
 かもしだす
通う 道を通う 3 **移動**・通過・出発
 絡む
借りる 2 B2 再帰的移動
 他人の使用物を自分の使用領域に
 移すこと
 がる (接尾)
可愛がる 2A 直接的な動作の対象
 かわく
交わす 2B1 移動対象
 双方向の移動対象
 変わる
代わる 1 実現目的 (**所有権**・使用権・
 占有権) の実現
替わる 1 実現目的 (**所有権**・使用権・
 占有権) の実現
考える 原因を考える
 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の
 対象
感じる
 感じ取る
 頑張る
き
着る 2 B2 再帰的移動

消える
着替える 2B1 移動対象
聞かす 2B1 移動対象
利かす 1 目標
 スパイスを利かす
 利く
聞く 2 B2 再帰的移動
 訊く
 聞こえる
刻む 2A 直接的な動作の対象
 対象物に力を加える。刃物を使って
 そのものを細かく切る。
 野菜を刻む
期する 1 実現目的 万全(完全)を期する
築く 1 実現目的
傷つける 2A 直接的な動作の対象
着せる 2B1 移動対象
競う 1 目標
来す 2B1 移動対象「～に支障を来す」
 (意識がない) 起こさせる
 きたる
 気付く
 決まる
決める 1 実現目的
供する 食料を供する 2 B1 移動対象
嫌う 感情の志向対象
切る 2A 直接的な動作の対象
切り替える
 切り込む
 切り出す

切り取る		くろう	パンチ/げんこつ/ひじてつ
切り離す			をくろう (受ける)
切り開く			2A 直接的な動作の対象
切れる		くらす	3 移動・通過・出発
極まる		比べる	2C 認知志向・知覚対象
極める	1 実現目的	繰り返す	2A 直接的な動作の対象
禁じる	1 目標 (否定的)	狂う	
	酒を禁じる	切る	
	アルバイトを禁ずる	苦しむ	に
禁ずる	書き言葉 (古い)	くるむ	2A 直接的な動作の対象 (全体)
く		暮れる	
食う	2A 直接的な動作の対象	呉れる	2B1 移動対象
潜る	3 移動・通過・出発	加える	2B1 移動対象
腐る			スープに塩を加える
崩す	2A 直接的な動作の対象	加わる	
崩れる		け	
碎ける		消す	2A 直接的な動作の対象
下さる	2B1 移動対象	削る	2A 直接的な動作の対象
下す	2B1 移動対象	決する	2C 認知志向・知覚対象
下る			精神作用の対象
口説く	2A 直接的な動作の対象	蹴る	2A 直接的な動作の対象
くばる	2B1 移動対象	こ	
組む	1 実現目的「足場を組む」 2A 直接的な動作の対象	請う	2B1 移動対象「お金をこう」
	「腕/足/手を組む」	恋する	2C 認知志向・知覚対象
汲む	2A 直接的な動作の対象	講じる	2C 認知志向・知覚対象
組み合わせる			解決方法・対策を考えて、志向判断 の対象
組み立てる			
曇る			

超える 3移動・通過・出発 量的の基準

温度を超える

越える 空間的 山を越える

心得る 2C 認知志向・知覚対象
精神作用

志す 1 実現目標

心がける 2C 認知志向・知覚対象
精神的な対象
整理整頓を心がける

試みる 2A 直接的な動作の対象

ござる

越す 3移動・通過・出発

こしかける

こしらえる 1 実現目的

こする 2A 直接的な動作の対象

答える 2C 認知志向・知覚対象

応える

異なる

断る 2A 直接的な動作の対象
(抽象化された直接的な動作の対象、相手の動作をストップさせる)

好む 2C 認知志向・知覚対象

こぼす 2B1 移動対象

ごまかす 2A 直接的な動作の対象
(全体)

困る

込む

混む

込める 2B1 移動対象

弾を込める

籠める 2B1 移動対象

こもる

こらえる 我慢する、押さえる
2C 認知志向・知覚対象
精神的な対象

凝らす 2C 認知志向・知覚対象

凝る

転がる 2B1 移動対象

殺す 2A 直接的な動作の対象

壊す 2A 直接的な動作の対象

壊れる

さ

際する

遮る 2A 直接的な動作の対象

進んで来るものをストップさせる

車／光を遮る

探す 2A 直接的な動作の対象

発見するように

探し求める

遡る 3移動・通過・出発

川を遡る (流れしかない)

移動の場所

下がる 3移動・通過・出発

咲く

裂く 2A 直接的な動作の対象

一つのを無理矢理に二つにする

割く	刃物を使う 腹を割く 2A 直接的な動作の対象	差し出す 差し引く
探る	何かあるか見つけに行く 2A 直接的な動作の対象 袋の中を手で探る	させる
避ける	1 目標 動作の向かい進んでいく方向を定めるもの。	誘う 2A 直接的な動作の対象
下げる	2A 直接的な動作の対象	定める 1 実現目的
提げる	2A 直接的な動作の対象 温度を提げる	察する 2C 認知志向・知覚対象 (精神的感情)
叫ぶ	2A 直接的な動作の対象 名前を叫ぶ、無実を叫ぶ	悟る 2C 認知志向・知覚対象 (精神的感情)
捧げる	2B1 移動対象 (相手のところに移す) 神前に五穀を捧げる 2A 直接的な動作の対象 高いところに捧げる	覚ます 醒ます 覚める 醒める
差す	1 目標	さらす 2B1 移動対象 外から見えるようにあるものを置く状態にする
刺す	2A 直接的な動作の対象 腹を (ナイフで) 刺す 2B1 移動対象 ナイフを (腹に) 刺す	去る 3 移動・通過・ 出発 される
指す	1 目標	騒ぐ
挿す	2B1 移動対象	触る 2A 直接的な動作の対象 障る
注す	2B1 移動対象	し しする
さしあげる	2B1 移動対象 プレゼントを差し上げる	仕上げる 1 実現目的
さしあたる		強いる 2A 直接的な動作の対象
さしかかる		叱る 2A 直接的な動作の対象 敷く 2B1 移動対象 布く 静まる

沈む		標す	2A 直接的な動作の対象
従う			忘れないように書くこと
親しむ		知れる	
仕立てる	1 実現目的	信じる	2C 認知志向・知覚対象
死ぬ		信ずる	2C 認知志向・知覚対象
しのぐ	2A 直接的な動作の対象	す	
忍ぶ	2A 直接的な動作の対象	吸う	2A 直接的な動作の対象
偲ぶ	2C 認知志向・知覚対象	すえる	2B1 移動対象
支払う	2B1 移動対象	透かす	2A 直接的な動作の対象
縛る	2A 直接的な動作の対象	空かす	2A 直接的な動作の対象
絞る	2A 直接的な動作の対象	すがりつく	
しまう	2B1 移動対象	好く	2C 認知志向・知覚対象
沁みる		透く	
じみる (接尾)		空く	
しみこむ		すぎる	3 移動・通過・出発
占める	～支配する、自分のものにする 場所・地位を占める 2A 直接的な動作の対象	救う	2A 直接的な動作の対象
締める	2A 直接的な動作の対象	掬う	2A 直接的な動作の対象
しめる (使役)		優れる	
示す	2A 直接的な動作の対象 相手に見せる	過ごす	3 移動・通過・出発
しゃべる	2A 直接的な動作の対象	進む	3 移動・通過・出発
しゃれる		進める	2A 直接的な動作の対象
知らせる	2B1 移動対象	勧める	2A 直接的な動作の対象
調べる	2A 直接的な動作の対象	捨てる	2B1 移動対象
知る	2C 認知志向・知覚対象	滑る	3 移動・通過・出発
知り合う		済ます	2A 直接的な動作の対象
記す	2A 直接的な動作の対象	澄ます	2A 直接的な動作の対象
印す	2A 直接的な動作の対象	済ませる	2A 直接的な動作の対象
		摺る	2A 直接的な動作の対象

刷る 浮世絵を刷る 版画を刷る 2A 直接的な動作の対象	わざとその方向に行かない
搦る 2A 直接的な動作の対象	それる 3移動・ 通過 ・出発 その通過点を通らない
すりかえる 2A 直接的な動作の対象 座る	揃える 2A 直接的な動作の対象 損する 2A 直接的な動作の対象 量を少なくする (減らす) 金を多くする (増える)
せ せる・させる	「損失の対象」失敗を表現するとき、失敗するときに使われる 失敗の他動詞
背負う 2A 直接的な動作の対象	存じる 2C 認知志向・知覚対象
接する 2A 直接的な動作の対象 迫る	存ずる 2C 認知志向・知覚対象
攻める 2A 直接的な動作の対象	た 対する 耐える 絶える
責める 2A 直接的な動作の対象 せられる・させられる	倒す 2A 直接的な動作の対象 倒れる 高まる
そ 沿う 添う 副う 揃う	高める 2A 直接的な動作の対象 焚く 2A 直接的な動作の対象 炊く 2A 直接的な動作の対象
そえる 2A 直接的な動作の対象 属する	抱きしめる 2A 直接的な動作の対象 託する 2B1 移動対象
そそぐ 2B1 移動対象	蓄える 2A 直接的な動作の対象 出す 2B1 移動対象
育てる 2A 直接的な動作の対象	確かめる 2C 認知志向・知覚対象 精神作用(そのものに向かう)
備える 2A 直接的な動作の対象	助かる
具える 2A 直接的な動作の対象 そむく	
染める 2A 直接的な動作の対象	
そらす 1 目標	

助ける	2A 直接的な動作の対象	楽しむ	2C 認知志向・知覚対象
尋ねる	2 B2 再帰的移動 (取る)	頼む	2B1 移動対象
	誰かに働きかけて道についてなんらかの	旅立つ	3移動・通過・ 出発
	仕方でその情報を自分に移動させる	食べる	2A 直接的な動作の対象
訊ねる	2 B2 再帰的移動	給う	2 B2 再帰的移動
訪ねる	1 目標	騙す	2A 直接的な動作の対象
たたえる	2A 直接的な動作の対象	溜まる	
	相手に対して相手を高めように	堪る	
	する(ほめる/持ち上げる)	黙る	
戦う		溜める	2A 直接的な動作の対象
たたく	2A 直接的な動作の対象	貯める	2A 直接的な動作の対象
たたきつける	2 B1 移動対象	試す	2A 直接的な動作の対象
たたずむ		ためらう	2C 認知志向・知覚対象
立つ	3移動・通過・ 出発	保つ	2A 直接的な動作の対象
建つ		頼る	
発つ	3移動・通過・ 出発	足りる	
断つ	2A 直接的な動作の対象		
裁つ	2A 直接的な動作の対象	ち	
立ち上がる		誓う	1 実現目的
立ち止まる		違う	
立ち直る		近づく	3 移動 ・通過・出発
立ち寄る		近寄る	
達する		縮める	2A 直接的な動作の対象
立てる	1 実現目的	散らす	2A 直接的な動作の対象
	計画を立てる	散る	
	2A 直接的な動作の対象		
	物を立てる	っ	
建てる	1 実現目的	費やす	2A 直接的な動作の対象
たどる	3移動・ 通過 ・出発	通じる	3移動・ 通過 ・出発
たどりつく		通ずる	3移動・ 通過 ・出発

使う 2A 直接的な動作の対象

捕まえる 2A 直接的な動作の対象

捕まる

掴む 2A 直接的な動作の対象

疲れる

付く

突く 2A 直接的な動作の対象

腹を(槍で)突く

2B1 移動対象

槍を(腹に)突く

衝く 2A 直接的な動作の対象

2B1 移動対象

搦く 2A 直接的な動作の対象

2B1 移動対象

お餅を何とも繰り返す搦く

つく

尽きる

次ぐ(自動詞)

継ぐ(自動詞) 1 実現目的 受けつく

付き合う

突き当たる

突き出す 2B1 移動対象

突きつける 2B1 移動対象

作る 1 実現目的

作り上げる 1 実現目的

作り出す 1 実現目的

付ける 2B1 移動対象

漬ける 2B1 移動対象

浸ける 2B1 移動対象

告げる 2B1 移動対象(情報の移動)

付け加える 2B1 移動対象

伝える 2B1 移動対象

伝わる

つつく 2A 直接的な動作の対象

続く

続ける 2A 直接的な動作の対象

突っ込む 2B1 移動対象

事件に首を突っ込む

慎む 2A 直接的な動作の対象

謹む

つつぱる 2A 直接的な動作の対象

包む 2A 直接的な動作の対象

(全体的)

つづる 1 実現目的

努める

勉める

勤める 1 実現目的 役を務める

繋がる

潰す 2A 直接的な動作の対象

つぶる

潰れる

つまむ 2A 直接的な動作の対象

鼻をつまむ

2B1 移動対象

物をつまむ

詰まる

積み重ねる 2B1 移動対象

詰める 2B1 移動対象

穴に物を詰める

移動させるものを表している

強まる

貫く 3 移動・**通過**・出発

連ねる 2A 直接的な動作の対象

釣る (他動詞) 2A 直接的な動作の対象

吊る (他動詞) 2A 直接的な動作の対象

連れる 2B1 移動対象

て

出る 3 移動・**通過**・**出発**

出会う

出逢う

ていする 2A 直接的な動作の対象

出掛ける 3 移動・**通過**・**出発**

出来る

出来上がる

適する

徹する 夜を徹する
3 移動・**通過**・出発

手伝う 2A 直接的な動作の対象

照らす 2A 直接的な動作の対象

転じる

転ずる

と

問う 2 B2 再帰的移動 (選択) (相手から情報を得る動作の (情報) 移動の対象)

投じる 2B1 移動対象 (置く、出す、投げると同じ)

投ずる 2B1 移動対象

遠ざかる 3 **移動**・**通過**・**出発**

廊下を遠ざかる

3 移動・**通過**・**出発**

港を遠ざかる

通す 3 移動・**通過**・**出発**

遠退く 3 移動・**通過**・**出発**

通る 3 移動・**通過**・**出発**

透る 3 移動・**通過**・**出発**

溶かす 2A 直接的な動作の対象

説く 2B1 移動対象(情報伝達)

解く 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚
の対象

溶ける

遂げる 1 実現目的

溶け込む

閉ざす 2A 直接的な動作の対象

閉じる 2A 直接的な動作の対象

綴じる 2A 直接的な動作の対象

とじあわせる 2A 直接的な動作の対象

とじつける 2A 直接的な動作の対象

嫁ぐ

届く

届ける 2B1 移動対象

整う

整える 2A 直接的な動作の対象

とどまる

とどめる 2A 直接的な動作の対象

唱える 1 実現目的

言葉を発する・作り出す・生成する

呪文を唱える

怒鳴る		<u>取り入れる</u>	2 B1 移動対象
<u>飛ばす</u>	2 B1 移動対象	<u>取り換える</u>	2 B1 移動対象
<u>飛ぶ</u>	3 <u>移動</u> ・通過・出発	取り組む	
<u>跳ぶ</u>	3 移動・ <u>通過</u> ・出発	<u>取り消す</u>	2 A 直接的な動作の対象
飛び上がる		<u>取り締まる</u>	2 A 直接的な動作の対象
飛び込む		<u>取り出す</u>	2 B1 移動対象
<u>飛び出す</u>	3 移動・通過・ <u>出発</u>	取りつく	
止まる		<u>取りつける</u>	2 B1 移動対象
泊まる		<u>取り除く</u>	2 B1 移動対象
停まる		<u>とりまく</u>	2 A 直接的な動作の対象
富む			(全方向)
<u>止める</u>	2 A 直接的な動作の対象 機械／車／人を止める	<u>取り戻す</u>	2 B2 再帰的移動
<u>停める</u>	2 A 直接的な動作の対象 2 B1 移動対象 車を停める	取れる	
<u>留める</u>	2 A 直接的な動作の対象	とれる	
<u>泊める</u>	2 A 直接的な動作の対象	<u>な</u>	
<u>伴う</u>	2 B1 移動対象	<u>なおす</u>	2 A 直接的な動作の対象
<u>とらえる</u>	2 A 直接的な動作の対象	なおる	
捉われる		<u>流す</u>	2 B1 移動対象
捕られる		<u>眺める</u>	2 C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象
囚われる		流れる	
<u>取る</u>	2 B1 移動対象	流れ込む	
<u>撮る</u>	2 B1 移動対象 対象物の姿を移動させる	<u>泣く</u>	2 C 認知知覚思考(動作)感情感覚の 対象 自分自身を泣く
<u>採る</u>	2 B1 移動対象	鳴く	
<u>執る</u>	2 B1 移動対象 ペンを執る	泣き出す	
<u>取り上げる</u>	2 B1 移動対象	<u>慰める</u>	2 A 直接的な動作の対象
<u>取り扱う</u>	2 A 直接的な動作の対象	<u>亡くす</u>	

殴る	2A 直接的な動作の対象	似合う
投げる	2B1 移動対象	匂う
嘆く	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の 対象	臭う
投げ込む	2B1 移動対象	握る
投げ出す	2B1 移動対象	憎む
なさる	2A 直接的な動作の対象	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の 対象
為す	2A 直接的な動作の対象	逃げる
成す	2A 直接的な動作の対象	3 移動・通過・出発
1 実現目的 大業を成す (達成す る)		その場を逃げる
名付ける	2B1 移動対象	3 移動・通過・出発
なでる	2A 直接的な動作の対象	逃げ出す
名乗る	2B1 移動対象 (情報伝達)	3 移動・通過・出発
なめる	2A 直接的な動作の対象	記者会見を逃げだす
悩む	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象	煮込む
習う	2 B2 再帰的移動 (情報伝達)	2A 直接的な動作の対象
倣う	2 B2 再帰的移動 (情報伝達)	にじむ
鳴らす	2A 直接的な動作の対象	にじみでる
並ぶ		煮立てる
並べる	2A 直接的な動作の対象	2A 直接的な動作の対象
成る		担う
為る		睨む
慣れる		2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の 対象
馴れる		
に		ぬ
煮る	2A 直接的な動作の対象	縫う
似る		ぬいあわせる
		2A 直接的な動作の対象
		ぬいつける
		2A 直接的な動作の対象
		抜く
		2B1 移動対象
		脱ぐ
		2B1 移動対象
		拭う
		2B1 移動対象
		汗を拭う (取り去る)
		2A 直接的な動作の対象
		体を拭う
		抜ける
		3 移動・通過・出発

ぬける 3移動・通過・出発

盗む 2B1 移動対象

塗る 2A 直接的な動作の対象 (全体)

壁を塗る

2B1 移動対象

ペンキを塗る

濡れる

ね

寝る

願う 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の
対象

寝込む

ねしずまる

熱する 2A 直接的な動作の対象

粘る 2A 直接的な動作の対象

交渉を粘る

狙う 1 目標

練る 2A 直接的な動作の対象

粘土を練る

煉る

の

逃れる 3移動・通過・出発

戦火を逃れる

3移動・通過・出発

戦火の中を逃れる

除ける 2B1 移動対象

残す 2A 直接的な動作の対象

残る

のせる 2B1 移動対象

除く 2B1 移動対象

覗く 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の
対象

望む 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の
対象

伸ばす 2A 直接的な動作の対象

延ばす 2A 直接的な動作の対象

述べる 2B1 移動対象 (情報伝達)

のぼる 3移動・通過・出発

飲む 2A 直接的な動作の対象
動作性に注目する

2B1 移動対象

移動に注目する

飲み込む 2A 直接的な動作の対象
動作性に注目する

2B1 移動対象

移動に注目する

乗る

乗り換える 2B1 移動対象

乗り越える 3移動・通過・出発

乗り込む

乗り出す

は

配する 2B1 移動対象

入る 3移動・通過・出発

細い道に入る

3移動・通過・出発

門に入る

入り込む

離す 2B1 移動対象

生える

話し合う 2B1 移動対象
(双方向的情報伝達)

計る 2A 直接的な動作の対象

測る 2A 直接的な動作の対象

はなしかえる

図る 1 実現目的

放つ 2B1 移動対象

吐く 2B1 移動対象

離れる 3 移動・通過・出発

履く 2 B2 再帰的移動

跳ねる (自動詞) 3 **移動**・通過・出発

はぐ 2B1 移動対象

水面を跳ねる

はぎあわせる 2A 直接的な動作の対象

はばむ 2A 直接的な動作の対象

化ける

省く 2A 直接的な動作の対象
(削除する)

はげます 2A 直接的な動作の対象

励む

嵌める 2B1 移動対象

運ぶ 2B1 移動対象

早める 2A 直接的な動作の対象

挟む 2A 直接的な動作の対象

流行る

始まる

払う 2B1 移動対象

始める 2A 直接的な動作の対象

晴らす 1 実現目的

走る 3 **移動**・通過・出発

恨みを晴らす

外す 2B1 移動対象

はらむ 1 実現目的

弾む

子供をはらむ

外れる 3 移動・**通過**・出発

(赤ちゃんを妊娠する)

通過点の外を移動する/通過する

問題をはらむ (比喻)

果たす 1 実現目的

張る 2B1 移動対象

働く 2A 直接的な動作の対象

貼る 2B1 移動対象

発する 2B1 移動対象

張り切る

声を発する

晴れる

2B1 移動対象 (情報伝達)

反する

命令を発する

果てる

ひ

話す 2B1 移動対象 (情報伝達)

冷える

真実を話す/英語を話す

控える 2A 直接的な動作の対象

光る

引く 2A 直接的な動作の対象

曳く

引き上げる 2B1 移動対象

引き揚げる 2B1 移動対象

引き受ける 2A 直接的な動作の対象

引き起こす 1 実現目的

引き返す 3 **移動**・通過・出発

引き下げる 2A 直接的な動作の対象

引き締める 2A 直接的な動作の対象

引きずる 2A 直接的な動作の対象

引き出す 2A 直接的な動作の対象

引き立てる 2A 直接的な動作の対象

ひきつける 2 B2 再帰的移動

引き続く

ひきつれる 2B1 移動対象

引き取る 2 B2 再帰的移動

ひきなおる

ひきねく

ひきはなす 2B1 移動対象

子供を親からひきはなす

比する 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚
の対象

潜む

浸す 2B1 移動対象

ひたる

ひっかかる

ひっかける 2B1 移動対象

引越す 1 実現目的 (**所有権**・使用
権・占有権) の実現

家を引っ越す

引っ張る 2A 直接的な動作の対象

ひぬる 2A 直接的な動作の対象

響く

秘める 2A 直接的な動作の対象 (全体)

表する 2B1 移動対象

評する 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚
の対象

開く 2A 直接的な動作の対象

開ける

拓ける

拾う 2 B2 再帰的移動

広がる

広げる 2A 直接的な動作の対象

ふ

増える

殖える

ふかめる 2C 認知知覚思考(動作)感情感
覚の対象

疑い・親睦・理解をふかめる

吹く 2A 直接的な動作の対象
火を吹く

拭く 2A 直接的な動作の対象
家具を拭く
2B1 移動対象

血を拭く

ふきこむ

ふきだす 2B1 移動対象

煙突から煙を吹き出す (着点がな

い)		振るう	2A 直接的な動作の対象
含む	2A 直接的な動作の対象	振るえる	
含める	(入れる) 2B1 移動対象	ふるまう	2B1 移動対象
膨らむ			お金をふるまう (移動してい
老ける		く)	
更ける		触れる	
ふさぐ	2A 直接的な動作の対象	扮する	
穴をふさぐ			
伏す	2A 直接的な動作の対象 (全体)	〜	
名を伏す		経る	3 移動・ 通過 ・出発
臥す		隔てる	
ふせる	2A 直接的な動作の対象 (全体)	減らす	1 実現目的
名を伏す (出さない) 比喩的		減る	
防ぐ	2A 直接的な動作の対象		
ぶつかる		ほ	
太る		報じる	2B1 移動対象 (情報伝達)
踏む	2A 直接的な動作の対象	報ずる	2B1 移動対象 (情報伝達)
ふみこむ		抛る	2B1 移動対象
踏み出す	3 移動・通過・ 出発	ほうりこむ	2B1 移動対象
増やす	1 実現目的	ほうりだす	2B1 移動対象
教室を増やす		吠える	
殖やす	1 実現目的	誇る	2A 直接的な動作の対象
子牛を増やす (結果的)		乾す	2A 直接的な動作の対象
ぶらさげる	2B1 移動対象	干す	2A 直接的な動作の対象
振る	2A 直接的な動作の対象	施す	2B1 移動対象
手を振る (動かす)		褒める	2A 直接的な動作の対象
降る		掘る	1 実現目的
振り返る	1 目標 (方向) 後ろを振り返る		井戸を掘る
(到達) 社長を目指す			2A 直接的な動作の対象
ふりむく	1 目標 (方向)		土を掘る (土に動作を加える)

惚れる

水に砂糖を混ぜる

2A 直接的な動作の対象

ま

水と砂糖を混ぜる

参る

混ぜ合わせる 2A 直接的な動作の対象

任せる

2B1 移動対象

待つ

賄う

2A 直接的な動作の対象

間違う

2C 認知知覚思考(動作)感情感覚
の対象

(お金をうまく使う)

費用を賄う

間違える

2C 認知知覚思考(動作)感情感
覚の対象

曲がる

巻く

2A 直接的な動作の対象 (全体)

まつる (裁縫)

ウナギをたまごで巻く

まとまる

ご飯を海苔で巻く

まとめる

2A 直接的な動作の対象

2A 直接的な動作の対象

ばらばらの状態を一体化する

(動作を加える対象)

学ぶ

2 B2 再帰的移動 (情報伝達)

ホースを巻く

まぬかれる

2B1 移動対象

招く

2 B2 再帰的移動

手に包帯を巻く

守る

2A 直接的な動作の対象

撒く

2B1 移動対象

迷う

蒔く

2B1 移動対象

丸める

2A 直接的な動作の対象

巻き込む

2A 直接的な動作の対象 (全
体)

回す

2A 直接的な動作の対象

回る

3 **移動**・**通過**・**出発**

まきつける

2B1 移動対象

み

負ける

みる

2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の
対象

曲げる

2A 直接的な動作の対象

針金を曲げる

見上げる

2C 認知知覚思考(動作)感情感
覚の対象

まごつく

まさる

見当たる

増す

混じる

見合わせる

2A 直接的な動作の対象

混ぜる

2B1 移動対象

見出す

2C 認知知覚思考(動作)感情

	感覚の対象	認める	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象
見受ける	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象	見直す	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象
見える		みなす	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象
見送る	2A 直接的な動作の対象 (延期する) 実施を見送る (中止、やめる) 人を見送る (さようなら)	見逃す	失敗・損失の対象
見下ろす	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象 (下を見ること) 下界を見下ろす	見張る	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象
磨く	2A 直接的な動作の対象	見開く	2A 直接的な動作の対象
見かける	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象	みまう	2A 直接的な動作の対象
見込む	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象 (予想する)	見守る	2A 直接的な動作の対象
見知る	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象	見渡す	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象
見せる	2A 直接的な動作の対象	む	
満たす	2A 直接的な動作の対象 容器を水で満たす	向かう	
乱す	2A 直接的な動作の対象	向かい合う	
乱れる		迎える	
導く	2B1 移動対象	向く	1 目標 動作の向かい進んでいくところの方向 東を向く／私のほうを向く
見つかる		剥く	2A 直接的な動作の対象
見つける	2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象	向ける	2B1 移動対象 銃口を相手に向ける
見つめる	じっと見る 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚 の対象	結ぶ	2A 直接的な動作の対象
		結びつく	
		結びける	2A 直接的な動作の対象
		め	
		命じる	

命ずる 2B1 移動対象 (情報伝達)

めがける 1 目標

めく (接尾)

恵む 2B1 移動対象

めくる 2A 直接的な動作の対象

めぐる 3 移動・通過・出発

国内をめぐる／いろいろな観光地をめぐる

目指す 1 目標

目立つ

面する

も

儲かる

設ける 1 実現目的

儲ける 1 実現目的

申す 2B1 移動対象 (情報伝達)

申し上げる 2B1 移動対象 (情報伝達)

申し込む 1 実現目的

申し出る 2B1 移動対象 (情報伝達)

燃える

燃え上がる

もぐりこむ

もたらす 2B1 移動対象

持つ 2A 直接的な動作の対象

→所有の対象

用いる 2A 直接的な動作の対象

持ち込む 2B1 移動対象

持ち出す 2B1 移動対象

もてる

戻す 2B1 移動対象

基づく

求める 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚
の対象

戻る 3 移動・通過・出発

物語る 2B1 移動対象 (情報伝達)

揉む 2A 直接的な動作の対象

催す 2A 直接的な動作の対象

もらう

漏らす 2B1 移動対象 (情報伝達)

秘密を漏らす

2B1 移動対象

吐息／声を漏らす

盛る 2B1 移動対象

もりあがる

漏れる

や

焼く 2A 直接的な動作の対象

妬く 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の
対象

役立つ

妬ける

焼ける

養う

休む 2A 直接的な動作の対象

休める 2A 直接的な動作の対象

痩せる

やっつける 2A 直接的な動作の対象

やとう 2A 直接的な動作の対象

破る 2A 直接的な動作の対象

敗れる

破れる

止む

已む

病む

やる 2A 直接的な動作の対象

2B1 移動対象

やりきれる

ゆ

有する

行く 3 **移動**・通過・出発

行き届く

ゆすぶる 2A 直接的な動作の対象

揺する 2A 直接的な動作の対象

強請る 1 実現目的

お金を強請る

譲る 2B1 移動対象

茹でる 2A 直接的な動作の対象

指さす 1 目標

揺れる

よ

酔う

要する

横切る 3 移動・**通過**・出発

よこす 2B1 移動対象

汚れる

止す 2A 直接的な動作の対象

寄せる 2B1 移動対象

装う 2A 直接的な動作の対象

呼ぶ 2B1 移動対象 (再帰的)

来るように伝える

2A 直接的な動作の対象

大声で名前を呼ぶ

呼びかける

呼び出す 2B1 移動対象

読む 2A 直接的な動作の対象

本を大声で読む

2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の

対象 (内容の認知)

本の内容を読む／子供に絵本を読む

よみがえる

依る

因る

抛る

寄る

喜ぶ 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚の

対象

れ

れる・られる

ろ

論じる 内容について相手に対象物を伝達

する

論ずる 2B1 移動対象 (情報伝達)

わ

沸かす 1 実現目的

お湯を沸かす

2A 直接的な動作の対象

水を沸かす

湧かす 2A 直接的な動作の対象

(抽象的)

意欲を湧かす

分かる

わかれる

湧く

分ける 2A 直接的な動作の対象

忘れる 2C 認知知覚思考(動作)感情感覚

の対象 (内容の認知)

渡す 2B1 移動対象

渡る 3 移動・**通過**・出発

橋を渡る

詫びる 2B1 移動対象 (情報伝達)

謝罪の気持ちを伝える

笑う 2A 直接的な動作の対象

相手を馬鹿にする

割る 2A 直接的な動作の対象

わりきる 2C 認知知覚思考(動作)感情感

覚の対象 (内容の認知)

